

cover illustration by ちよびべろ

連載&読み切り小説

山本沙姫×こうさくう  
上田ながの×A.S.ヘルメス  
新居佑×牡丹  
斐芝嘉和×森ぐる太  
千夜詠×鳥三  
花房寛×おのであ  
空蟬×ちよびべろ

えっちマンガ&4コママンガ

『監獄戦艦3』

楠木りん  
原作:Anime LILITH

『思春期なアダム』

天海雪乃  
原作:さかき傘

ぼぶえ  
MISS BLACK

しーあーる  
嘉納あいり

今号の特集

# 強制スクリュー

カラピンナップ

期待の新作美少女ゲーム(クルセイドハートカノン)

KAGEMUSYA

ちよびべろ

うるし原智志

立ち読み版

表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス



魔法少女 YUMI  
恥悦の強制ストリップ

小説 / うつせみ 空蝉  
NOVEL

挿絵 / ちよびぺろ  
ILLUSTRATION

人質を取られた正義の魔法少女が  
衆人環視の中、自ら柔肌をあらわにしてゆく!!



「おい、あれ見ろよ」「やだあ……何あれ」

休日という事もあり多数の人でこった返す繁華街。普通に歩くだけで肩が擦れ合うほどの混雑の只中に在って、一人の少女が周囲の数多の視線を惹きつけざわめきを生んでいた。

「何かのコスプレなのかな……」「にしたってココでするか普通？ アキバにでも行きゃいいのに」

黒のボディタイトの上に赤を基調とする奇抜な衣装を羽織った姿は、事情を知らぬ者にそう言われても仕方がない。

着ている当人ですらそう思う。思うがゆえに生じた恥じらいが動作に表れ、自然と内股で歩く。当然姿勢は不安定となり、端が羽状となったガウンから覗く臀部が左右に揺れた。

「場違いすぎるよね。空気読めてないのか、よっぽど目立ちたがりなのか」

腋から肩にかけてと、ミニスカートからは太腿のかなり際どいラインまでが覗いている。戦闘の最中にあるのは機能性を感じるのみだった衣服が、指摘を受けて初めて羞恥の種となる。

一見してわかる恵まれたボディラインに対する同性の嫉妬と、それをひけらかす事に対する嘲り。

(違うの、そんなつもりじゃ、ない……)

真実を告げたくとも、それは禁じられている。募る歯痒さが、余計に少女の恥じらいに拍車をかけた。「でも結構可愛くね？ 髪長いいし」

ポニーテールに結った黒髪が歩むたびにさらりと舞うのを見咎めて、感嘆の声を上げる者。その声を聞き留めて、これまでとは違った理由で、少女の頬が火照りに染まる。

「あんだけ短いと、何かの拍子にケツ見えそ」

臀部に視線が集まっているのに気づいていればこそ内股気味に歩む。その腰の揺らめきを艶めかしく見て取って、ほくそ笑む者。

異性の好色発言も断続的に少女の耳に届き、羞恥と、そのように陰口を叩かれる行動を取っている己に対する情けなさを募らせる。突き刺さるように肌で感ずるのは、男女問わず異物を見つめる好奇の視線だ。

「うう……」

泣き出したい気持ちを、嗚咽ごと噛み締めた唇の奥に押し込める。

(好きでやってるわけじゃないの。あなた達の命を守るために……)

言えるはずのない真実を呑み込んで、伏せた眼から大粒の涙がこぼれ落ちる事さえ我慢した。

前を向き醜態痴態を披露し続けていなければ、人質を殺すと脅されているから。

(みんな、事情を知らないんだもの。酷い言われ方をしても、仕方がないの。だから……っ)

耐えきってみせる。涙の代わりに決意を潜ませた視線を上げれば、相も変わらず数多の好奇の視線が突き刺さる。

「ねえねえ君。名前、何ていうの。教えてよ」

ついに興味半分の声をかけてくる者まで現れた。馴れ馴れしく寄ってきた見るからに軽薄そうなナンパ男を、会釈と曖昧な笑顔でやり過ごそうとするも

「答えてやれ」

少女の頭の中で、当人の物でない声が命令を下す。伶俐に淡々と響く、少女のみに聞こえるその声の指示は、絶対。

「……ユーミ、です」

「へ？ なに、ハーフなの？ それとも……あ、ハンドルネームってやつ？」

当初面喰らいつつも食欲さに陰りのない男。その肩向こうでは、名乗りを聞き留めた女性三人連れが

「なんか少女趣味」だの、「自意識過剰そうだし自分で付けたんじゃない」「笑っちゃ悪い」だの。好き

放題に言い合い、忍び笑いを堪えている。

——高梨友美たかなしともみというれつきとした本名があるけれど、さすがに知られたくない。

(この姿でいる時の私はユーミ……)

嘘はついていない。魔法少女ユーミ。それが人知れず魔の者と戦ってきた少女の、もう一つの名だ。

「——どうした。ただ歩いているのみでは、いつまでも経つても終わらぬぞ」

そして今もユーミの頭に響く声の主こそが、魔の手の手。人質を盾に魔法少女を負かし、さらに卑怯な要求を連ねてくる思まわしき相手に他ならない。

(人質のため。この場にいる皆を、危険に曝さないためだもん。私人、恥ずかしい思えば済むんなら……このくらい、っ)

「貴様を守ろうとした無知なる者々の面前で、無様な痴態を曝すのだ——」

あらかじめ脅迫相手から授けられている指令を脳裏で復唱し、耳まで真つ赤になったユーミの震える指先が、赤い衣装にかけられる。

「ん？ どつたの、ユーミちゃん。暑いんならそのガウン脱げばいいじゃん」

びつちりと肌を包むボディスーツ越しの胸を見た。そんな魂胆が見え見えの、ナンパ男の、好色に緩んだ眼差しと猫なで声には、正直嫌悪が湧く。

否、こんな人にだつて善意や良い所はあるはず。

(私が勝手に意識しちゃってるだけ。そうよ……。人間を守る使命を帯びた私が、疑っちゃいけない)

男が前振りをしてくれたのだ。この機を逃すと羞恥に押し負けそうな気がして、急かされた少女の細指がガウンにかかる。

「あ、の……見ないで。……お願い……っ」

「へ？」

ナンパ男のきよとんとした表情を見返す間もなく、ユーミの手が赤い衣装を左右にめくつた。

めくれたガウンの下。ぴっちりした衣装に押し潰されながらもふくよかな丸みを見せている双丘を視界に捉え、ナンパ男が感嘆した。

「うはっ、大胆。スタイルいいじゃん！」

行きかう人々の注目もより高まり、好奇と軽蔑と好色の視線がユーミの胸元、ただ一点に注がれる。

「うら……」

——恥ずかしい。お願いだから見ないで。

再度懇願したい思いに駆られるも、自ら見せつけるような真似をしておいて、聞き入れられるはずもない。結局「人質のためにしているのだ」と内心で復唱し、羞恥と動揺を押しさえ込め他なかった。

「あれ。ここんとこ、裂けてない？ ね、ほら、ユーミちゃん。ここの、胸の下のこと」

一番間近で注視していたおかげだろう。目敏く見つけたナンパ男が問いながら、指を伸ばしてくる。指摘するのに乗じて胸に触れようとしているのは明白だった。

（人の弱みに付け込んで……うん、ダメ。こうして疑心暗鬼にさせるのが魔の者の手なんだから！）

ポディスーツに生じた小さな裂け目——男の言うように右乳房の真下にあるそれは、先刻の戦闘で魔の者によってつけられた物。浅く衣装を裂くだけに終わったこの傷さえも、もしかすると魔の者の策通りに拵えられたのかもしれない。

「……っ！」

隠しきれない苛立ちは態度に表れ、迫り来る男の手を、必要以上の大きな動作で避けてしまう。

「あー、はは。ごめんごめん、触るつもりじゃなくてさ。その、綻びの事教えようと思っただけさあ」

かわされた男が一瞬鼻白み、すぐさま愛想を取り戻して弁解し始める。さりげなく距離を詰めてきている男の抜け目なさや凶々しさ、執拗性に、また、ユーミの背に悪寒が奔る。

——こんな人の前で、見せないといけないのか。

『そうだ。お前が守ろうとする人間どもに、曝せ』  
そうしないと、敵の手にある人質の命がない。他に選択肢など、ない。

立ち止まり、震える指先をポディスーツの裂け目に這わせる。こうする他にないのだと、足掻き喘ぐ己の心根に何度も言い聞かせ——。

ピイイツ——！ 魔法少女の衣は、あつけなく裂け目にかかった魔法少女自身の、この期にあつても震え迷う爪によって、引き裂けていった。

直後にプルンと揺らいで現れた二つの膨らみに、周囲の視線が集中し、同時にいつそう盛大なざわめきが巻き起こる。

「嘘っ」「やだ信じらんない」

同性からのあからさまな軽蔑の言葉が耳朶を灼く。うっは、生乳とか。マジか！

間近で凝視するナンパ男の興奮ぶりに触発されたかのように、無数の異性の視線。いずれもキラキラと性的興奮に煌めいて、ユーミの乳肌突き当たる。

「ふ、うら……っ！」

熱い——日中の日差しでなく、身体の内から迫り出してきた恥じらいの焔に煽り立てられて、乳肌が汗を噴く。身じろいだその背に、悪寒と緊張の震撼が注いだ。

その都度舞う黒髪の有様にすら、興奮した様子の子の男達のどよめきが響く。

「あの年で痴女とか。マジ終わってるよね」

「ああでもないかと興奮できないんでしょ、変態っである意味かわいそうなんじゃん？」

女達の声には軽蔑に加え、憐れみめいたものまで混ざりだしている。

——違う、好きでやっているわけじゃないの！

よっぽど叫びたい衝動に駆られたユーミの耳元で

「……ね。乳首。勃ってるよ……」

ナンパ男が耳打ちした。その瞬間、過去にない感情と感覚に見舞われて、ユーミの全身が電気ショックを浴びたみたい飛び跳ねる。

「う、嘘……っ」

「や、見りゃわかるっしょ」  
得意満面の彼から視線を逸らし、己の胸元を凝視した。そうして再度少女は心身を強張らせる。

桜色のはずの乳頭が、充血して赤みを増し、隆起していた。猛烈な羞恥と混乱に襲われるも、上体を伏せたり、手で覆い隠す事は魔の者により前もって禁じられている。

（ど、う……して？ こんな恥ずかしい事させられるのに、わ、私の身体どうなっちゃってるの!?!）

自ずから胸を曝した事実さえ消し去りたいほど、恥じ入っているというのに。

「——さあ次のステップだ。教えた通りに言いながら、衣を脱ぎ捨てていくのだ——」

魔法少女の誇りごと、と付け加えた魔の手の者の声が、嬉々と弾む。連中にとつて人の欲望は美味なる糧。

敵が力蓄えるための助成を担っている己の不甲斐なさを恥じ、ユーミは唇を噛み締める。

——最低だ。けれど、やらなければ人質は助からない。やるせなさや怒りをたぎらせる事で、泣き出したいのを我慢する。

（みんなの、ためだもん……っ）

全て相手の計算ずくなのだとしたら——空恐ろしい想像に苛まれたユーミの身が再度震え、弾んだ乳房を見てまた多くの男性から歓声が上がった。

それらの劣情をよりいっそう煽り立ててしまう結果を生むだろうと判っているながら、

「ユ、ユーミの……裸……っ。存分に見て、勃起お

ちんちんシコシコしてくださいっ……。ね……っ」

魔の手の者の指示通りの言葉を、九割方早口で、

「……ね。乳首。勃ってるよ……」

語尾に慌てて媚を足して、吐きつける。

「マジで痴女なんだあ。……さすがに引くわあ」

言葉に軽蔑を滲ませる一方で、より明け透けに、傾げた視線を乳肌接近させてくるナンパ男。

「お、お触りは駄目ですけど、ザ……」

そのスケベ面から距離を取りつつ、言い淀む。

腰をくねりかわしたために、またも乳房が揺れ、歓声が湧いた。

「ちえ。もうちよつとだったのにな」

不満げにぼやいたナンパ男の視線が、舐るように乳首をなぞってゆく。

「ふあ、あ……やああ」

ナンパ男だけではない。今やユーミを取り囲む形で集結した男達の全てが、性欲まみれの瞳でもってただ二つの乳房を刺し貫きまくっている。

（嫌……そんな目で、見ちゃ……イヤらしい眼で、私の胸を汚さないで！）

魔法少女として、人を守る。疑いもなく信じていた使命までもが穢されているような心持ちにさせられてしまうから――。

少女の心内で轟く慟哭は、届かない。

「見せつけといて、そりゃないっしょ」

しつこくするナンパ男の手が、魔の者のそれと重なって映る。

（――やめて！）

「おわっ!?!」

反射的に動いた魔法少女の身体が迫る手首をつかみ、氣つけば派手に放り投げていた。アスファルトに背から転げたナンパ男が瞳に怯えを奔らせ、一目散に逃げてゆく。

「ちよつと……これってやばくない？」

「通報した方が良いんじゃないかな……」

見物客の中から、そんな声が聞こえた。しまったと思つた所で、後の祭り。自らが制限時間を課す格

好となり、窮した魔法少女が唇を噛む。

「クク。魔法少女が人間の警察機関に、か。笑い話にもならんな」

人の欲望については年端もいかぬ少女以上に知り抜いている魔の者の、これも全て策の内か。脳裏に響く哄笑に苛まれつつ、ユーミの唇が再度開く。

時間は限られている。早く済ませてしまわなければ。そうした焦りと義務感が、年頃娘の羞恥心を束の間押さえ込む。

「触るのはダメですけどつ。わ、私の……裸に、ザーメン」

――ああ、とうとう言ってしまった。

口にした瞬間に、ぼつと顔から火が出る錯覚にすら囚われた。身じろいだ胸がジンと恥じらいの疼きに包まれる。それでも、教えられた通りに告げなければ、始まらない。

「みんなのザーメン……引っかけて、マーケティング……してほしいなっ」

媚をたっぷり含有させた物言いに加え、小首を傾げ、ユーミ自身が思う「ぶりっ子」を精一杯演出した。当然の如く、同性からの嫌悪と、異性からの性的な注視が強まる事を理解した、その上で。

「マジで言ってるのの子？」「どうするよ？」

「や。いくらなんでもこんな所でヤバイだろ」

互いに互いを牽制し合う言葉を投げかけて、鼻息荒らげた男達。他人の目を気にしつつも情欲を抑えられない、牡の群れがにじり寄る。氣つけばユーミの逃げ道を潰すように包圍網は狭められ、無数の鼻息がポニーテールをそよがせる距離に迫っていた。

――もう、逃げられない。

（人を守るのが魔法少女の使命だもん。だから……頑張る……!）

グツと握った拳の熱に意識を向けるあまりに、見過ごす。否、あえて氣つかぬ振りをした。

注目を浴び突り勃つ乳首に、嫌悪以外の甘い疼きが奔り出している事を信じたくないあまりに。

「おいおい、焦らすなっ」

まずはマントから。これは局部の露出に直結しない事もあり、比較的あっさり脱ぎ落とせた。

が、指先が震えているせいでベルトがうまく外せない。カチャカチャと音が鳴るばかりの状況に、焦れた男達からの言葉は、怒声と歓声が半分半分。

それでも少女自身が取り外すのを見守っているのは、先刻投げ飛ばされたナンパ男の事が脳裏に残っているから。中には「ストリップつてのは、この待ちの時間が醍醐味なんだ」なんて居合わせた若者に講釈を垂れる中年男性もいる。――ストリップ。

正義の使命帯びた魔法少女に似つかわしくない響きを浴びせられる都度、ユーミの心が軋む。

（自分から脱いで、見せびらかしてるんだから。そう思われても、仕方ないよ……）

諦観めいた感情がある一方で、止め処もない恥辱に悶え泣かされてもいる。その事に氣づく者が誰一人いない状況に、齒痒さと情けなさ、惨めさを覚えてもいた。

「お、おおっ」

やつと外れたベルトが、少女の腰のくびれに乗って足元に向かい、ゆるゆる滑り落ちてゆく。

囚らずもそれがまた焦れを生み、男達の何人かが前屈みの姿勢を取って股間の膨らみを隠していた。続いてガウンに手をかけた瞬間にも、離し立てるような歓声と、熱視線。いずれも少女の心を逆なでして、焦りと羞恥を増幅させる。

「ああ乳の谷間が……。見入ってたのによお」

ベルトを外すため前屈みになっていた、その胸元に乳房が垂れ下がる様を注目されていた。

なにげない所作にすら異性は情動を覚える。望まぬ形で氣つかされ、今更ながらに恥じらい悶えた少

女の腰が、イヤイヤと首振るようにくねる。  
(やめて。声に出して言わないで！)

——男の人の性欲欲って、なんて癡猛で貪欲なの。  
恐怖と、怯えと、さらに未知の、諸々の想いが混濁した感情——。ユーミ自身理解できぬまま煩悶の表情を作り上げ、背に奔る痺れに身悶える。

恥と肉悦を噛み締める女の表情を目にして、牡達  
が歓喜した。直後にベルトが足元に落ちる。

「いぞ〜！」「最高だよユーミちゃん」

これが報酬だと言わんばかりの、下卑た歓声。嫌  
でしかないはずのそれらに対し、少女の腰奥で熱い  
何かが蠢いた。

耐え難い熱を振り落とすように身震いすれば、汗  
と、黒髪からのシャンプーの香りがまき散り、狭い  
包囲の内に充満する。情欲染み出す男達の熱気と併  
せて、淫香と化したそれが男女双方の理性を脅かす。  
(次は……ガウン。早く、しなきゃ……)

身に潜み蠢く焦燥感。決して恐怖や不安一色では  
ない得体の知れぬ感覚にせつつかれるまま、上体を  
起こす。

最初そうだったように胸の膨らみはガウンが覆つ  
てくれている。けれど乳房を押し潰していたボディ  
スーツがない状態では、ガウン自体が乳に押し上げ  
られ、乳の丸みを際立たせる。中途半端な隠匿が  
かえって牡を惹きつけ、さらなる興奮を呼び寄せる。  
(めくったら、またおっぱい、見られちゃう。こん  
なに近くでたくさん男の人に囲まれた状態で……)

自ずからめくる、見せつける——想像しただけで、  
少女の乳首は疼き、細腰がくねった。

「先にスカートでもいいんだぞ〜！」  
腰のくびれがより際立つ、安産型に這ったヒップ  
見たさに、嘸しが飛ぶ。

「はあ、あ……ああ……つ」  
男達の視線を意識するほど、ユーミの肢体に熱が

こもる。このままでは魔の者の思う壺。頭で理解し  
ていても、怒涛の勢いで雪崩れ込む熱情を押し返せ  
なかつた。

暑い、熱い、アツい、早く脱がせて——火照りに  
侵された身体と心の呻きに根負けして、ガウンにか  
かつた手指が左右に開く。

「うは。最つ……高！」「若いと張りが違うな！」  
男達の視線を浴びた乳肌は、火照りを冷ますどころ  
かますます淫熱を帯びて汗を噴く。携帯で写真を  
取るシャッター音。その音に一々感応して、怯えと  
陶酔に酔った腰がくねり舞う。

「んうあつ……！ や、あ……」

ユーミが脇を締めて少しでも露出面積を減らそう  
と試みる。が、締めた脇と乳房が擦れ合い、特に勃  
起状態の乳首からのジンとした疼きに見舞われて、  
喘ぎ声が吐き漏れた。

「たまんねえ」「俺、ガチ勃起してるわ」「俺も」  
少女のなで肩からガウンが滑り落ち、身じろぎに  
合わせて脱げてゆく。脱げたガウンを手首に絡めた  
まま陶然とした目を包囲網に向け、連中の股間——  
軒並み前屈みの、股の膨らみを注視した。

(勃起……？ みんなが私の胸を見て、あんなにつ  
……興奮……？ あ、はあつああ……！)

動悸は激しくなる一方だ。膝から下が震えだし、  
女芯からの火照りが鎮まる気配もない。

「そら、次だ」  
ガウンを取り落としたばかりの少女の脳裏で、次  
に取るべき行動指令が復唱される。

「お、お願いだから。見ててください……ね♪」  
媚びた言動の直後に、少女の手がスカートにかけ  
られる、その瞬間、またも大きな歓声を発して男達  
が沸き立った。

腰を振りながら、じわじわと徐々に、焦らす寸積  
もりでミニスカートを脱ぎ下ろしてゆく。

（本当は早く脱いで済ませたいの。でも、魔の者の  
指示だから。みんなを守るためのなおつ……）  
懸命に心の中で唱えた言葉が嘘臭く思えてしま  
うのは、なぜか。  
鼻息荒く包囲を狭める男性達の様子が、初心な少  
女には異常な光景に見えた。だからきつと、自分自  
身も異常なのだと思う。  
(きつと、魔の手の者の魔力で、男の人達も、私も  
おかしくされてるんだわ)  
だから、仕方がないのだ。言い訳を連ね、尻を  
振る。振るたび湧き立つ歓声を浴びて、尻肉が疼い  
ているのだって、魔の者のせい。奴が蓄えた欲望を  
使って、悪さをしているのだ。  
胸の鼓動はときめいているのではなく、危機感に  
怯えて高鳴っているのだ。理由を拵えればその分だ  
け罪悪感が薄まった。  
「上から繋ぎの衣装だったんだな」  
「なんか……レオタードってエロいよな」  
「ボディラインくつきりだもんだよ。つかあれ、ほら  
股下のとこ！ スジマン浮いてんじゃね!!」  
ショーツが見られると思つたのに、なんて言われ  
る事を覚悟して脱いだのに、賛辞の声が大勢だ。緊  
張していた分、安堵し、安堵した分、恍惚が強まる。  
優越的な昂りは、少女の動作にも影響を及ぼす。  
「うひょお」「いぞ、ユーミちゃん最高！」  
また脇を締め、乳の谷間を強調する格好となった。  
ボディーツを脱ぐため、仕方なくだ。乳房に集中  
する視線を受け止めて、熱い息を吐きつつ。ユーミ  
は摘んだ衣服から首を抜く。  
「んう……つはあ、ああ……見られて、るうう」  
胸の下まで脱げ落ちたスーツと乳首が擦れてまた、  
一瞬意識が白むほどの愉悦に襲われる。自然と発し  
た己の声の湧けぶりに、ユーミ自身目を剥いた。  
ぶるんつ、と音が鳴りそうな勢いで、衣装から解

金髪爆乳バニーVS黒髪微乳バニー？  
ライバルは強制挿入とともに！



# 爆乳バニー 宇佐美マリア

美艶探偵の怪淫事件簿

第二話 淫縛のシャッターチャンス

やまもと さき

小説 NOVEL 山本沙姫

挿絵 ILLUSTRATION こうきくう





つ並んだスイカを髷髷とさせる爆乳の上で腕組みして話しかけるマリアは、赤い瞳を吊り上げた不満げな表情を浮かべる。

話が終わったら、人身売買事件の捜査状況聞き出す気まんまんなのだ。

「すいません朝早くに。実は先日……」

テールを挟んで向かいに腰かける大滝が、神秘的な面持ちで口を開く。

カチャッ！

「お待ちせしましたーマリア先生。朝ごはんできまして……って叔父さん!? なんているの??」

するとそのとき、朝食を載せたワゴンを押して事務所に入ってきた空也が、思わぬ客人に驚き目を丸くして素っ頓狂な声を上げる。

「お空也。わたしの分まで用意してくれるとは気が利くな。おじちゃんほうれいしぞ。さて宇佐美先生、食べながらお話ししましょう……」

途端に一変して、目尻を下げてだらしな表情に変わったお調子者の髭面男は、二人分の料理を勝手にテールへ移す。

用意されたメニューは、柔らかな湯気がたちこめる炊き立ての白飯に、脂の焦げた芳ばしい香りを漂わせた焼き塩鮭。

それに、豆腐の味噌汁に玉子焼きなどなど、どこか懐かしい伝統的な日本の朝ごはん。すべて、有能なアシスタントが丹精込めて作ったものである。

「ちよっ！ それはおいらとマリア先生の分なんだから勝手に取らないでよねっ！ あと子供扱いも禁止、って聞いている!!」

「ふむ、鮭の焼き加減はいいし……んぐ、ご飯もちやんと、ほうっ、お米が立っている。なかなかの腕前じゃないか、むぐっ……」

慌てて制止する甥にも留めず、大滝は手にした箸をせわしなく動かして、できたての温かな料理

を次々と口へ放り込んでいく。

「これならすぐにでもいいお婿さんになれるぞ、嫁を紹介せんといかん。どうだ？ わたしの部下に氣立てのよい娘がいるがお見合いしてみないか？」

「甥っ子のことより自分が先でしょ、ってあーっ！ 玉子焼きまで横取りして、ほら、叔父さんには特別に海苔と梅干だけあげるから、これで十分……」

カチャカチャと食器を打ち鳴らすやかましい音を立てながら、髭面の中年男とあどけなきの残る小柄な青年が、必死に朝食を奪い合う。

「……」

賑やかに揉める二人の前で、一人黙々と食事を続ける金髪美女の姿は実に優雅。

口元へご飯やおかずを運ぶ滑らかな箸使いや、音を立てず静かに味噌汁を啜る仕草は、まるで高級料亭で贅沢な懐石料理をいただく、上品な会食のよう。

「それで、急用ってなんなんですか？ まさかウチに朝食をとりよきた、わけではないですよね……」

最後に緑茶を飲み、湯呑みを静かにテールへ置いて一息つくると、マリアは皮肉混じりの落ち着いた口調で大滝に問いかけた。

「おおっと、すいません。朝飯も食わずに大急ぎで来たのでつい。実は……」

「宇佐美マリアさあーん、この会見、見ていらつしやいますかしらあー」

慌てて食事を中断し、襟を正すベテラン警部が再び話しはじめるのを遮るかのように、聞き覚えのある甲高い声が耳に突き刺さる。

「こ、この声は……」

つけっぱなしのテレビにサッと反射的に目を向けると、そこには白と薄緑色のワンピースを纏った妙にテンションの高い娘が、マイク片手にカメラ目線と喋っている様子が映っていた。

大きな富士額と引き締まった頬のライン。それに、

目尻の吊り上がった黒く大きな瞳が目を引き、見るからに気が強そうな美女。

肩まで届くウェーブのかかった黒髪は、テレビ画面越しにでも柔らかさが伝わってくるほど、少し動いただけでふわりと靡く。

身体つきは華奢ながらそれなりに存在感を示す、二つに割ったプリンスメロンのように美しく整った形の胸。

それに、はつきりした括れのせいで、正面からでもやや大きめに左右に張り出しているのがわかるヒップが目を引き。

肉感的な金髪美女とは違う、可憐な魅力に満ち満ちた彼女は、マリアにとっては天敵とも呼べる存在。「やっぱりあんたか、道明寺美茶っ！ なんでニュース番組なんかに出てるのよ？」

思わず画面に突っ込んだ相手は、今大人気のライトノベル作家にして、日本有数の大企業の社長令嬢。そしてマリアを異様に敵視し、何かにつけて刺々しく絡んでくる困り者である。

「ああ、『パイオレットバーニー』が劇場版アニメになるんですよ。ゲストで大物俳優や人気アイドルが出るから、芸能マスコミが食いついたんですね」

不意打ち的に天敵娘があらわれたのが理解できず、戸惑うマリアに空也が簡潔に説明した。

彼の口から出たのは、月からやってきたウサギ耳のエスパール少女がバーニーガール風の戦闘服に身を包み、悪と戦うという道明寺美茶の代表作。

可愛らしいヒロインとスピード感のある戦闘シーン描写を受けて、現在七巻までの累計が四百万部を超え、アニメ化を熱望されてきた小説である。

どうやら、大物ゲスト目当てでテレビ局が記者発表会を取材した際、原作者の態度があまりにインパクト抜群だったため放送に使ったらしい。

「次の新刊、あなたの辛気臭いオカルト小説と発売

日が重なるけど、今度こそ勝ってみせますわ！ 覚悟していなさいっ！」

カメラに向かってピシッと人差し指を伸ばし、気丈なライトノベル作家は自信まんまんに言い放つ。アニメ化効果で売り上げ増加を見越しているらしい。「……まったく、別にこっちは売り上げ部数勝負とかしてないってのに……」

対して迎え撃つ気などさらさらないオカルト小説家は、一方的な宣戦布告に肩を竦めて呆れた表情を浮かべる。

「……うーむ、ちよつと……話しくくなつてしまいましたな……」

「叔父さんたらまーたはつきりしないことを。もつたいぶらずにさっさと話してよ。昔からそうなんだから……」

スーツのポケットからハンカチを取り出し、額の汗を拭いながら歯切れの悪い口調で話す大滝に、空也がチクリと棘を刺す。

「うむ、実は……先ほど映っていました道明寺美茶先生を、明日のアニメイベントで襲うという予告状が、警視庁に届きまして……」

甥つ子に促されて、髭面の中年警部はようやく話の本题に入った。

「予告状？ 確かに一大事ではあるけれど、なんでそんな話をわたしに？」

話を聞くやいなや、マリアは思わず首を傾げる。二週間前の事件と違い、科捜研すら手を焼くという奇怪な物語があるわけでもない。

「それがその……手紙と一緒に送られてきたのですよ。人身売買事件のときに見つかったのと同じ、謎のDNA混じりの精液で濡れた卵の殻が……」

しかし話が進み、脅迫者の素性と意図を即座に理解した美貌の超科学探偵の顔がサッと引き締まった。「……つまり、この前の事件の第二ラウンド、つて

わけね……」

予告状の送り主は、受精実験と称して我が身を汚したシャドー神山一味と繋がりがあつたに違いない。そして、文面にある「襲う」という言葉には、美茶を自分や神山の劇場に監禁されていた女性たちのように陵辱するという意味が込められているはず。

「わざわざ神山事件とかかわりある物語を送り付けてくるなんて、警察に挑戦でもしてる気かしら？ でも向こうから仕掛けてくるとは好都合ね」

事件に関する数々の謎を暴く手掛かりを得られそうな予感に、超科学探偵は不敵な笑みを浮かべる。「もつと早く先生にお伝えしたかったのですが、念のためDNA鑑定結果を待っていたら、思いのほか時間がかかってこんな直前になつてしまいました」

後手に回つてしまった理由を説明しつつ、大柄な髭面男はその体躯に似合わぬ縮こまつた姿で深々と頭を下げた。

「気にしなくていいわ。で、あいつのことだから、イベント参加をやめるところか、自分で身を守るのとかが言つて警察の警護を拒んでるんでしょ？」

恐縮する大滝を氣遣い、マリアは優しい口調で問いかける。反目しあう仲とはいえ、付き合いが長いだけに美茶の考えが手に取るようにわかつていた。

細身の身体に似合わず、彼女は曾祖父が興した道明寺流拳術の達人。そしてプライドが異様に高いとあれば、公僕の助けを借りたがらないのは想像がつく。

「おっしゃる通りです。そこで、我々の代わりに道明寺先生の傍で、警護をお願いしたいのです。犯人が謎のDNAとかかわりがあるなら、宇佐美先生のお力が必要になりますし……」

両手をテーブルに、パン、とついて、髭面男はやや興奮気味に身を乗り出す。

「いいわ、この依頼引き受けてあげる。わたしもあの

の粘液の正体とか、色々つきとめたいことがあるからね。さて、次はわたしから質問させてもらうわ」「ありがとうございます。で、ご質問とは？」

「神山たちがやつた人身売買事件の方はその後どうなつたの？ ニュースになつてないけど……」

要望を聞き入れてもらい、ホッと安堵の表情を浮かべる大滝に、マリアは真剣な口調で今まで気にし続けていたことを聞いた。

「実はその、神山たちは未だに意識不明なのです。そこで、奴の劇場で押収した顧客リストから売買されたアシスタントの行方を追っている最中でして、被害者の身の安全を守るために報道規制を……」

神山事件の捜査指揮を執っている立場上、知つてゐることは山ほどある。かと思いきや二週間たつてもほとんど進展してゐないのが、申し訳なげなただだし喋りから窺えた。

「顧客リスト？ そんなの見つけたんだ、叔父さんさつすがー」

ますます縮こまつてしまふ叔父を氣遣い、空也がわざとらしく口を挟む。そのリストを探し出したのが、小遣い稼ぎで協力した自分であることを隠して。

「まあ、だいたい予想通りの状況だけど、わたしだつて協力者なんだから少しは情報回してよね」

まるで拗ねた子供のように頬を膨らませた爆乳美女は、口を尖らせて不満を漏らす。

「善処します。ところで宇佐美先生、あなたと空也が見たという、謎の粘液についてはどうお考えで？」

「そうね……」

逆に大滝から神妙な面持ちで質問を返されたマリアはテレビをリモコンで消すと目蓋を閉ざし、湯呑みに残つたお茶を飲み干す。

「わたしと空也が見た緑色の粘液は、人間に憑りついて、肉体と精神を乗っ取る寄生生物よ！」

再びテーブル上に湯呑みを戻し、真紅の瞳を見開いた美貌の天才科学者は、静まった事務所の空気を切り裂く勢いで、鋭く言い放つ。

「寄生生物!？」  
いつになく氣迫に満ちた愛しの人に吸い寄せられるように、叔父の隣に座ったアシスタントは小柄な身を乗り出して聞き入る。

「そう。それで、奴らは自分たちと人間の遺伝子を掛け合わせた新種を作り出す実験のために、マジックショーのアシスタントを監禁していた、と……」  
「う、宇佐美先生……そんなことが、本当に、あるんですか?」

天才科学者の恐るべき見解に、ベテラン警部の野太い声が微かに震える。

「あるわけないでしょそんなこと。デキの悪いオカルト小説じゃあるまいし」

「ぶっ!」

「マリア先生、冗談キツイです」  
真剣な目付きで聞き入っていた男二人は、アツケラカンとした答えに思わずテーブルに頭をぶつけようになるほどガクッと崩れた。

ジャンボコミックフェスティバル。それは、埼玉の巨大展示施設で夏と冬の二回、四日間にわたり開催される日本最大の漫画アニメイベントである。

毎回、四日間でのべ五十万人の漫画アニメ愛好家が世界中から集まるとあって、今回も会場周辺には早朝から人々人の長蛇の列。

しかしマリアは出版社の伝で出展者入場証を手に入れたため、大滝の力を借りることなく空也ともども開場前に難なく入ることができた。

だが、本当に大変なのは中に入ってから。

「な・ん・で・あなたがわたくしの密着取材なんて

したがるのかしら? 宇佐美マリアさん?」  
企業エリアと呼ばれる出版社や映像制作会社が出展するスペースの一角に、『バイオレットバニー』を制作するアニメ会社がブースを構えている。

入場そうそうそこを訪れたマリアは、さっそく美茶の嫌味攻撃にあっつしまつた。

「それは、その……こ、今度、美人ライトノベル作家が、アニメのイベントで悪霊に襲われるって話を書くから、その……参考に……」

襲撃予告犯からの警護や、それに絡むと思われる粘液生物の調査のことをあかさすわけにはいかず、咄嗟に苦い紛れの言い訳を口に出す。

「ふーん。まあ、その設定ならわたくしがモデルとしてベストなのはわかりますけど、わざわざ敵に塩を送るほど、わたくし甘くはなくてよ」

小振りな胸の上で細い腕を組み、冷めた視線を送りながら華奢な美女は苦々しい口調で言い放つ。

「そこをなんとかお願いよ。ブースの責任者には許可取ってるし、大作アニメ映画化されるほどの人気作の著者って、これほどイメージに合う人ほかにいないんだから……」

棘のある美貌のラノベ作家に対して、引き撃つた笑みを浮かべつつ拝むように手を合わせて頭を下げるオカルト作家はあくまで低姿勢。

機嫌を損ねて警護できなくなつては元も子もない。(……まったく、なんでわたしがおべつか使わなくちゃいけないのよっ! こっちはあんたを守つてやろうっていうのに……)

一つ年下の嫌味娘に対して、普段なら軽く受け流す大人の対応ができる度量は持ち合わせている。

しかし大勢の前で延々と絡まれるのは、どうにも面白くない。道行く人が皆、チラチラとこちらを見てニヤついているのがわかる。

「あれ、道明寺美茶と宇佐美マリアだよな」

「ああ、噂には聞くけどホントに仲悪いみたいだね」  
イベント開始準備で騒がしい会場内なのに、妙にヒソヒソ声が耳につく。

「……わかりました。こちらの処理が終わり次第、そちらへ向かいます……」

するとそこへ、黒縁眼鏡をかけたスーツ姿の中年男が、慌ただしくスマホで話しながら通りがかる。

「あらマネージャーさん。何か問題でもございまして?」

声をかける美茶の話と、首から下げた出展者証から察するに、どうやら相手は芸能事務所のマネージャーらしい。

「あつ、道明寺先生。それが、『バイオレットバニー』のコスプレをさせていたたくウチのタレントが乗ったタクシーが事故にあつて、たつた今病院に運ばれたと警察から連絡がありまして……」

テキパキとはつきりした口調で答える彼は、引き締まった面持ちとあいまつていかにもデキる芸能関係者、といった感じ。

(さすが本物は違うわね。この前空也がやつたニセマネージャーとは大違いだわ……)

本職マネージャーの仕事ぶりに感心しつつ、マリアは事の成り行きを見守る。知らない人とはいえ、事故にあつたとなれば気が気ではない。

「事故ですつて? それじゃあ……」

「はい、すぐに代わりのタレントを手配しますが、今日はイベントが多くてほとんどの子が出ていますから、スケジュール調整が……」

「わたくしが言いたいのはそうじゃなくて、すぐに病院に行きなさいということですよ! マネージャーならまずはタレントさんのことを心配すべきよ!」

不測の事態にあつても、あくまで現場優先にしようとするマネージャーに、美茶はキツパリと言いつ

つ。ザワザワとした場内が、一瞬シンと静まった。

(……そう言うと思ったわ……)

日ごろの言動から、他人のことなど気にもしないわがままお嬢様と誤解されがちだが、根は気配りのできる優しい娘であるのをマリアは見抜いている。

天敵ではあるものの、どこか憎みきれない美茶の返事に、思わず笑みがこぼれた。

「あのことはわたくしに任せて、さ、早く!」

「そ、そうですか。では……お言葉に甘えて、失礼します……」

半ば強引に急かされたマネージャは深々と頭を下げると、出口めがけて一目散に駆け出していく。

「……さてと、宇佐美マリアさん。わたくし、一つよいことを思いつきましたわ。密着取材、お受けしてもよろしくてよ」

マネージャを見送ると、振り返った美茶は口元に怪しい笑みを浮かべつつ話しかけてくる。

「えっ、本当に!」

「ええ。た・だ・し、来られなくなったタレントの代わりに、バイオレットパニーに扮して、宣伝に役買ってもらうのが、取材させる条件ですわ」

黒真珠を髷髷とさせる瞳を輝かせ、鋭い口調で言い放つと、サッとブース内に貼られたポスターを指さす。

「バイオ……こつ、これをやれって言うのおつ!」

そこに描かれた、紫を基調としたコスチュームを纏ったウサギ耳少女を見るやいなや、思わず声が裏返ってしまう。

素顔を隠して悪と戦うヒロインらしく、大きな三角帽と菱形のマスクが目を引く彼女は、籠手や腰に下げたサーベルなどから、中世の騎士を思わせる。

その反面、白く柔らかそうなファーの付いたブーツには、所謂変身ヒロイン的な可愛らしさとカッコよさが感じられた。

ここまでは着られる許容範囲なのでまだいい。

(こんなの着たら……見えちゃうんじゃないの?)  
肝心のボディスーツは、乳首が見えてしまうのではないかと思えるほど胸元が大きく開き、両肩も剥き出しの形になっている。

網タイツを穿いているおかげで生脚を晒してはいないが、鋭く切り上がった股間に縦筋がクッキリと浮き出て、まるでボディペイントのよう。

見た感じは、戦うヒロインというよりはショーや酒場を盛り上げるパニーガールに近い。

(またこんなカッコさせられるなんて、冗談じゃない……)

つい先日、潜入調査でマジックショーのアシスタントをしたときのことを思い出し、顔から火が出る。「あら、いつもそんな格好でご自慢のナイスボディを見せびらかしているあなたなら、レオタードぐらいわけないのではなくて?」

「いや別に見せびらかしているってわけじゃ……」

身体中を舐め回すような視線を送って嫌味な口を叩く美茶に、顔を真っ赤にして反論するマリアは、

思わず出そうになった本音をグッと飲み込む。手足を剥き出しにした服を着ているのは動きにくい服装が嫌いだけで、本当は注目されるのは恥ずかしい。などと知られたら、きつとさらなる嫌がらせをしてくるのは火を見るより明らか。

「ふふっ、いいわよ。お望み通りそのコスプレ、してあげようじゃない。ま、あなたみたいな貧相な体型じゃ代わりは務まらないでしょうからね」

胸の内を悟られまいと、恥ずかしがり屋の爆乳金髪美女は身体を軽く仰け反らせ、突き出した胸元を軽く撫でて余裕を見せる。

「くっ……」

認めざるを得ないバストの差を見せつけられて、美茶は唇を噛む。

「あ、いたいた。せんせーいっつ!」

するとそこへ、別行動をとっていた空也が駆け寄ってきた。

「あーら空也くん。わたくしに会いに来てくださったのを。お姉さんうれしいわぁ♡」

彼の声を耳にした途端に、しかめつ面から一変して満面の笑みを浮かべる美貌のラノベ作家は両手を広げて抱き留めよう待ち構える。

(……また悪い病気がはじまったわね……)

何しろ、美茶は自他ともに認める大の可愛い男子好き。小柄でボサボサ頭にふくらとした顔立ちという空也は、まさに彼女の好みにドンピシャリ。

だが、自分好みの愛くるしい少年と思っている彼が、実は三つも年上だとは知る由もない。

「あらっ?」  
華奢な身体を抱きしめようと、力いっぱい閉じたシヨタ好きお嬢様の両手は空を切る。彼女に目もくれず、空也はマリアの前まで来た。

「で、どうだった?」

「とりあえず、ザツと見て回ってみましたけどあの緑色の奴、どこにもいませんでしたよ……」

周囲に気づかれないように爆乳探偵は耳打ちすると、彼女の意図を汲んだ有能なアシスタントは同じく他人に聞かれぬよう小声で答える。

彼は、場内に謎の粘液生物がいなか調べていたのであった。

「もうっ、空也くんったら照れちゃってえ」

無視されたとも気づかず、美茶は振り返ると背後から空也に抱き付く。

「え、あ……道明寺先生。いらしたんですか?」  
「ほ、ほら……あんたがいるとややこしくなるから、早く取材の続きしてきなさい」

慌ててマリアは二人の間に割って入る。  
「取材? …… あ、はい。じゃ行つてきま〜す」

彼女が言わんとしていること、すなわちさらに調査を進めるよう急かしているのを悟ったであろう空は、しがみつくか細い手を丁寧を外し、企業エリアから走り去っていく。

「またあんなバニー姿なんて、見せられないわ……」  
しかし、マリアの本意はほかにあった。  
「空也くうくん。あとで一緒にお食事しましょうねえ」

走り去る愛しい男の子に手を振りながら、美茶は場内に響き渡りそうなほどの大声で呼びかける。眩いばかりの笑顔で。

「ただ今より、第九十六回ジャンボコミックフェスティバルを開催いたします。今日から四日間、漫画アニメの世界で十分お楽しみくださいませ……」

風鈴の音を髣髴とさせる涼しげな声をした女性のアナウンスとともに、日本一熱い二次元創作イベントが始まった。

入場と同時に、待ちに待っていた参加者たちは次々とお目当てのブースへ散っていく。同人誌に限定グッズ、声優ステージと、その目的は様々。

「ど、道明寺美茶先生書き下ろしの短編小説も載っている……『バイオレットバニー』の特製小冊子です。このあとトークショーもありますよ」

企業エリアの一角で、ひときわ目立つ宣伝コスプレイヤーがいる。紫のボディスーツを纏ったウサギ耳少女に扮した、宇佐美マリアド。

「すいませーん、一部くたさーい」  
道行く人が次々と、彼女が手にした小冊子を受け取っていく。

「あ、俺にも一部ちょうだい」  
元々人気作だったことに加えアニメ化でさらに注目が集まっているところへの新作無料配布なのだか

ら、大勢の人が我先にと求めるのも無理はない。  
「あ、はいどうぞ。こちらでグッズ販売もありますけど、いかがですか？」

話しかけられるたびに、精一杯の作り笑顔で慣れないセールストークをする、恥ずかしがり屋の爆乳美女。その心中は穏やかではいられない。

なぜなら、来る人来る人誰もが皆、大きく開いた胸元をチラチラと覗いているのだから。

「……やっぱり胸、目立つよね。この服じゃ……」  
ポスターを見た時点で嫌な予感しかしていなかったが、実際着てみると乳房が左右から押されて予想以上に谷間をクッキリと強調する作りになっているのがわかる。

（これ、ズレたりしないわよね……）

しかし強めに寄せて上げていても、九十センチオーバーのロケット爆乳の弾力を押さえ込めない。動くたびに大きく波打ち、さらに人目を誘ってしまう。おまけにイラストは正面から描かれていたのだからなかったが、背面もかなり大きく開いていて、白い背中が剥き出しになっていた。

（これじゃ、上だけ何も着ていないようなものじゃない……）

さらに尻を覆う部分も股と同じく鋭角的に切り上がり、双曲の谷間にキリリと食い込んで、尻筋に鈍い痛みを与えてくる。

（ちよっと、わたしには小さいわよ。この服……）  
行き交う群衆に気づかれないように、時折細い指先で尻布を引き出すと、網タイツに包まれたすべすべの臀部がプルンと揺れた。

「すいませーん、素顔見せてもらってもいいですか？」  
「あ、その……ごめんなさい。事務所の都合でそれはできないんです」

しかしマスクのおかげで、自分が宇佐美マリアドとバレていないのは不幸中の幸いだった。

もし気づかれていたら、なぜ道明寺美茶の手伝いをしているのかと、興味本位でより多くの人が集まってしまうはず。

（それにしても、なんなのよ、この人ばかりは？  
これじゃあ道明寺の警護にならない……というかあいつ……どこ？）

辺りをキョロキョロ見回してみても、小憎らしいお嬢様作家の姿はどこにもない。

「ふふふふ、いい格好ですわ宇佐美マリアさん。わたくしの新刊とアニメの宣伝、しつかりやってくださいましね」  
人混みに戸惑う姿をカーテンの間から覗き見ながら、美茶は優雅にティータイムの最中だとは、マリアは気づきもしなかった。

「皆様ようこそいらつしやいました。『バイオレットバニー』原作者の、道明寺美茶でございます」  
「えー、アニメ版『バイオレットバニー』の監督を務めさせていただきます佐山基樹さやまもときです。どうぞよろしく」

やがて午後になり、道明寺美茶とアニメ監督のトークショーが始まった。

華奢なお嬢様ライトノベル作家と、無精髭にサングラス姿の中年男という変わったコンビが座るブース前に用意された特設スペースには、大勢のファンが集まっている。

「『バイオレットバニー』小冊子です。こちらではグッズ販売もしていますよ。残り少ないものもありますので、お早めにお求めくださいませ」

その傍らの物販スペース前では、朝に引き続きマリアが小冊子配りとグッズの販促に勤しんでいた。

あいかわらずの引き撃った笑顔で。  
「あらー、バイオレットバニー。朝からご苦労様。その調子で午後もがーんばってねえ」

不慣れたアニメイベントで懸命に働くウサミミヒロインに、原作者は明るい声で呼びかけつつ壇上から手を振る。

「あ、はい。がんばりませう」

一見フレンドリーな態度をとりながらも、人を見下した冷めた視線を送ってくる美茶に、マリアは苛立ちを抑えつつ照れくさそうに手を振り返した。

「犯人を捕まえたなら、そのあとでたっぷりと仕返ししてやるから！」

事態は思わぬ方向に進んでしまったが、それでも任務を忘れてはいない。

（しかし、何も起きないわね。でも、もしかしたら予告状の送り主がこの中に……）

美茶と佐山の話に聞き入る聴衆に、爆乳探偵は赤い瞳を鋭く向ける。不審な動きをする者がいないか見逃さないように。

「道明寺先生、アニメ化にあたってずいぶんと色々細かい注文出してきましたけど、特にこだわったところはなんですか？」

「そうですねえ。やはり、この作品はバイオレットパニーと悪者の激しいバトルが売りですから、キャラクターの動きに関して、ですね……」

マリアの意思とは無関係に、和やかな雰囲気トークは進んでいく。

「監督って、よく戦闘シーンをコマ送りで誤魔化すことありますけど、今回はそれ、やめてくださいませんか」

二回以上年上の強面男へ時折毒づくことはあるものの、終始爽やかな笑顔を絶やさない美茶の喋りは、聞く人すべてを魅了し笑いを誘う。

毒づかれる監督本人すらも、楽しげな苦笑いを浮かべるほどに。

（まったく、わたし以外の人にはいい塩梅で毒づくのよね、あいつは……）

「すいませーん、『バイオレットパニー』抱き枕完売って書いてありますけど、明日も販売しないんですかー？」

ついライブル娘の話を聞き入っていると、不意に坊主頭で痩せ形の青年から話しかけられる。

「あ……す、すいません。その……明日以降の追加販売はないんですが、後日ネットで受注販売する予定ですので、よろしかったらご利用くださいませ」

急に声をかけられて焦りつつも、マリアは緊張気味の口調で案内して深々と頭を下げた。

嫌々やっているとはいえ、根が真面目な性格だけにいいかげんな態度はとれない。

「あのバイオレットパニーの子、可愛いよな」

「ああ、俺もさつき小冊子もらったときに話したけど、ちよつと照れているのが初々しくていいね」

「それにあの爆乳、たまらないよな……」

トークショーを観覧しながらも、紫のパニーガールをチラ見している男たちが、ザワザワと騒ぎ出す

「ホントだ、気づかなかつたけど可愛い……」

「トークショー終わったら、俺も小冊子もらおうつと」

すると彼らに釣られるように、聴衆の目がマリアに吸い寄せられていく。中には席を離れ、声をかけに行く者すらあらわれた。

「近くで見ると、あのポスターから抜け出したみたいによく似てるねー」

「そうそう、ホント可愛いよパニーちゃん」

「あつと、あつと……ありがとうございます」

あつという間に、興奮気味の若者たちに囲まれた恥ずかしがり屋のパニーガールは、ただ愛想笑いで対応するばかり。

（……なんで、わたくしよりあのデカ乳ウサギに人が集まるんですの？）

無論、主役の座を奪われつつあるプライド高い原作者が、不満を抱かぬはずがない。

「……それで、今回は第一巻をベースにして、後半にオリジナル展開を入れますが……せ、先生？」

隣のアニメ監督の話も耳に入らず、目尻を吊り上げてマリアを睨みつける。

「ねえねえ、写真撮らせてよ」

「あ、俺も。いいでしょ？」

あげくの果てに、撮影会まではじまってしまった。四方八方から、手にデジカメやスマホを持ったアニメオタクたちが迫る。

「し、写真ですか？ えーつと……どうすればいいでしょうか？」

イベント慣れしていない美貌のオカルト小説家は、企業エリアでの撮影が禁止されているとは露知らず、気恥ずかしさを堪えて応じようとする。

ダンッ！

「ちよつとそこの人たちっ！ ここでは撮影禁止です！ よつと！ 撮るならコスプレエリアに行つてやってくださいませんこと！」

ついに堪忍袋の緒が切れた美茶はなりふり構わず、床を荒々しく踏んで立ち上がると、サツと指を突き出して騒がしいカメラマンたちを怒鳴りつけた。

「はい、それでは移動しますよー」

「みなさんこちらに来てくださいー」

すると、騒ぎを聞きつけたガードマンが二人やってきて、肌もあらわなウサミミ娘に群がるカメラ小僧たちを誘導しはじめる。

「えっ!? ち、ちよつと待つて……」

慌てて移動する群衆から抜け出そうとするものの、大勢の男に二重三重に取り囲まれては、思うように身動きがとれない。

「さあさあパニーちゃん」

「道明寺先生もあ言っていることだし、外へ出ようよー」

這い出る隙間もなくガツチリと囲まれたマリアは、企業エリアから強制排除されてしまった。

「……さして、騒ぎも収まったところでそれでは話の続きを……あ、あら？」

気を取り直し、笑顔に戻った美茶はトークショーを再開しようとしたものの、思いもよらぬ光景に目が点になる。

爆乳パニーと共にカメラ小僧が去ったあとには、聴衆が四人しか残っていないかった。

（な、なんか妙なことになるっちゃったわね。どうにかして道明寺のところへ戻らないと……）

マリアが連れてこられたのは会場の外にある駐車場に設けられたコスプレ広場、ではない。

展示場の裏側にある、荷物の搬入搬出用トラックが入るためのスペースであった。

休憩所でもあるらしく、ドリンク自販機が置かれているものの運搬業者の姿はなく、館内やコスプレ広場と比べるとかなり静か。

しかし、カメラ片手に集まった男たちが醸し出す熱気で、妙な盛り上がりが起きていた。

（まあ、あんまり人がいない方がいいにはいいんだけど……）

「パニーちゃん、こっち向いて笑ってー」

戸惑うコスプレ娘の内など知る由もないカメラ小僧たちは、好き勝手にポーズを要求してくる。

「あ、はい。こう、ですかー」

頬を朱に染めながら、マリアは言われるままにニコリと微笑んで手を振ってみせた。

（とりあえず、こいつらの言う通りにしてさっさと撮影会を終わらせれば、ここから抜けられるはず）

早く終わらせようと、次々要求を聞き入れていくが思いは叶わず、撮影会は一向に終わる気配がない。

「いいねーその笑顔、最高だあー」

パシャッ！ パシャッ！

誰もが皆、メモリーを使いきるまで撮る気なのかと思うほど、必死にシャッターを切り続けている。

「今度は両手でおっぱいギュッと押しして、谷間を強調したポーズとつてくれないかなあ？」

おまけに彼らの要求するポーズは、徐々に過激さがエスカレートしてきた。

「おっぱい……えっ、えええっ！ そんなこと……!?!」

カシャッ、カシャカシャッ！

思わず裏返った声で断ろうとするも、シャッター音に耳元を揉られた途端に声が詰まる。

（な、何か変な感じ……）

胸の鼓動が急激に早まり、全身がジワジワと火照つていく。

「さあさあ早く、パニーちゃん。ギュッととしてよー」

頭にバンダナを巻いて眼鏡をかけたロン毛の男が、高そうな一眼レフを構えて迫ってくるなり、シャッターボタンをひと押し。

カシャン！

（あ……また……）

熱に浮かされたように頭がぼやけ、耳の奥でカメラ小僧の甲高い声が響き渡ると、恥ずかしくて仕方がないはずなのになぜか身体が勝手に動く。

「え……と……こ、こう……ですか……」

言われるままに開いた手の平をスイカのように大きな乳房に強く押し当てて、クツキリと浮き出た谷間をカメラ小僧たちに見せつける。

（なんでわたし、こんなこと……）

頭で拒絶していても、口と身体が言うことを聞かないのが理解できず、マリアはただ戸惑うばかり。

「んー、いいよーそのポーズ。すごくセクシーで可愛いよー」

「こつちにもおっぱいちょうだい」

暑さと気恥ずかしさでほんのりと朱に染まり、軽く汗が浮いてキラキラと輝く爆乳に、カメコたちは首ったけ。レンズを通して向けられる、彼らの厭らしい視線が、柔肌に次々と突き刺さる。

（いったい、どうすればこいつらの言葉に縛られなくなるの……）

飢えたオオカミに囲まれたウサギ娘は、必死に考えるものの、手立てが思いつかない。

パシャパシャパシャ……

「おつと、メモリーカード交換しないと」

「今度はどんなポーズしてもらおうかなー」

彼女の胸の内など知る由もない邪なカメラマンたちは、次々とシャッターを切つてパイオレットパニーの艶姿を愛機に収めていった。

「まったく、どこへ行ったのかと思つたらこんなところになっていたなんて……」

異様な賑わいを見せる爆乳パニー撮影会を、駐車中のトラックの陰から窺う者がいた。トークショーを終えて、マリアの行方を追っていた美茶である。

「まったく、『パイオレットパニー』の宣伝放り出して人目につかないところで男に媚を売っているなんて、わたくしのファンを横取りでもする気なの？」

見当違いの怒りが胸に込み上げ、小さなで肩がワナワナと震える。

「今度はこつちに背中向けて、前屈みになって振り向いてくれないかなー」

「え、こ、こんな感じ……ですかー？」

言われるままに背を向けて、Tバックの如くキリリとレオタードが溝に食い込んだ大きな尻尻を見せつけつつ、カメラマンに視線を送る紫スーツのパニーガール。

そんな彼女の姿が、物陰から監視するライバル娘



の目には、自慢のボディをひけらかしているとしか見えなない。

「まったく癪に障りますわね、宇佐美マリアさん。いいでしょう、あなたがそういうつもりなら、その鼻をあかしてさしあげますわ」

漆黒の瞳で睨みつけ、吐き捨てるように言い放つと、美茶はウエーブのかかった長い黒髪を靡かせて駆け出していった。

（人体操作なんて技術、わたしだって持っているのに、どうして……）

美茶が立ち去ったあとも、パニーの撮影会は続きます。ますますエスカレートしていく過激な要求に抗えず、彼女は艶めかしいポーズをとらされてしまう。

「いいねー。もっと大きく、こう……プリンプリンってやってみせてー」

「あ、はい。これでいい、ですかー」

カメラを構えて腰を振る筋肉質の色白男に命じられるまま、マリアは頬を地面に押し付けて四つん這いになり、高く掲げた尻尻を左右に揺らす。

（くっ！　なんで、こんな奴の言うことに逆らえないのよっ！）

尻尻を下げた甘ったるい笑顔で答えるのとは裏腹に、胸の奥では怒りが台風の如く渦巻く。

「そうそう、もっとおねだりするような感じでね。うん、いいよー」

「えへ、そうですかあー」

続けて今度は、アフロヘアーの小柄な男のリクエスに、大きく股を開いて仰向けに寝転び、右手の親指を咥えて甘く潤んだ瞳でカメラ目線を送る。

空いた左手で乳房を押し上げて差し出す姿は、まるで男を誘っているかのよう。

（こうして自我があるんだから、催眠術にかかっているわけじゃないのに……）

恥ずかしいポーズをとらされて乱れる心をなんとか抑えつつ、冷静かつ科学的に自身に起きている事態の分析を試みても、一向に答えが出ない。

「うーん、やはりいい身体している。撮影が終わったあとの受精実験が楽しみだ」

（！）

不意に耳へ飛び込んできた野太い男の音が、不可解な事態を説明するヒントになった。

（受精……こいつらみんな、あの神山と繋がりがあっていること？　だとしたら、あのカードマジックみたいな不可解なトリックで、わたしを操って……）

我が身を辱める連中の素性がわかった途端、マジックショーでの不思議な出来事を思い出す。

仕掛けもないのに自由自在に宙を舞うトランプに襲われ、柔肌を打たれたり着衣を切り裂かれたりして、晒し者にされたときのことを。

カシャッ！

パシャッ！

（そういえば、身体の自由がきかなくなったのって、写される回数が多くなってきてからのはず）

「じゃあ、そろそろおっぱい出してもらおうかなー」  
ようやく謎の扉が開きかけたそのとき、スキンヘッドの巨漢が突拍子もないことを言いだす。

（なっ、何言って……）

「いいねー、早く見せてよ、パニーちゃん」  
「バイオレットパニーの乳首は何色かな？　紫ってことはないよねえー」

周囲のカメラマンたちも、下品なニヤケ笑いを浮かべて囁き立てつつシャッターボタンを連打する。

パシャパシャパシャパシャ！

「あ、はい……」  
彼らに言われるままに、マリアはパニスーツの胸元を掴む。そして、ゆつくりと焦らすように下ろしはじめた。

（ちよつと、何やっているの、わたしったら！）

私たちの矢のような視線を浴びる中、鮮やかな薄紅色をした乳輪の先端が顔を覗かせる。このままで、恥ずかしさに火照った爆乳を晒すのは免れない。

刻々と迫るその瞬間を狙って、ますます激しく切られるカシャカシャというシャッター音が、頭の中で弾け回る。

（だめ、止まらない……）

理解不能な事態に陥り、さしもの天才科学者もうにもできず、ただ真紅の瞳を潤ませて流されるしかない。

「ほーっほっほっほっ！」

だが、あわや乙女の肉蕾を晒しかけたそのとき、異様なテンションの甲高い笑い声が辺りに響き渡り、気を取られたカメラ小僧たちの指がピタリと止まる。

「！　あ、あれ？　動ける……」

すると途端に、身体の自由が戻ったマリアは下ろしかけのボディスーツを再びたくし上げ、謎の笑い声をする方向に目を向けた。

「なっ！　何??」

そこにいた予想もできなかった人物の姿に、爆乳パニーは思わず絶句する。

「皆様お待たせー、わたしこそが本物のバイオレットパニーですわあー」

あらわれたのは、予備のコスチュームを強引に纏った道明寺美茶であった。

マスクや帽子はそのままだが、サイズの合わないレオタードは胸の部分にポケットティッシュを詰め込んで、なんとか膨らませているのが見て取れる。

そして、鋭角的に切り上がった股間を見られるのが恥ずかしいらしく、腰まわりにはグッツコーナーから借りたとおぼしき「バイオレットパニー」のイラスト入りバスタオルを巻いていた。

「誰だあれ？」

「さあ？」

そこかしこで、二人目のパニーの出現に戸惑う声  
が上がる。

「(そういえば、こいつらの狙いは道明寺のはずなの  
に、なぜわたしの写真なんか撮っていたのかしら?)」  
疑問はあるものの、今は反撃のチャンス逃すわ  
けにはいかない。

カメラ小僧たちが美茶に気を取られている隙に、  
マリアはそつと胸の谷間に手を忍ばせる。

「あつた! でえいつ!」

ブンッ!

ドガッ!

そして気合とともに超振動ハンマーを引き出し、  
手近なところにいたアフロのカメラマンを殴り飛ば  
す。釣られて帽子やマスクも飛ぶほどの勢いで。

「ぐわあっ!」

ガシャン!

強烈な一撃を食らって吹っ飛んだ小男は、すぐ傍  
に立つドリンク自販機に頭から激突し、割れたガラ  
スの破片が辺り一面に飛び散る。

「いでええー!」

「安心しなさい。振動装置を作動させていないから、  
せいぜい木刀で殴られたぐらいよ」

のたち回るアフロを見下ろし、冷徹な視線を送  
つて言い放つと、マリアはハンマーを振り回して邪  
なカメラマンを次々と打ちのめしていく。

「な……どういふことですかの、宇佐美マリアさん?

あなた、この人たちに媚を売って、自分のファンに

引き込もうとしたんじゃないか?」

突如暴れ出したライバルの姿が信じられず、美茶  
は思わず首を傾げて問いかける。

「何よそれ? こいつらは……コスプレした女の子  
に、無理やり厭らしいポーズとらせて撮影する悪党  
どもよ! あんたが来てくれて助かったわ」

いきなり突き付けられた奇妙な質問に、マリアは  
咄嗟にまたもや苦し紛れのウソで答えた。何しろ彼  
女自身、まだどう説明していいのかわからない。

「そ、そんなことだろうと、油断させるためにコス  
プレして正解でしたわ。今だけ協力してあげまして  
よつ。あなたを助けるわけではありませんからね!」

しかし美茶は強引な説明を気にも留めず、照れく  
さそうな笑みを浮かべつつ、慌てふためく悪徳カメ  
ラマンの群れに突入していく。

本当は、人気取りのためにコスプレしていたのを  
ごまかして。

「おおつ、なつ、なん、だあつ!」

ドスッ!

「いかがかしら、道明寺流拳術奥義のお味は?」

華奢なお嬢様は、そのか弱げな見た目に似合わぬ  
素早い動きで人混みの中を自由自在に駆け回り、す  
れ違いざまに喉元や首筋に鋭い手刀を打ち込む。

幼少期以来、曾祖父から直に教わってきた武術は、  
素早い動きで敵を翻弄し、隙を見て着実に敵の弱点  
を一撃で突く戦法だ。

「やるじゃない、その調子で頼むわよ」

「あなたこそ、わたくしの足を引つ張らないでくだ  
さいましね」

普段のいがみ合いを捨て、協力して悪党を退治す  
る二人は、コスチュームとあいまつて二人のバイオ  
レットパニーが本から抜け出してきたかのよう。

「ちやうど、次の新刊がこんな話なのですわ。バイ  
オレットパニーが自分のクローンと共闘するといふ」

「そんなこと教えちゃっていいわけ?」

軽口を叩きながら暴れる二人は、ハンマーを振り  
回すマリアが力押しで、手刀で鋭く切り込む美茶が  
スピード勝負と、異なるスタイルでカメラ小僧を蹴  
散らす。

「ち、ちくしょう……!」

無論、彼らもやられてばかりではない。二人のコ  
スプレ美女に反撃しようと、バンダナ男が一眼レフ  
のレンズを向ける。

「させるかあつ!」

パキィッ!

咄嗟に爆乳パニーが鉄槌を下し、頑丈そうなカメ  
ラを叩き壊す。

「なんですのこいつら? こんなときに写真撮ろう  
とするなんて?」

「原理はわからないけど、こいつらのカメラで撮ら  
れると身体を操られるみたいなのよ。気をつけて」  
ロン毛のカメラマンがとつた不可解な行動を問わ  
れても、マリアには漠然とした答えしか出せない。

「天才科学者とか自称しているくせに、わからない  
こともあるんですのね、きやあつ!」

うっかりよそ見をしてライバルをからかうお嬢様  
武闘家を、思わぬ敵が襲う。

「げへへへ、捕まえたぞお!」  
禿頭の巨漢が美茶を取り押さえ、華奢な身体に覆  
いかぶさるように押し倒した。

「このつ、このつ、このお!つ! 離れなさいつ!」  
帽子とマスクが外れるほどに激しく頭を振り、か  
ろうじて肘から先が動かせざる両手で、脇腹や胸板に  
手刀を打ち込んで、屈強な大男はビクともしない。

速さと急所狙いを信条とする道明寺流拳術故に、  
動きを封じられては太刀打ちのしようがないのだ。

ズルリッ!

「あ……いつ、いやあああつ!」

ついにスーツの胸元がずり下ろされ、中に詰まっ  
たポケットティッシュが放り出されてしまった。

桜色の小さな肉蕾を戴いた、小振りながらも美し  
く形の整った丸い乳房が、白日の下に晒される。

「ほうー、デカ乳パニーもいいけど、ちっちゃいの  
も悪くねえなあー!」

「下品な笑みを浮かべて舌なめずりすると、大男は捕らえた獲物の右乳首に吸い付く。」

「びちゅっ！」

「かひいつ！ はっ、離れなさい、離れてえっ！」

不快な愛撫に鳥肌立つ微乳を揺らし、美茶は電気ショックを浴びせられたかのように華奢な身体をビクンとはね上げる。

「こんなの嫌あつ！ わたくし、空也くんは捧げるまでは、きつ、きれいな身体でいたいのにいつ！」

「んー？ なんだかわからんけど、とりあえず俺と受精実験しようぜー」

普段の横柄な態度からは想像がつかないほど泣き叫ぶ、気丈なお嬢様の腰からバスタオルを剥ぎ取ろうと、悪徳カメラマンの太い指が迫った。

ガキィッ！

「ぐうおおっ！」

だが、指先が結び目に触れる寸前で、鈍い打撃音が響くとともに、大男はガックリと氣を失う。

「これで借りは返したからね」

一通り悪質なカメラ小僧たちを退治したマリアが、禿男の側頭部を殴打して、氣絶させたのである。

「借りを返したですってえ？ そんなの、この汚物をどかしてから言つて……なっ、なんですのおっ！」

プビチュルルルルツツツ！

不敵な笑みを浮かべて呼びかける爆乳探偵に憎まれ口を叩く美茶に、さらなる異常事態が襲いかかる。

氣絶した大男の耳から、神山の劇場で見たのと同じ薄緑色の粘液が溢れ出したのだ。

「しまった！ 捕らえないと！」

慌てて新たに作り上げた装備を取り出そうと胸の谷間に手をつ込むものの間に合わない。

謎の生物は、横たわる華奢なお嬢様の耳に。目にも留まらぬ速さで入り込んでしまった。

「くっ、それなら探査機で……」

美茶の身体から粘液状の生物を追い出そうと、マジックショー会場で襲われたときに使った超音波探査機を取り出す。

「今助けてやるから、あ……」

だが、スイッチを入れようとしたそのとき、彼女はのしかかった巨漢を払いのけて立ち上がる。妙に虚ろな目をして。

「……ふむ、咄嗟に憑りついてしまったが、人間の女になるのも悪くはないな……」

いつもと違うトーンの低い口調で呟く美茶は、剥き出しにされた小振りな乳房を隠そうともしない。

まるで、誰かに操られているかのよう。

「道明寺？ あんたいったい何を言つて……ま、まさか……」

気丈なライバル娘の変わりように、ふと昨日の朝空也と大滝に言つたジョークが頭をよぎる。

「わたしと空也が見た緑色の粘液は、人間に憑りついて、肉体と精神を乗っ取る寄生生物よ！」

信じがたいことではあるが、状況から判断してもはや認めざるを得ない。

「まさか、このわたしが月並みなことを言う羽目になるとはね。お前はいつたい、何者!？」

目の前に立つ顔なじみの天敵娘をサツと指差し、尻尻を吊り上げて睨みつけるオカルト探偵は、鋭い口調で言い放つ。

「いかにも、我はこの女の身体を借りている者だが、あいにく何者であるかわかりやすく説明ができるほど、キミたちの言葉というものをまだ知らなくてね」

普段の「くすわ」調のお嬢様言葉と違い、どこ

となく不自然な言い回しは、確かにマジックショーで自分を辱めた神山たちのそれを髣髴とさせる。

（……悪いけど、しばらく付き合ってもらおうわよ。道明寺）

相手はまだまだ不可解な点が多い寄生生物だけに、

話ができる今の状況は情報を得られる千載一遇のチャンス。

探査機を準備しつつ、マリアは落ち着いた口調で問いかけた。

「それで、お前たちの目的はいつたいなんなの!？」

またわたしに、受精実験とやらをやらせるつもり?」

「受精実験か。それもあるが、我々はこの前のマジックショーでキミの肉体が気に入ったのでな。その身体で楽しみたいと思つたのだよ」

「気に入った? なるほど、それは光栄ね……」

面と向かつて、陵辱したいと言っているのと同然な相手に隙を見せまいと、美貌のオカルト探偵は皮肉混じりの答えで余裕を見せる。

ショー劇場で胎内に妙な精液を入れようとしていた彼らの反応は、女を陵辱して楽しむ鬼畜な強姦魔そのもの。メンタルは人間の男に近い。

「だからキミを誘い出すために、わざわざ警察に予告状を送つたのさ。我々の子種と一緒に送れば、きつと調査にしゃしゃり出てくると思つてね」

どことなく勝ち誇つたように、不敵な笑みを浮かべる美茶の周りに、よろよろと立ち上がるカメラ小僧たちが集まりはじめた。

（かなり強打したのに回復が早い、これも憑りついている生物のせい!）

これ以上の長話は反撃される隙を与えると判断したマリアは、目の前の敵を退治すべく手にしたロザリオ型探査機をサツと差し出す。

「手の込んだことを。だけど、ムダだったわね!」

「その妙なモノは使わせんよ」

ザッ!

だがスイッチを入れる隙を与えず、目にも留まらぬ速さで自販機の前へ跳んだ美茶は、落ちていたガラス片を拾い上げる。

「ど、どうしてそんなことが……」

「ど、どうしてそんなことが……」

「さあね、それを説明する言葉もまだ知らんのだよ」  
淡々とした口調で告げると、美茶に憑りついた生物は手にしたガラス片の鋭い先端を、躊躇うことなく彼女の首筋に当てた。

「なっ！ 何をするっ！」

「手放さなければ、この女は死ぬことになるぞ」

探査機から放射する超音波は、現状唯一判明している粘液生物の弱点。

しかし、こちらがスイッチを入れるより早く、相手は美茶の首を切り裂くはず。

（道明寺を殺しても、新たな宿主を見つけなければいだけってこと？ そんなこと、させてたまるもんか）  
わがままでいつも突っかかってくる生意気なお嬢様。だれど人を思いやることに長けた優しい彼女を見殺しになどできるはずがない。

「このわたしに刃向ったこと、かならず後悔させてやる！」

カラン……。

目尻を吊り上げて苦々しく言い放つと、マリアは探査機を放り出す。

「よろしい。では諸君、撮影再開しようか」

美茶に憑りついた謎の生物が仲間呼びかけると愛機を壊されるのを免れたカメラ小僧たちが、各々手にしたカメラを構える。

「また変な力でポーズをとらせる気？ さっさとしなさいよ！」

「いや、今度はキミ自身の意志でやつてもらおうよ。その方が楽しそうだ」

てつきりまた操られると思ひ、半ばヤケになって金切り声を上げるマリアに返ってきたのは意外な答えだった。

（こっちが逆らえないのをいいことに、精神的に屈服させるつもりなの？）

謎の生物の陰険なやり方に、爆乳探偵の胸に怒り

の炎が宿る。

「さてと。じゃあ、さっきの続きでおっぱい出して……それと、前にマジックショーで実験台にやらせた、オナニーというものをやってみようかな」

すると美茶の後ろから歩み出てきたスキンヘッドの大男が、口元を歪めたニヤケ顔で命令を下す。

「ええっ！ そ、そんな、あ……」

突拍子もない言葉を耳にした途端、顔から火を噴いて思わず素つ頓狂な声を上げてしまったマリアは、慌てて両手で口をふさぐ。

天才肌の堅物とはいえ、中身はうら若き乙女。ときとして、身体の奥底から湧き出す衝動を自ら治めることは少なくない。

「ほう、やり方の説明はいらないか、これは好都合」

「よく見えるように、座って股を開いてくれよ」

恥ずかしがる爆乳探偵に追い打ちをかけるように、そこかしこから野次が飛ぶ。

「くっ……」

反撃の手立てを持たないバニー戦士はその場に座り込み、スーツの胸元に手をかける。そして肩を震わせながら、お腹の辺りまでずり下ろした。

「おおうっ」

薄紅色の乳首を戴いたロケット乳がブルンと波打つて飛び出すと、一斉に歓喜の声が湧き起こる。カシャカシャというシャッター音とともに。

（こんな姿撮られるなんて……）

機銃掃射の如く浴びせられる邪な視線に、恥ずかしがり屋のバニーガールは全身が硬直してしまふ。

だが、躊躇うことは許されない。張りのある太腿をM字型に大きく開き、細くしなやかな指先を股間へ伸ばす。

「……っ……」

女体の最も敏感な部位に注目が集まるのを感じつつ、マリアは股布を脇へとずらした。

黄金色の柔毛に薄く覆われた縦割れが顔を覗かせると、シャッターの連打がさらに激しくなる。

（もう、嫌……こんなもの……）

操られていればまだ諦めがつくものの、自ら乙女の秘所を晒さなくてはならないのが、この上なく悔しく、そして恥ずかしい。

「さあ、早くオナニーをはじめたまえ……」

威圧的な口調で命令する美茶に憑りついた謎生物が、今にも刺すぞと言わんばかりに首筋をガラス片の鋭い先端で撫でる。

「わ、わかつたから、そいつに手を出さないで！」

悲痛な叫びを上げると、マリアは薬指と人差し指で肉割れを広げた。

「おおうっ」

赤みがかつた肉花が開き、上端にブツクリと膨らんだ桃色の真珠が顔を覗かせると、目の前に集まる男たちは我先にと身を乗り出しシャッターを切る。

早く中を弄れと急かすかのように。

「……くっ」

クチュツ……。

男たちから視線を逸らし、顔をしかめて中指でクリトリスを撫でると、小さな水音とともに秘割れから粘り気のある汁が一滴垂れ落ちる。

「あふうんっ！」

半開きの艶やかな唇から艶めかしい吐息が漏れ、股間から背筋へ痺れが走り、恥ずかしさで朱に染まつた肉付きのいいボディがピクリと痙攣した。

「へえい、ちよつと触つただけで濡れちゃうなんて、バニーちゃんは感じやすいんだなあ。もつとお豆を擦って、割れ目をグチョグチョにするの見たい」

「そっかいや前のショーではおっぱいを感じやすいって言ってたよね。だつたら自分で採んでよー」

ニヤケ顔のカメラ小僧たちから、次々と淫らなりクエストが飛ぶ。人質を取られている以上、従わざ



るを得ない。

「んっ、くっんっんっんっ……ひゃんっ！」

右手で指が食い込むほど、柔らかなロケット爆乳を揉み扱きながら、左手の指を軽く肉スリットへ滑り込ませて中を掻き回す。

グチャグチャグジュグシユグジュ……。

（だめ。こんな……嫌なのに、どうして……）

嫌々痴態を演じているはずなのに、胸の鼓動が高まり、熱に浮かされたように頭がぼやけていく。

「よし、受精実験の前に、ボクのカメラを壊した罰として、こいつをしやぶつてもらおうかな」

すると突然、いきり立った金切り声が耳に飛び込んでくる。一眼レフを壊された痩せ男が、華奢な体躯に不釣り合いな強張りを目の前に突き出してきた。

「え、そ、そんな……うぐんっ！」

ぶじやつぶじゅつぐちやつぐちゅつ……。

無有を言わず、固く膨れ上がった亀頭が口の中に押し込まれ、柔らかな舌に強引に絡み付いてくる。

「ああ、バイオレットパニーが、んっ、ボクのをしやぶつてる、くうっ……」

掠れた声で喘ぐパンダナ男は、マリアの頭を押さえ付けて前後に激しく揺さぶった。

「ふんぐふんぐふんぐうんっ！」

柔らかな唇で扱かれる熱い肉棒が、ビクビクと激しく脈打ちはじめた。

「そ、そろそろ出すよ、パニーちゃんのお口に……全部、んっ、飲むんだよおっ！」

「ドビュルッ！ ドグッドグッドグッドグンッ！ うぐっ！ んんんんっつっつ……」

エサを蓄えたりスのように頬が膨らみ、口腔内を満たした精液の生臭さが鼻から抜けていく。

（こんなもの、飲ませるなんて……でも、やらなきゃ道明寺が……）

むせ返りそうになるのを堪えつつ、マリアがゴク

ゴクと喉を鳴らして白濁液を飲み干すと、満足げな笑みを浮かべて痩せ男は強張りを引き抜いた。

「さーて、それじゃあそろそろ受精実験しようか？」

「え、くっ、来るなっ！ 来ないでえっ！」

さらなる危機を告げる声とともに、禿頭の大男が歩み寄り、ズボンをブリーフもろとも下ろして固くいきり立つて血管を浮き立たせた赤黒い男根を見せつけてきた。

「あ、ああああ……あうっ！」

巨漢の臍まで反り返った肉刀を目の当たりにして、言葉が失う爆乳パニーは強引に地面へ押し付けられ、ジットリと汗の浮いた大きなヒップを高く上げさせられる。

「やつぱり、ケツのデカイ女に入れるにはこのポーズが一番だな」

軽く舌なめずりをして柔らかなでん部を鷲掴みすると、先走り汁で滑った亀頭を秘割れにあてがう。

そして、腰を一気に前へ突き出した。

「やつ、やめてええええっ！」

ズジュッ！ グリグリグリリリッツツ！

悲痛な叫びも虚しく、名も知らぬ男の固くいきり立つた肉棒が、薄い恥毛に隠された乙女の秘園を押し開く。処女の証を滴らせる肉のクレヴァースに、ズキズキと鈍い痛みを刻みながら。

「あひいっ！ こっ、こんな太いの、いつ、いれないでえっ！」

「おっと、そうはさせんよ」

反射的に腰を引いて突き立てられた肉槍を抜こうとするが、獲物を捕らえた巨漢はそれを許さない。

汗ばむヒップを掴む両手を引き、強引に脈打つ雄蕊を押し込んでいく。

（いつか愛する人に、捧げるはずだったのに……）

科学万能主義を掲げるクールな美女が胸に秘めた純真な乙女心は、醜い男の強欲によって無残に砕か

れてしまった。

グシャグシャグギチャグギチュツ……。

下腹部を軽く隆起させるほどの極太ペニスだが、火傷するかと思うほどの高熱を放って胎内を蠢く。

（や、だ……こんなことされているのに……）

膈内を蠢く固い肉棒が、女の喜びを無理やり刻み込んでいく。狭い産道を行き来する一物の固いエラが、肉壁をゴリゴリと擦る感覚がたまらない。

まるで、身体の奥底を愛撫されているかのよう。

「早くしてくれよ、あとがつかえているんだぜ」

禿の巨漢に続けとばかりに、飢えた男たちの一物が、背後に続々と集まってくる。その中には、いきり立つモノを持たぬ者も。

「ふむ、実に美しい肉穴だ。今度は卵じゃなくて我が一物で中の感触を味わいたかったが、今のこの身体ではどうにもならんな。もう少し時間がたてば……」

粘液生物に乗っ取られた美茶が、極太の肉杭を打ち込まれた秘園を覗き込んで羨ましそうに呟く。

「卵……お前、あるとき……シャドー神山に憑りついていた粘液なのか？」

「粘液？ あまりいい感じはしないが、そう呼ばれるのも無理はないか。何しろ我々は……」

「ああ、そろそろ出す……んっ、から……おしやべりは、んっ、あとにしてくれ、よっ、んっ」

二人の会話を遮るように口を挟む大男が、ますます激しく腰を振ってラストパートナーをかける。

「あ……い、いや……やめ、て……」

見知らぬ男の、しかも人以外の何かのDNAが混じった子種を膈内へ注ぎ込まれる恐怖に、気丈な探偵もさすがに全身鳥肌立ち、背筋が震えた。

「マリアせんせーっ！」

だがそのとき、マリアを助けるべく頼れる味方があらわれる。無線機の信号を頼りに、彼女を探して



艦長停止させていた  
ディルドーを動かしても  
よろしいですか？

無論だ  
やりたまえ

はっ

ウヒッッ



んぶっぶっ!!  
ぶっぶっ...!!

ぶっ  
ぶっ...ぶっ

母娘でアクメを競う!!

あの数字は  
アクメ数か？

はい  
やはり母親の方が  
アクメしやすい  
ようですね

# 監獄艦 3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3  
BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

episode 05 女帝爆乳スキンシップ

漫画 COMIC 楠木りん  
原作 Anime LiLiTH



ん？

奴らの目が  
ピクピク動いてる

ウーロゲ  
また何か  
しているな

うひひ

今日撮影した  
涉外任務の映像を  
繰り返し脳に  
直接投影し

人格破壊を  
進行しております

しかも  
今この瞬間の  
刺激によって

人格破壊された  
脳内に更に深く快樂が  
根付くわけです

素晴らしい！

骨格性感の件は  
どうなってる？





おっぱいの  
性感開発中です

現在は  
マンコとアナル

完了しています

フッフッフッ  
フッフッフッ

んんんん  
<ふっふっ  
ふっ

フッフッフッフ

フッフッフッフ  
フッフッフッフ

フッフッフッフ  
フッフッフッフ



2人とも  
また絶頂しますよ  
あと10秒…

ウヒッ

—とくう  
女どもの悲鳴が  
聞こえるようだ

9…8…



「お願いだから  
私を壊さないで」

フッフッフッフ



ゼロオ!

2...1...

3.....

アアアア



絶頂が  
完全同期したのは  
これが初めてです  
実に興味深い  
データです



アクメするの  
も同時とは  
本当に仲の良い  
母娘だな！



艦長  
お待たせしました  
夢記憶潜入装置の  
準備が完了  
いたしました

うむご苦労



たしか一回の  
夢潜入で廃人化  
10%のリスク  
だったな

はい  
二度目の使用では  
廃人化50%になります



艦長  
宜しいのですか？

…確かに  
失敗すれば  
廃人となる  
危険な装置だ

だが俺は  
ベアトリスの夫が  
奴らの最大の弱点だと  
睨んでいる



イキ終わっても  
アへ顔から  
戻らないようだな

まあその方が  
こいつらに  
相応しいな

黒衣を脱ぎ捨て白雪のごとき柔肌晒す  
くーの恥辱劇!



選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

# くーの恥辱劇

孤城の夜闇に咲く白肌

小説 NOVEL 斐芝嘉和 挿絵 ILLUSTRATION 森ぐる太

ご案内

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられていますので、シーンの小説本文末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

シーン1

篝火に煌々と照らされた大手門を、鈴音は取って侵入経路に選んだ。

槍を手にして立つ門番たちはいずれもなかなかの面構えだが、備えが万全であるからその油断がある。

跳ね上げ橋の裏を伝って門に近づき、揺らめく炎が作り出す長い影に身を潜めながら、兵たちの呼吸に自らの吐息を合わせ——するり。

猫のような身軽さで土塁と逆茂木を越え、城内へ侵入。

いまは平時だから、門の裏側に人影はない。しかし闇へいったん沈み込んだ鈴音は慎重に慎重を期して気配を殺し、耳を澄ませる。

この蜂塚城の主・伊熊昌親は戦場での槍働きが凄まじく、逆さ州浜の旗印を掲げただけで万の兵が潰走したという逸話もある。それはまあ、あまりに大袈裟だから話半分に聞くとしても、まともには当たりたくない敵将だ。

ゆえに、くノ一・鈴音が放たれた。細く華奢な、雪の結晶のように儂げな乙女だが、忍の技は男に劣らず、敵地深くに単身で侵入しての暗殺任務をすでに何度もこなしている。

(さて、と……)

闇の底で小さく独り言ちた鈴音は、城内の土塁を伝って北へ向かった。

天然の丘を利用したこの城はいわゆる梯郭式で、急な北斜面の上に本丸がある。堀から直接這い上がるのは難し

いから、斜面を斜めに伝って行く。

ただ、移動距離が伸びるため時間はかかるし、隠れるものがない斜面を渡るわけだから見つかりやすくもなる。兵たちの神経が弛んでいる平時でなければ絶対に通れない経路だ。

のんびりと巡回している足軽たちの目を盗み、土塁を這い上がって二ノ丸へ——内へは入らず、篝火の作る影を伝ってさらに北へ。

北東角に突き出た見張り台の下を潜り抜けると、三間ほど先、十尺ほど上に、本丸の石落としが張り出しているのが見えた。

城を攻められたとき、斜面を登ってくる兵に対して石などを落とすための、四角い穴だ。男の忍では肩がつかえて通り抜けられないだろうが、鈴音ほど細身であれば問題ない。

懐から鉤縄を取り出し、振り子のように揺らして、穴へ投げ込む。

しつかりとした手応えがあり、するするとよじ登った鈴音は、しかしすぐには侵入せず、穴の真下にぶら下がったまましばし息を潜めた。

(……獣の匂い？ 犬か)

火薬の香に混じり、微かに獣の匂いがする。だが、どんなに耳を澄ませて

も鼻息や足音は聞こえない。

懸垂の要領でシリシリと頭を上げ、穴の内側をそつと覗く。  
太い柱が広い間隔を開けて立つ、倉庫のような場所だ。床はなく、埃臭い土間で、遠い壁に大きな箱がいくつも

いくつも積み上げてある。

——人の気配はない。

闇を透かして見極め、一気に穴を潜り抜ける。手首の一捻りで鉤縄を回収しつつ、土間に転がって柱の根本に伏せ、鋭い視線を四方に飛ばす。

視界を遮る箱は壁際にしか積み上げられていないから、南にふたつ、西にひとつある板戸はすぐに分かった。火薬の匂いは南から、獣の匂いは西から漂ってくるようだ。

番犬なら、広い三ノ丸に放つはず。本丸の奥で飼っている獣とは、いったいなんだろう——？

疑問には思ったが、鈴音は取って確かめようとはしなかった。

今夜の任務は伊熊昌親の暗殺だ。敵地の奥深くに単身潜入しているのだから、任務以外のことに首を突っ込んでいる余裕はない。

(獣がいるなら、西の板戸へは近づかないようにしよう……)

胸中に咬き、懐からクナイを取り出して逆手に構える鈴音。

闇の底に伏せたまま、するり、するりと南の板戸へ向かい——。

その背後で、不意にドサツと大きな音がした。

「ッ!?!」

慌てて振り向き、真上に跳び上がった鈴音の足下を、数本のクナイが風を斬って飛び抜けていく。

「何奴ツ!!」  
「それはこっちのセリフだあな」

場違いにのんびりとした声が聞こえ、闇の塊が床から生え出すように盛り上がり——やがて禿頭の山伏となった。

「竹内殿と三輪殿の和睦が成り、伊熊の殿様もようやく枕を高くして寝られると、安堵しておられたのに……：いたいどこのだれが、くノ一など放つたのだろうのお？」

「……」

「だがまあ、いつ来るか分からぬ忍に備えて天井にずうつと貼りついておるのも楽ではない。退屈で退屈で死にそうじゃったわ。感謝するぞ、くノ一——」

「……矢守十蔵か!」

この辺りでそこそこ名の知られた、はぐれ忍だ。伊熊に雇われ、身辺警護をしていたらしい。

鈴音が歯噛みすると同時、南の板戸が乱暴に引き開けられ、槍を構えた足軽たちが雪崩れ込んだ。

「何事ですか、矢守殿……あ？ く、曲者ツ!!」

「おう、なかなかの別嬪じゃぞ」  
石落としの穴を背にして仁王立ちになった矢守が、蒼褪めた鈴音を見下していやらしく笑う。

(拙いことになった……)

戦えば切り抜かれるだろうが、これ以上騒ぎが大きくなれば伊熊昌親が目覚めてしまい、暗殺は不可能。いや、すでに起きているかもしれない。

◆任務を諦めて脱出する ↓シーン2

◆控降するふりをしてこの場の騒ぎを鎮める ↓シーン3

## シーン2

——こうも騒がしくなったのでは、暗殺は不可能。

素早く見切りをつけた鈴音は全身の力を抜き、ふっと前へ倒れ込んだ。根本で縛った長いうしろ髪が、鞭のようにしななって風を斬り——そのままぱたりと、埃臭い土間に俯せになる。

「な、なんだ？ どうした？」

くノ一のほつそりとした背に槍を向けていた兵たちは、予想外の行動に気を呑まれ、互いの顔を見回すばかり。

指示を得ようとして、壁を背にして立つ大柄な山伏に目を向けると、

「……ワシとしたことが、こんな手に引つかかるとは」

苦笑した矢守がわずかに揺れ、その場に頷れるように膝をついた。

「どうされました、矢守殿？」

「うむ……ワシはもうすぐ、死ぬ」

「……え？ そ、それは、その……どういうことで？」

「言葉通り……じゃ……」

言い終わると同時に、山伏姿の大男がドウツと倒れ伏す。

入れ替わるように、すらりと細い影が立ち上がり——。

「あ……き、貴様、いつの間にッ?!」

胸の膨らみと尻の丸みから女と見てとった兵が、すぐ足下に伏せている人影に慌てて目を戻し、どちらが本当のくノ一なのかと見比べた。

その隙に、石落としの穴から外へ飛び出す鈴音。

先ほど、力を抜いて前方へ倒れ込んだときに、髪先に仕込んでいた針を矢守の目に打っていたのだ。

そして土間に伏した瞬間に空蟬の術を用い、兵たちの足下に墨染の上衣を残して矢守の股下を潜り抜けた。

もちろん、ただ潜り抜けたのではなく、擦れ違う一瞬に無防備な内股へ、

伊熊暗殺用の毒針を打ち込んだのだ。

忍の心得がある矢守ですら反応できなかった、神速の技。

並みの兵たちでは状況を把握することすら困難で——。

「……に、逃がすなッ！」

ようやく声を上げ、矢守の死体を乗り越えて石落としの穴を覗き込んだときにもう、鉤縄でぶら下がった鈴音は大きく左右に揺れ始めていた。

細身のくノ一だから潜れた小さな穴は、兵たちを阻む関門になる。

「槍で突け！」

「ダメじゃ、届かぬ！」

「磔じゃ、磔を投げつけろ！」

「ああも大きく揺れていたのでは、とても当てられぬわ！」

悔しげな声を頭上に聞きつつ、振り子の要領で西へ飛んだ鈴音は、土塁の外に張り出している見張り台の基部に蛙のようにしがみつく。

「外だ、外へ出る！」

慌てた兵たちが右往左往している気配を尻目に、二ノ丸の柵の外側を駆け

に駆け——篝火の脇を通り過ぎた直後、

斜め下うしろへ弾けるように跳ぶ。

すぐに斜面に貼りついて身を伏せ、息を殺している。

「あっちへ行つたぞ、逃がすな！」

大きな声で叫ぶ兵たちは鈴音に気づかず、三ノ丸へと続く坂道を駆け降つていった。

騒がしい足音が十二分に遠退いてから、ホッと一息。

（こんな姿、だれにも見られたくないものね……）

兵たちの目を欺くために短袖の上衣を脱ぎ捨ててきたいま、左腕の手甲や

両脚の脚絆を除けば、透き通るように白い柔肌を守っているのは目の粗い鎖帷子と、その下で形よい乳房を抑えているサラシ布、そして秘部を締めつけている純白の禪のみ。

鎖帷子はその名の通り小さな鉄輪を連ねた内着だから、肌の色が透けて見える。しかも、忍働きに支障を来さないように軽量化を図っているため、通常よりも輪が大きく、しかも細い。

逆に言えば、一応衣服であるにもかかわらず、恥ずかしい場所を隠すという機能はまったく考慮されていない。

気分的にはほぼ裸なのだ。

単身で敵地に潜入するほどの手練れである以前に、鈴音は歳頃の乙女でもある。裸同然の恥ずかしい姿を、むくつけき男たちに見られたくない。

強行突破したほうが安全で確実だとは思いますが、多くの目に我が身を晒したくはない——そんな、くノ一らしからぬことを考えていたせいで、

「……ッ!？」

鈴音は予想外の敵とまみえることになってしまった。

土塁で補強された急な斜面を、凄まじい勢いで駆け降りてくるいくつもの気配。フイゴのような鼻息と、次第に濃くなる獣臭さ——。

「犬かっ！」

舌打ちしながら飛び上がった鈴音の脚先を、黒毛の犬が矢のような勢いで駆け抜けた。

一匹だけではない。

鉤縄とクナイを使って急な斜面を強引に斜行しようとする鈴音に、上から下から左右から、黒い塊が次から次へと飛びかかってくる。

十数匹はいる。

しかも、ただの犬ではない。

「チイッ！」

振るったクナイが刺さっても、鳴き声ひとつ立てないのだ。手裏剣を打ち込んで目を潰しても、もう片方の目が無事なら止まらず飛びかかってくる。

忍の術を仕込まれた、忍犬だろう。（ま、拙い……ッ!）

鋭い牙や爪にもなにか細工がしてあるのか、攻撃を受けるたびに鎖帷子が引き裂かれる。左手の手甲は無事だが、

脚絆の紐はちぎれ飛んでしまう。

「くろう……あつ!？」

ようやく平らな地面に降り立った鈴音は、左右から近づいてくるいくつもの松明に気づき、愕然とした。

忍犬たちの攻撃を避けたり受けたりしているうちに、三ノ丸の中ほどへ追い込まれてしまったのだ。

「おお、いたぞ、あそこだっつ！」

「犬どものお手柄じゃ！」

濁声で叫ぶ兵たちが、たちまち四方を取り囲んだ。手に手に松明を掲げ、犬に追いまくられているうら若きくノ一を照らして、

「な、なんと破廉恥な姿じゃ、乳の谷間が見えておるではないか！」

「尻も丸見えじゃ！ おお、おお、白くむちむちとして、まるで搦ぎたての餅のようじゃのう」

鎖帷子に透けて見える乙女の柔肌に気づき、下劣な笑みを浮かべる。

(助平どもめっつ！)

恥辱に眉を逆立てる鈴音だが、逃げ出す余裕はもろろんのこと、恥ずかしい場所を隠す余裕すらない。

吠えず鳴かず、ただ黙々と襲いかかってくる真つ黒な忍犬が、五、六匹ほど残っているのだ。

「よし、行けっ！ そこじゃっ！」

「惜しいッ！ あと少しで胸元が裂けるのになっ！」

いやらしく笑み崩れた兵たちが囁き立てる中、屈強な忍犬たちは何度も何度も反転し、鈴音の脚や腕に鋭い牙を立てようとする。

「シッ！ ハッ！」

気合を発して左手の手甲と右手のクナイで応戦している間に、別の黒犬が斜めに跳び、刃のような爪をかけて鎖帷子

帷子をぎつくりと引き裂く。軽さを優先して細い鉄輪を用いたものだから、大きな黒犬が体重をかけて引つ掻けば、簡単にちぎれてしまうのだ。

(だ、ダメ……このままでは……！)

焦る鈴音の胸元で、いくつもの小さな鉄輪がまとめて弾け飛んだ。右胸の鎖帷子が大きく垂れ下がりが、サラシ布に抑えられた形よい膨らみが衆目の前で小気味よく跳ね揺れる。

「おお、あと少しじゃワン公！」

「そこじゃ、ほれ！ 行け、行け！」

「お、おのれえ……ッ！」

歯噛みして男たちを睨みつけた拍子、柔らかな尻たぶを掠めて鋭い牙が噛み合わされた。

——プチッ！ プチチッ！

腰から太股にかけての鎖帷子が塗り取るように噛み破られ、白く瑞々しい美尻が露わになる。

「く……そおっ！」

地に飛び込むように転がりつつ、両脚を広げて回転。腹に噛みつきに来ていた犬の首が、ちょうど太股の間に入った。すかさず全力で挟み込み、跳ね上がるように逆立ちしつつ捻りを加え、頸椎をねじ折る。

(あと三匹……あつ!!)

息を整えようとしていた鈴音の目が、兵たちの背後から人垣を飛び越える黒い影を捉えた。

視界にあるだけでよっつ。左右や背後からも新手の気配。

「や……ああッ?」

咄嗟に飛び上がるうとした鈴音の背に、重い衝撃が打ち当たった。地に転がってすぐさま跳ね起きたが、肩口で金属の擦れる音がして、鎖帷子が喰いちぎられる。

右の肩から胸の形よい膨らみにかけての鎖がすべて失われ、夜目に白く輝く瑞々しい柔肌が、大きく露わになった。乳房そのものはまだサラシ布に覆われてはいるが、

(拙い、拙い……ッ！)

立ち上がろうとしている間も新手の忍犬たちは縦横無尽に飛び交い、傍を擦り抜けざまに鋭い爪と牙で鎖帷子を傷つけていく。

まるで鎌鼬だ。

脚絆も噛み破られ、左腕の手甲も鋼板が一枚、また一枚と弾け飛ぶ。

「く、う……ううっ！」

足を踏みしめ、両手にクナイを構えてようやく迎撃態勢になったときにはもう、胸を締めつけているサラシ布と恥ずかしい場所を守る純白の禪しか残っていないかった。

「お、おお……ッ！」

周囲を取り囲んだ兵たちが、思わず溜め息を漏らす。

肝心な場所こそまだ見えないが、うら若きくノ一の小気味よく引き締まった小振りな美尻や瑞々しく伸びやかな太股、白い背やなやかな二の腕、華奢な肩などが、四方八方から突きつけられている松明に照らされてしつとりと輝いているのだ。

「なんと美しい……」

「まるで観音様のようにじゃ……」

「いやあ、眼福、眼福！」

下品に盛り上がる男たちを懸命に無視し、逸れそうになる気持ちを引き締める鈴音。

敵は鼻の下をデロデロと伸ばしている野卑な兵たちではなく、数を増やした忍犬だ。鈴音の構えに危険な匂いを嗅ぎ取ったのか、いまは遠巻きにしているが、恥ずかしがって身を縮めたらたちまち襲いかかってくるだろう。

だから、鼻息を荒らげた男たちのいやらしい視線を白く滑らかな柔肌にねつとりと感じて、伸ばした腕や広げた脚は戻せない。

「意外に大きな胸だな。うへ……揉み応えがありそうだ」

「尻もいいぞお。見ろ、あの色艶」

「わしは内股じゃな。ああ、あの桜色に火照った柔肉に頬摺りしたいっ！」

犬たちに備えて構えを崩せないくノ一を、男たちが淫らな目つきで舐めるように眺め回す。

(く……そ、おおっ！ 犬を始末したら貴様らの目玉、ひとつ残らず抉り取ってくれろっ！)

ギリギリと歯噛みした鈴音の瞳が、ほんのわずかな間、犬のうしろにいる男たちに向いた。

その瞬間——

「うっ!! あ……し、しまったッ！」

不意に頭上から風切り音が聞こえ、胸元を黒い塊が掠めた。背後で距離を

測っていた忍犬が、鈴音を飛び越えて襲いかかってきたのだ。

慌てて引いた鼻先を、黒犬の太い前脚と鋭い爪が掠めていく。胸にきつく巻いていたサラシ布が、乳谷に沿って縦にざっくり切り裂かれる。

(あ……だ、ダメッ！)

思う間もあらばこそ、重圧から解放された若々しい乳房が羞じらう乙女心を無視してぶるるんっ！と小気味よく跳ね躍った。

可憐な乳首を隠していた白布が跳ね飛ばされ、ふわりと落ちて――。

「おおおっ！ な、なんと美味そうなおっぱいであることよ……」

遠巻きにしている兵たちが、思わず感嘆の声を漏らした。

衆人環視の中に現れたくノ一の生ツ白い乳房は、やや小振りなものの美しく丸く、尖端がツンツと生意気そうに上を向いている。松明の揺れる灯りを浴びて柔らかな谷間を妖しく翳らせながら、しつとりと輝く。

「乳豆は小さくて、色が淡いのお。松明の灯りではよく分からねが、あれは桃色じゃろうか？」

「く、そお……ッ！」

男たちの視線など気にしている場合ではない、と頭では分かっているのに、羞じらう乙女心が軋み、わずかに構えが乱れた。

当然、隙を窺っていた忍犬たちが一斉に襲いかかる。

どういう訓練をしたのか、牙も爪も

鈴音の柔肌には一筋も触れない。ただ痺だけを噛んで仲間同士で引き合い、乱暴に揺さぶり始める。

「やつ!! あつ!! や、めえつ!!」

乳房が吊り上げられ、蹲すまたっていた鈴音の白い裸体が尻を押立てたような恥ずかしい姿勢になってしまった。

慌てて両手を股間に回し、白布を押さえつければ、今度は腰紐が噛まれて引かれてズリ下げられ、ブリツと丸い尻尻がたちまち露わにされてしまう。

「うはっ!! ケツの穴が丸見えだ!」

「手を退かせよ、姉ちゃん!」

「観音様の観音堂を、じつくり拝ませてくださいよ!」

いやらしく笑み崩れた兵たちに卑猥な声で囁き立てられるが、羞じらう鈴音には眉を逆立てる余裕もなかった。

「こ、この……助平犬めっ!」

慌てて振ったクナイが、忍犬にすりとかわされる。別の忍犬がすかさず別の角度から乳房に喰らいつき、

「うっ!! あ……ああつ!」

鈴音の細指の下から、白い乳房が乱暴に引き寄せられた。

これでもう、丸っきりの裸だ。それだけでも、歳頃の乙女としてはおかしかなりそうなくらい恥ずかしいのに――。

「ビッ!! やつ!! や……あうっ!!」

剥き出しになった尻肌を、冷たく濡れた犬の鼻が掠め、熱く湿った鼻息を勢いよく吹きかけられた。

恐怖と嫌悪で身が竦み、逃げ出した

いのに動けない。

「お? なんだワン公、その娘を犯したいのか?」

「仕方ねえ、コイツを仕留めたのはお前たちだからな。好きにしろ」

「ひ……ッ!! ひ……ひいっ!!」

蒼褪めて悲鳴を上げる鈴音の、眩く輝く白い美尻に、さつそく一匹の黒犬が覆い被さった。

ほどよく引き締まった柳腰を太い前脚でガチツと抱え込み、大きな口から紅い舌をダラリと垂らして、いきなり激しく腰を振り始める。

「ひあつ!! い、いや……犬はイヤ、イヤああつ!」

手練れのくノ一らしからぬ、恐怖に引き撃つた悲鳴を上げて、柔らかな頬に涙をこぼし始める鈴音。

人間相手なら言葉で操ることもできるが、本能に衝き動かされている獣ではどうしようもない。

灼けた鉄の棒のように熱い犬の淫棒が、大切な割れ目を守る手の甲にピタンピタンと打ちつけられる。気味の悪い粘液に濡れた肉の塊が、細指をこじ開けようとしてぐちゅんぐちゅんと、何度も何度も擦りつけられる。

そのまま我慢していれば、ひよつとしたら犯されずに済んだかもしれないのだが――。

「い、いやあ……ッ!」

耳朶や首筋に生臭い獣の息を吹きかけられ、熱い涎をだらりだらりと浴びせかけられた鈴音は、恐怖と嫌悪に追

い立てられて我を失ってしまった。秘裂から手を離し、地を掻いて這い逃げようとする。

当然、遮るものなくなった乙女の割れ目には、

「ひっ!! あ……ひいっ!!」

猛々しく滾る犬の淫棒が、傍若無人に押し入り始める。

「ダメ、いや……痛いッ!! イヤイヤだめだめ、犬はイヤあ……ッ!」

「おいおい、大丈夫か? あと十匹はいるぞ。いまからそんなに鳴いてたんじゃ、喉が保たないだろう」

「ひいっ!! ひ、ひいひい……ッ!!」

鋼のように硬く焼けぼつくりのよう

に熱い獣の淫棒を、腹の奥底にまで打ち込まれて悶え鳴く裸のくノ一。

地面について伸ばした細腕の間、形よく膨らんだ若々しい乳房が、犬の突き込みに合わせて小気味よく躍る。

(ダメ、いや……犬は嫌、嫌あつ!)

恐怖と嫌悪と羞恥が入り混じり、理性が端からひび割れていく。

その間も、キツく狭い処女窟穴を刺し貫いた犬の逸物は力強く前後して、男を知らぬ牝粘膜を蕩けるほどにしごきまくる。

「あ、あ……あう? や、やら……なんれ……な、なんれっ!! 犬なのに、犬なの……にいいい……ッ!」

激痛に掠れていた鈴音の悲鳴に、甘く惱ましい淫らな響きが少しずつ混じり始めた――。

【忍犬陵辱 END】









前衛艦隊を  
殲滅した！  
このまま行くわ！

宇宙を舞う少女に  
恥辱の嵐が迫る……

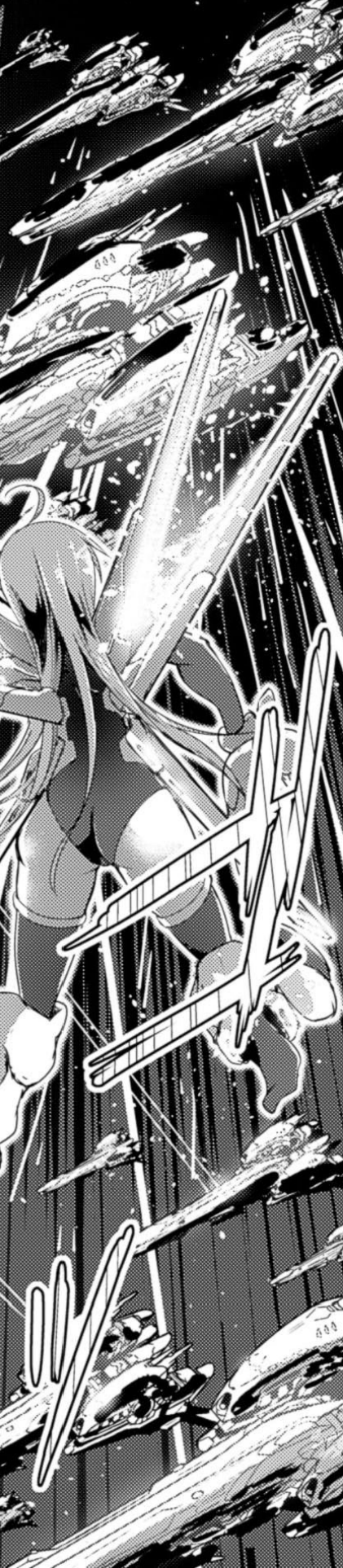
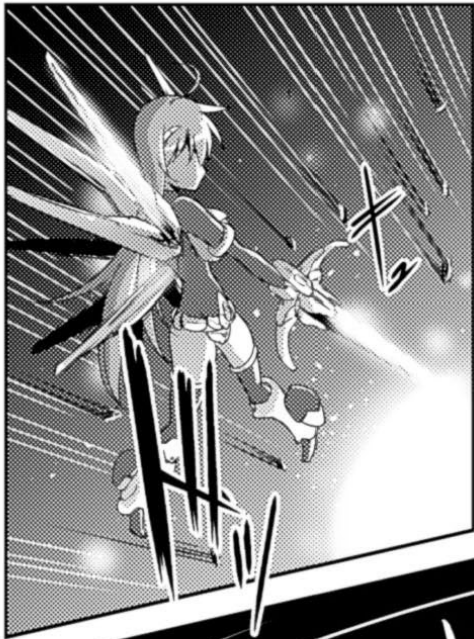
待て深追いは  
良くないぞ  
一日戻るんだ！

**ALP**  
ARMS LIVE PROJECT

漫画 しーあーる  
COMIC



大丈夫よ  
まだ弾薬も  
余裕があるし  
それに…こいつら  
手がかりを握って  
そうな気がするの…



行ける…っ  
このまま…

中枢に突入するわ  
艦隊の陣形はわかる？



…？通信障害？  
いえこれは…

私達固有の通信を  
妨害されている…？！



全艦球形包圍陣を  
取りなさい

全艦シールド  
ジエネレーター  
全開！

...

バリアの壁に  
閉じ込められて  
逃げられない...っ

ウソ...私まさか  
誘い込まれた...!?





…これは…ッ!?

気が付き  
ましたか?



ようやく報復が  
出来そうですね

…能書きはいいわ  
どうしてさっさと  
破壊しないの?



貴女には多くの同胞を  
駆逐され煮え湯を  
飲まされてきたが



ようやく貴女を  
捕えることが  
出来ましたよ



「破壊」？  
冗談でしょう  
我々の同胞の恨み…

急遽招集できる分しか  
呼べなかったの  
不服かもしれませんが

貴女の最後の姿を  
皆で生で鑑賞しようと  
思っていますね

いい趣向でしょう？

…悪趣味ね…！



通信機能自体は  
生きてる…けど  
繋がらない…

ってことは  
完全に私の専用回線が  
邪魔されてるのね…

とにかく…武装を  
取られた今自力で  
何とか抜け出さないと…

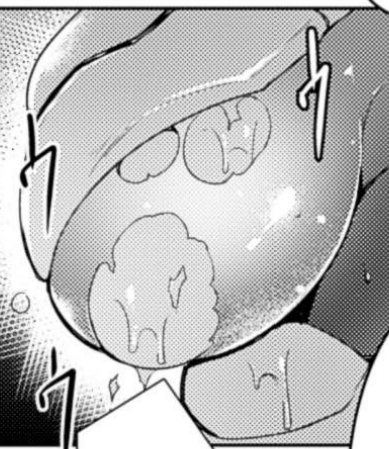


な何?  
この液体…ッ



早速最初のショーから  
開始しましょうか

十ノ



その液は君たち生体兵器を  
覆うボディスーツを  
腐食させるものでね

ホホウ本来  
機雷などに仕込んで  
使う物のはずだが

意外にこういう  
見せ物にも役立つ  
ものじゃのうw





…ほう…まだ爛れ  
きっていない部分も  
残っているとはいえ…

なかなか  
扇情的な格好に  
なりましたね

男性クルーが  
喜んでいますよ

では…美しい肌も  
頭かぶになったところで  
次の段階に  
移りましょうか



何?この  
ネバネバ...  
また腐食液...?  
...でもこの装甲は  
...そう簡単に...

ぬる...  
ぬる...  
ぬる...



...っな...  
何これ装甲が侵食  
されてる...!?

今投与した液体は  
生体兵器のプログラムを  
狂わせるものでして...

装甲への侵食が完了次第  
それを媒介に  
兵器のプログラムを  
我々の指揮下に書き換えて  
しまうものですよ

そんな...?



ダメ…ウイルスに  
抵抗できない…  
このままじゃ…!



手の拘束具が  
解けた…?

え…?



ほらほら早く…

…そうか  
こいつら…



侵食中の部分を  
切り離さないと  
危ないですよ?

あくまで私の  
ことは「見せ物」  
ってわけね…!



これは…  
…どういづつもり!?

何もっと貴女の  
抗う姿を見たい  
だけですよ

おお皆様  
見てください！

とにかへ今は…

侵食される前に  
この装甲を外さ  
なくちゃ…っ

淫らにも彼女は  
自ら乳房を晒す  
ようですよ

ほう…  
装甲に隠れて  
分かりません  
でしたが…

なかなか  
豊かな乳房を  
お持ちですね

—この位で  
ギヤーギヤー  
うるさいわね…っ



屈辱だわ…ッ

見るなッ

自ら素肌を晒すなんて  
艦の人以外にしたこと  
無いのに…

で…次は  
どうする気!?

…ふむ…  
このまま全身に  
同じ侵食液をかけても  
いいのですが…

同じ趣向では  
飽きるでしょう

次はこの方と  
踊って頂き  
しましょうか

…? 何よ  
何も出てこない  
じゃない…??

# 潜入なつめ アイドル

時空のストーリーを公演



衣装を脱ぎ、下着を脱ぎ、すべてを曝し—  
囚われの妹を救うためアイドルは淫猥に踊る!

小説 NOVEL 花房寛

挿絵 ILLUSTRATION おのであ

宝石のような瞳に見つめられ、面接官の竹田はすぐにピンときた。これまでも何百というタレント志願の女たちを面接してきたが、ここまでの素材はなかなかいない。間違いない逸材だった。すらりとした体軀は見事な八頭身で、決して細すぎない健康的な肉付きを維持している。顔の輪郭はすっきりとしていて、そこに上品に尖った鼻、切れ長で涼しげな目がバランス良く配置されていた。竹田はすぐにプロフィールに目を落とす。生年月日から逆算して今は二十歳になるはずだった。

「ほう……、二十歳ですか。あなたはなぜうちの事務所へ？」

「私は昔からアイドルに憧れていました、是非こちらで夢を叶えさせてください」と思っていました。あのつ、若くないのはわかっているのですが、やはり年齢は関係あるのでしょうか？」

「確かにそれはありますね」

しかし竹田には、そんなことでこの逸材を逃すなど、考えもししていなかった。濡れ羽色の髪はつやつやと光沢を放ち、腰までまっすぐに流れ落ちる。透けるような雪肌はみずみずしくうるおい、化粧の必要性をまったく感じさせない。実際、十五、六のアイドルたちよりもずっと擦れていないのだ。

確かにアイドルらしくはない。おしとやかで古風な雰囲気は漂わせ、どちらかというとな優向き。だがそうであるからこそ、可愛らしいアイドルとの差別化ができる。

「お客さんはアイドルに処女性を求めますからね。……ちなみに夏目さんは男性経験があまりですか？」

「なっ！　そ、そんなことまで答えなさいといけませんでしょうか」

女の狼狽がこちらにまで伝わってきた。初々しい反応に、間違いない男慣れしてないし確信した。

「そうですね。私たちはタレントの管理をしないといけませんから。うちは若い女性アイドルには全員、事務所の寮に入ってもらいます。共同生活をしながらアイドルとしての素養を身につけてもらいます。厳しいですが、あなたはそれに堪えられますか？」

「は、はい。それは覚悟しています」

女はしつかり見つめ返して答えた。

「では、もう一度伺います。あなたは男性経験がありますか？」

不躓な質問に、女は目をそらし、声を震わせながら答えた。

「あ、ありません……」

「では処女ということですね？」

「……は、はい……」

女は目を伏せ、観念したように返事した。それからいくつか質疑応答がおこなわれ、面接は終わった。

二週間後、女はタレント事務所・カネプロが用意した寮へ、荷物を運び込んでいた。

「おい、何してる。こつちだ」

竹田に急かさされ、夏目優希と名札が貼られた部屋の前まで通される。

「ここがこれからお前の部屋になる。風呂と便所は共同だ」

竹田は面接のときより明らかに態度が傲慢である。その上デリカシーもなく、寮内の案内でも、女性用のトイレや浴場にずかずか入っていた。

カネプロは老舗タレント事務所の一つで、所属タレントを大切にすると評判だった。しかし世の中の不況の煽りを受けたのか、そんな事務所も一年前に業績が悪化し、経営陣が一新された。やり手の新社長により今は持ち直したといわれているが、同時に良い評判も聞かれなくなっていた。

寮内を案内し終えると、竹田は脅すような口調でこう告げる。

「俺は管理人室にいるからな。変なことをして問題を起こすなよ」

とてもタレントを大切にしている事務所とは思えなかった。

寮は夜間の外出が禁止されており、午後十時を過ぎると一斉に消灯される。以降は寮内であっても自由に出歩くことは許されないため、入浴やトイレも消灯までに済ませておかななくてはならない。

そう竹田から聞かされていたが、その夜、女は寮内を探索していた。

（とりあえず事務所へは入ることができただけだ……）

夏目優希というのは偽名であり、女の本名は結城なつめという。事務所内部へ潜入するため、アイドル志願者が

装っていた。

部屋の名札をすべて確認すると、なつめは落胆したようにため息をつく。

（はぁー。やはりここにはいない）

なつめの目的は、この事務所に所属する妹を見つけ出すことだった。妹の結城ななみは、二年前にスカウトされたこの事務所に所属した。当時はタレント活動の内容を楽しそうに聞かせてくれたものだが、一年前からぱたりと連絡が途絶えてしまった。それは、事務所の新経営陣が一新された時期と重なる。そのころから、経営方針もがらりと変わり、タレントの保護と活動に集中できる環境作りという名目のもと、若い女性タレントは徹底管理されることになった。それによりこちらからの連絡も禁止されてしまったのだ。時折テレビ番組に出演しているななみを見かけるものの、その表情はどこか暗く、何かに怯えているように思えた。

（ああ……。ななみはいったどこに）

さらに最近になって、なつめの耳には悪い噂も届いていた。新人アイドルたちに、枕営業を強制しているというのだ。事務所を訝しく思ったなつめは、自分の目で妹の無事を確認せずにはいられなかった。

「おいっ！　何ウロチョロしてる！」

暗闇に慣れた目に急に光が突き刺さる。懐中電灯を手にした竹田が近づいてきた。

「迷惑行動をとるなど言っただろうが」

なつめの言い分を聞くこともなく、頭ごなしに叱りつけ、警棒代わりに丸めたパチスロ雑誌で、頭を叩いてくる。その瞬間、なつめは身に沁みついた習慣で、つい反撃してしまいそうになった。

実は、なつめは結城流という格闘道場を経営している。基本的に他流試合をしないため、目に見える成績はないのだが、その腕前は道場破りを返り討ちにするほどであった。今回の潜入にしても、「ミイラ取りがミイラに」そんな言葉になつめは気にもとめていない。結城流格闘術の若き師範としての自信がその裏付にあった。この威張り腐っている男など、ものの数秒もあればノックアウト可能だ。だが今それをするのは、もちろん得策ではない。

「どうもすみませんでした」

なつめは竹田の顔を立てるように謝った。すると竹田は去り際に、丸めた雑誌でなつめのお尻をポンと叩いた。道場には習い事の一つとして通う子供が多いが、最近では護身術を身につけるため通う女性も増えている。師範として、男の理不尽なセクハラ行為は許せない。妹のため、女性のため、自身の矜持のため、なつめは改めて強い決意を胸に刻んだ。

ななみの手がかりを掴めないまま一ヶ月が過ぎるころ、なつめは、アイドルとしての活動を始めていた。

小さな舞台に立ち、ほかのアイドル

たちと一緒に歌と踊りを披露する。

「優希様——！！」

「優希様、こっちにも視線を」

その美しい容姿で、なつめには早くもファンがついていた。これまで格闘技一筋で生きてきたため、男たちから気安く声をかけられることはなかった。それが場所を変えればこれほど変わる。男たちはなつめに熱を上げ、その表情は恍惚としている。恥ずかしく思いながらも悪い気はしなかった。

「オッオッオッオッ ゆーうーき♡」

「オッオッオッオッ ゆーうーき♡」

声援に押されてステージの前へと進む。なつめのソロパートが始まった。拔群なスタイルを動かして、キレのあるダンスを披露する。観客は熱狂し、その熱狂を受けたなつめをさらに高揚させる。熱気が熱気を生む空間に、なつめは身体を痺れさせていた。

「クール、ビューティー、優希様♪」

あまり得意ではない歌にも、なつめのための合の手が入る。優希様などと呼ばれ後押しされて、精一杯格好をつけて歌う自分がいた。慎ましく生きてきたなつめにとつて、新たな自分の発見であった。

「「お疲れ様ー、お疲れ様ー」」

舞台裏に下りると、同じステージに上がったアイドルたちが、互いに労をねぎらった。玉の汗を浮かべて、呼吸を乱しながら、それでも舞台の興奮を引きずってハイになっている。それはなつめにしても同様で、あまり大きな

声では言えないが、確かに快感だった。

深夜、なつめは寮の廊下で息を潜めていた。やがて竹田が現れて、そのまま玄関を出ていく。なつめは静かに管理入室まで進むと、鍵穴に細い器具を差し込んで、器用に鍵を開けた。

「やはりあるとすればこの部屋に」

管理入室へ侵入するのは、これで三度目だった。早速、目星をつけておいたファイルに目を通していく。

「ない……。ない。ない。ないない」

事務所の所属タレントなので、確かにななみの名前は載っている。しかし、所属寮となると、いくら探しても不自然なほどに見つからない。まるで意図的に隠されているようである。

（おかしい。どういうことなの？）

そのときだった。

「おい。誰かいるのか」

部屋の外で声がし、なつめの心臓が凍りつく。竹田が戻ってきたのだ。（いつもならこんなに早く戻らないのに）

汗が頬を伝い落ちる。すると、

「竹田さん、私です」

部屋の外で女の声があった。なつめが見つかったわけではなかったのだ。

「おお。お前か。まあ入れ」

鍵が開けられる気配を察し、なつめは素早くベッドの下へと身を隠した。二人が入室したのを感じ、息を潜めて様子を窺う。やがて布擦れの音がし、男の足元にズボンとパンツが下ろされ

た。次に女が膝をつく光景が目に入り、水をはじくような音が聞こえ始める。

（何がおこなわれているの？ まさか、そんな屈辱的なことをするはずがない）

なつめの中で最悪の景色が浮かび、憤慨に胸が熱くなった。確かめずにはいられなくなり、恐る恐る覗きに行く。（うっ……。バカな！ なぜ、そんな男の汚らわしいものを舐められる！）

男と対等な立場で競い続けたなつめにとつて、男の性器を口に含むなど考えられなかった。それは男にひれ伏すことにほかならないからだ。

しかし、なつめの狼狽とは裏腹に、女にはさして抵抗感がないように見える。唇奉仕の間に会話をするほど手馴れていた。

「ねえ、竹田さん。私はいつ選抜隊に入れるのさ？」

「またその話か。この間、キャバクラのバイト紹介してやっただろうが」

「あれはありがとよ、また紹介して」

「お前、あれを本職にしたらどうだ？」

「ダメ。私はアイドルになるの。選抜隊に入ってみんなにちやほやされるんだから♡ それに選抜隊になれば、住むところもここよりいいんでしょ？」

（選抜隊？ ほかにも寮が！）

なつめの直感が、妹はそこにいると告げていた。

「ん……。ああ、もういい。やるぞ」

竹田は歯切れが悪くなると、話を打ち切つて女を押し倒した。そして服を脱ぎながら女に後ろから乗りかかる。



獸の格好でセックスが始まった。四つん這いになった女に対して、竹田が荒々しく腰を打ち付ける。

「なんて乱暴な！ 許せないわ、女を物や畜生のように扱って」

竹田に対して忌々しく思うと同時に、その野蛮な光景に戦慄を覚えた。

「あっ、あっ、あっ♥ い、いいー。気持ちいいのお。ああん♥」

さらに女からは、苦悶ではなく喜びの声が上がる。想像を超えた世界になつめは衝撃を受けていた。

「竹田さん。ご相談が」

「おお、夏目か。めずらしいな」

機嫌が良さそうだった竹田だが、相談内容を聞くと、すぐに真顔になった。

「選抜隊のことをどこ知った？」

「ほかの娘たちが噂しているのを聞いて。私、早くメジャーなアイドルになりたいんです。ただ年齢のこともあって、いろいろ必死で。あの……、触れてはいけないことだったでしょうか？」

なつめの言葉を聞いているうちに、にわかになつめの表情が変わり始めた。

なつめの顔から視線を移し、全身を値踏みするように眺め回す。そして、ニヤリと意味深な笑みを浮かべた。

「選抜隊ってのはな、事務所がプッシュするタレントたちのことだ。事務所が全面的にバックアップするからテレビや、ライブにもたくさん出られる」

「欲にまみれた卑しさを滲ませながら甘い言葉を囁く。なつめはそれに釣られた振りをして演技をした。

「ああ！ 私も選抜隊になりたいです」

「まあ、待ちなさい。事務所がプッシュするにはそれなりに金がかかるんだ。だから、タレントにはそれ以上稼ぎ出してもらわないといけない。選抜隊になるにはそれだけ、タレントとしての実績が必要というわけだ」

竹田は再びなつめを眺め回した。

「お前には実績がないが、見た限り素質はありそうだ。お前の心意気にも俺は感心している。だから俺の推薦もいうことで特別に仕事を用意するからやつてみる。そこで実績作りをするんだ」

甘い言葉には裏がある。敵の策略にはまりにいくようなものだが、妹に近づいたためにはそれが一番の近道だ。

「よろしくお願いします」

なつめは元氣良く答えた。

なつめに与えられた仕事は水着撮影会への出演だった。契約上、NGとしていた水着での仕事だが、竹田はここぞとばかりに入れてきた。

バスローブを羽織ったなつめは、撮影会場のドアを開く。そこは八畳ほどの狭い部屋で、中には男たちがむき背しくひしめきあっていた。

（こんな人たちの前で肌を曝すの）

それぞれが手に持つカメラは重厚で、まるで狙撃銃のように感じられる。今はバスローブを着ているが、その下は肌も露な姿。なつめを狙い撃つような

雰囲気、これまで経験のない緊張感が込み上げてきた。

「さあ、バスローブを脱いで」

横から竹田が促す。なつめは顔を赤らめて腰帯を解く。前がわずかに開いて、白い肌と水着の布地が隙間から覗けた。水着はパープルのビキニだった。肌を覆う布面積は小さく、試着室で着けたときは、まるでアダルト雑誌のセクシーモデルみたいな自分が鏡に映され、顔から火が出るほど恥ずかしい思いをした。それを今、人前で曝そうとしている。

（恥ずかしい……。でも妹のためには）

震える指先をかけ、躊躇いながら前を開いていく。すると男たちの目が見開かれ、早くもシャッター音が鳴り響いた。バスローブが肩を抜けてしまふと、なつめはあきらめるように足元へ脱ぎ落とす。細身ながらもグラマラスなライン、しかも想像以上の露出度に見場内がどよめいた。

（ああ……。なんてこと……。こんな姿が写真に収められてしまう……。）

一斉に切られるシャッターに、なつめは目眩を起こしそうになる。

無意識に隠そうと、腕が身体をかき抱く。そんな仕事も、羞恥に顔を染めた美女がやると絵になった。シャッター音が鳴り止むことはなく、なつめは逃げ道を塞がれた心境だった。

「水着をもっとよく見せて」

そう声をかけられ、なつめはおおざと腕を解く。上品な顔とはアンバラ

ンスな胸の膨らみ。くびれたウエストから豊かなお尻が描く見事なライン。膝下が長く、引き締まった野性的な脚線。カメラのレンズはそれらを余すところなく捉えていた。

「ほら、顔をもっとよく見せて」

（どこまで私に恥をかかせるつもり）

赤面した顔を起すが、真正面を向いていられない。恥ずかしさと悔しさをなげき出した顔を、わずかに背けてしまふ。

「前屈みになって胸を寄せてみて」

これまでと同じ声の主だ。あからさまな性的要求に、なつめは声の発信元を辿る。そこには竹田の姿があった。

（そこまでするなんて聞いてない）

訴えかけるような視線を送るが、

「どうしたの？ 笑顔、笑顔」

客前をいいことに、さらに酷な要求を突きつけてくるのであった。仕方なく引きつった笑顔を作る。

（ああ……。なんて情けないの）

道場破りにも負けたことがないなつめは、男に媚びない生き方に矜持があった。見も知らぬ男たちに笑顔を振りまくのは屈辱以外の何ものでもない。

「さー、前屈みだよ」

だが妹のことを思うと、今ここで立ち止まるわけにはいかなかった。なつめは膝に手を置き前屈みになる。ムニユ、と胸元が寄せられて、飛び出さんばかりに見事な谷間が出来上がった。

「おほおほ。ポイン、ポイン」

卑猥な揶揄がなつめの耳に入ってくる

る。視線は胸元に集まり、その瞬間、自分の身体が性的な慰み物になったのははつきりと感じた。あまりの恥辱に、頭の中が一瞬真っ白になる。

「こっちにも視線くださーい」「こっちにもー」そうリクエストされて、なつめは声のする方に顔を向けた。

（私がこんな格好をするなんて……。あああつ。写真を撮らないで。証拠を残さないで）

しばらくして人だかりは消えたが、なつめの疲労感はとて深いものだった。

しかし、これですべて終わったわけではない。この撮影会はほかの女の子たちと合同でおこなわれている指名制のイベント。なつめは初めてにもかかわらず、指名が殺到したため、やむを得ずグループ制での撮影になった。後のグループに回った参加者たちが、まだまだたくさんいるのだ。

「後ろ姿撮らせて」「ウインク頂戴」その後さまざまなリクエストが上がるが、事務的にこなそうとつとめた。何も考えずいわれるままに身体を動かしている、イベント終盤には「四つん這いになって」「腰に手を当てて見下ろして」そんな変態的な要求もこなせるほどになっていた。

（私も堕ちたものね）

なつめは自虐的に笑った。本来の終了時間もうに過ぎ、竹田がイライラし始めた。なつめに人氣が集中しすぎたのが災いした。まだ予約

が入っているのだ。中には有り金をかなりつぎ込んで二周目、三周目の者もいる。痺れを切らした竹田がなつめのもとに近づいた。

「俺は次の仕事が入っている。もう出ないといけないが、一人でできるか？」初めてのイベントで一人取り残されるのは、正直言って心細い。しかし、ここで竹田に貸しを作っておけば、選抜隊入りに近づけよう。

「えっと…、はい。わかりました」「さすが夏目だな。恩に着る」

ファンに頭を下げる竹田を見送ってから数十分後、撮影会の方も、ようやく残り一組になった。

最後の一組はみな見たことがある顔だった。つまり二周目以上の男たちだ。「ムフフ。四つん這いになって。手はこう。にやーって、猫みたいにね」

慣れもあるのか、要求は初めから過激だった。その男は肥満体で、衣服をパンパンに張りながら手本を見せる。「いいね、いいね。じゃあ次は、そのまんま腰だけぐつと持ち上げてみよう。猫が背伸びするみたいにさ」

示し合わせたかのように、分厚く丸いメガネをかけた別の男が、ぼさぼさの髪を掻きながら声をかけてきた。次はバランスボールを抱きしめながら乗りかかるよう要求された。それを寝転がり、異様な執念で胸をアングルに収めるのが、頭が禿げ上がった四十ぐらいの男だ。それとは別にお尻に狙い

をつけるガリガリの細目もいる。あまり見た目で人を判断しないなつめだが、どこか生理的に受けつけけない参加者たちだった。

「今度は後ろに手をついて座って」禿げ頭の要求に應える。ようやく解放された胸を、禿げ頭は撮りまくった。「おつ、いいじゃん、この姿勢」

ガリガリの細目が寝転がり、ローアングルからシャッターを切った。「いいじゃん、いいじゃん、もうちょっと脚を開いてみようか」

なつめが苦笑しながら脚をわずかに開くと、案の定、脚の間を通してシャッターが切られた。そして、何を思ったのか、細目はほふく前進しながら這い寄ってくる。

「ちよ、ちよっと！ あんまり近寄らないでください」

「何言ってるの。接写だよ、接写。撮影会なのに接写も撮らせないのかよ」

「二ーだ、そーだ二ー」

マネージャーがいらないのをいいことに、男たちは歯止めを失って傍若無人になり始めていた。

「ほら、もうちよっと脚を開いてさ」

なつめは「ヒッ！」と短い悲鳴を放った。細目の手になつめの脚を掴んだのだ。それを見習ったメガネに反対の脚も掴まれる。そしてその手に力が込められた。

なつめはほとんど無意識に反応し、左右両手で二人の男に掌ていをくらわせていた。

「痛つてえー。何するんだよ。暴力だ」「そんなつ！ もとはといえはあなたたちが悪いじゃないですか」

なつめは立ち上がり抗議するが、その言葉はシユプレヒコールのように連呼する「暴力！ 暴力！」という言葉にかき消されてしまう。

「暴行罪どころじゃないね。血が出たから傷害罪だ」

メガネが鼻血を見せつける。今度は「傷害！ 傷害！」という声に変わる。「あなたたちは何がしたいのですか」

なつめが毅然とすると、負けじと細目が立ち上がった。「言つてやれ」と結託した後押しに、細目がなつめの二の腕を掴んで言い放った。

「償つてよ。この身体でさ」

「!! じよ、冗談じゃない。バカなこと言わないで。そんなことが許されると思っているの！」

「じゃあ、警察に告訴するからな」

分が悪くなりそうになり、メガネが横から援護に入る。

「あなたたちのやっつてることが犯罪じゃないの」

「じゃあ、事務所に慰謝料請求する」

メガネの言葉になつめの身体が固まった。ここまでやって、最後に不手際を事務所に知られるのは嫌だった。「ちよっと触るだけだからさ。いいじゃん。それでチャラだよ」と細目が言う。その反対側から禿げ頭が近づき、声もかけずいきなり胸を鷲掴みにしてきた。



悪を許さない正義感溢れる令嬢エミリ  
その気高き信念が剥ぎ取られていく!!



# 機甲令嬢 恥獄の 人質解放艶技

せんやよみ とりさん  
小説 / 千夜詠 挿絵 / 鳥三  
NOVEL ILLUSTRATION

目の前のスカウターゴーグルに表示されたサーモグラフィが敵の体温の微かな上昇を示していた。初見でスキヤンしたデータに残った奴の体格からかなり正確な位置の特定ができる。「下の階……前方三メートルといったところね」

紫色の機動式動甲冑に身を包んだ少女、腰まで伸びた銀髪に翡翠の瞳をした彼女は、落ち着いた口調で呟いた。防衛大臣の暗殺を実行に移そうとしたのは三名。事前にその情報を得たお蔭で阻止することはできたが、予想以上の難敵にこの廃ビルに逃げ込まれる形となった。

「暗殺者集団、赤蜘蛛か……。流石忍びの末裔と言われるだけのことはあるけど……」

正確には誘い込まれたといったところか。最初から失敗した時のことを想定して、ここを狩場に設定していたのだ。

だが、そんな手練れ達であつても、彼女の敵ではなかった。

廃ビルの玄関から堂々と入り込んだ少女は、刀を突き立てた敵の頭上からの強襲をたやすくかわし、同時に放たれた三十八口径をアームガードで弾いた。

反撃は刹那のうちに、一人を蹴り上げ、ブーツの加速を瞬間最高に上げて、もう一人に迫った。

続きざまに響いた断末魔のような叫びは、残った一人にどれほどの恐怖と

プレッシャーを与えたことだろう。分厚いコンクリートの床を踵でトンと叩いた後、

「はあっ！」

トランポリンの上で跳ねたように少し跳躍した少女のブーツは脇に展開したノズルから火炎を噴きだし、

ズガガガ——ッ！ 一気に階下に突き抜けた。

コンクリートの破片が飛び散り、砂塵が舞う。視界が煙った。

降り立った次の瞬間、

シュン！ 飛び込んできた影の斬撃。アームが危険を告げるよりも早く、彼女はアームガードでそれを弾こうとする。

刃がハイブリッドの合金に深い創を刻んだ。パチッと一瞬、火花が散ったように見えた。

それは技を放った者の力量によるもの。なんと鋭い。

強敵に心が躍る。嬉しくて笑みさえ零れそうだ。

一秒にも満たないような敵の一閃の中で、剣圧に押し込まれる。だが——。

キューーン……。ターボのような高速回転の音と共に、アームガードは刀を振り払った。

ズゴゴッ！ そいつの体を払い除けると、彼は受け身を取る間もなく、壁に激突したのだ。

（やり過ぎた？）

ゴーグルに表示された心拍数は危険値を示していない。だが、全身打撲に

骨の数本はいつているはずだ。完全に無力化したのは間違いないかった。

塵煙りが落ちて視界が広がる。

自虐的な笑みを浮かべた暗殺者の力なく開かれた瞳に少女の姿が映った。安っぽさの微塵もないなんと高貴な顔立ちか。それゆえに冷徹な表情が女神を彷彿させる。

「そうか、お前が、焰木の……」

微かに慈愛を込めた微笑みを浮かべ、彼女はアームガードの先端から一発の針状の弾丸を撃ち放った。

首都圏上空、民間のヘリが一機、南

\*

に向かつて飛んでいた。

「暗殺集団に関しては、後は警察に任せていいでしょう。お嬢様、やり過ぎ

ていないですよね？」

淡々とした口調で話しながら、メイドの香山が飲み物を渡してくる。

「機動式動甲冑の腕の力の設定が少し強過ぎたわ。まあ、死んではいけないでしょう。自害されると困るから、睡眠

弾で寝てもらっているけど……。それより、先程報告された大使館の方はどうなっているの？」

焰木エミリは、目の前の端末を操作しながら、必要な情報に目を通す。ヘリの中ではまだ着替えることもできず、アニメのリアルロボットのようなシル

エットをした強化スーツに身を包んだ

ままだ。肩パットにあたる部分には、

HOMURAGIのロゴがある。

戦う令嬢、美し過ぎるヒロイン、魅了したアテナ等々、マスコミは連日のように彼女を取り上げ、今やエミリは時の人となっている。

元々自社が開発していた対暴漢用の装備を見た彼女が、正義感からそれを使って悪人退治を始めたことからだ。最初は周囲から危険との理由で反対されたが、銀髪美少女の活躍は直ぐに人々の関心を集めだし、不本意ながら自社のPRへと利用されることになってしまふ。

「グルシア公国大使館では、現在テログループに完全に占拠され、およそ二十名の職員、および駐日大使の息子

さんですが、人質として捕らえられているようですがね。機動隊にS.A.Tも投入されていますが、睨みあつたまま時間だけが過ぎていくようです」

「やはり、先日テログループの幹部を一人確保したことが発端かしら？」

「犯行声明もありませんし、要求もまだのようです。ですが、それで間違いないかと」

「いいわ。いずれにせよ、直ぐに行動にできる必要があるわ」

自分の祖父が経営する会社であるといつても、宣伝に利用されるのは不愉快だった。それは、一見クールな印象を与えるエミリが純粋な正義感が強い証拠でもある。

「お嬢様、ひよつとして、このまま大使館に乗り込むつもりですか？ まあ、こんな事件が起こってじつとしてい

れるお嬢様でないことぐらい存じておりますが、せめて機動式動甲冑のメンテナンスを終えてから……」

「香山、お母様が中東のプラントでテロに巻き込まれて亡くなった事件は覚えてるわよね。理不尽に誰かが泣かなければならなくなるなんて、絶対に嫌なのよ」

怒りや悲しみよりも、寂しそうに遠くを見詰めるエミリの表情にメイドはそれ以上反対できなかった。

香山は覚えている。まだエミリの幼い頃のこと、巨大企業グループの令嬢として教育された彼女は、必死で泣くのを堪えていた。

その彼女を抱きしめ、ようやく涙を流させたのは、当時から彼女に仕えていた二つ年上の香山だ。

「分かりました。一分でプランを立てます。新開発のあれがあれば良かったのですが、現状の装備でいくとなると……」

頼もしい従者の横顔に笑みを浮かべるエミリ。強化スーツのバッテリーの残量を確認しながら、気を引き締め直していく。

大使館の近くに自社のビルの一つがあったのは幸いだった。屋上のヘリポートに降り立つと、エミリはすぐさま行動に移す。

最優先するのは人質の生命であるが、二十名もの人間をエミリ一人で一度に防護するのは難しい。今回はやはり警

察との連携が必須となった。

第一段階として、施設内への潜入を行う。テロリストらの戦力、彼らや人質の配置といった情報を正確に得る必要があった。

作戦開始からものの数十秒でエミリは大使館内への潜入を果たしていた。屋上まで一気に跳躍し、堂々と扉から中に入っている。小銃を構えた見張り

は物音には反応したが、彼女の姿を捉えることはなかった。

なんてことはない。機動式動甲冑のステルス迷彩機能を使えば、ほぼ透明人間になったのと同じだ。

エミリの装備したスカウターゴーグルには、録画する機能はないが、センサの表示は記録され、そこから中の状況は十分に把握できる。サーモグラフィを頼りに、階段を下りていったエミリは人が大勢集まっている場所を特定し、そこに近づいていく。パーティーなどを催す

大きめの来賓室のようだ。  
（相手にはこちらは見えぬ、このまま制圧してしまおうかしら？ ううん、ダメね。やみくもに銃を乱射されたら、流れ弾が人質に、つてこともあるし……、んっ？）

スカウターの表示に乱れが生じている。違和感を覚えながらも、予定通りに人質が捕らえられていると思われる部屋の中に入った。

勝手に開いた扉に、テロリストの数名が銃を構えながら不可思議な表情を見せた。部屋の奥には二十名ほどの

人々が押し込まれるように端に座らされていて、顔を蒼白にしている。

（人質の人数は情報通り。ここは予定通りに情報を外に転送して、私は、突入の際に、人質の防護に徹するのが最善……）

左アームにある端末を操作しようとしたその時、パチつと何かがショートしたような音がした。

「な……っ、これは……」

ゴーグルにエラーが表示される。すると透明化していた自身の体が所々可視化してしまい、異変に気づいたテロリストどもに注目を浴びてしまう。

（先の暗殺者との戦闘で受けたダメージのせい？ いけない、このままじゃ完全に姿が露呈した。もうこのまま制圧するしかない。）

一番近くにいたテロ兵士の銃を蹴り上げ、掌底で吹き飛ばす。姿勢を低く突進し、照準をつける男の銃口を握り潰すと、ギョツとしたそいつの頸を殴る。脳震盪を起こして倒れ込んだ。

だが、人質に近づくとわけにはいかなかった。残った五名のテロリストの発砲が始まる。銃口を一般人に向けてさせるわけにはいかない。

大理石の柱の陰に一日身を潜めたその時、

「そこまでだ。大人しく出てこい」  
リーダー格と思われる男が、人質の一人に小銃の先端を向けていた。怯えて震えているスーツの男性が今にも泣きそうにこちらに視線を送っている。

自分一人逃げ出すのは簡単だ。しかし、奴らの仲間二人を既に行動不能に至らしめた今、報復に人質を殺しかねない。判断ミス。失態。それを悔やんでいる場合でもなかった。

「……」  
両手を上げて、ゆっくりと犯行グループの男らの前に出ていく。

「妙なまねをしたら、直ぐにトリガーを引く」

今こそ冷静になる。無表情のまま、エミリは視線だけ動かして、敵の配置を確認し、そしてまずは人質の身の保証をさせるべく交渉に入った。

「この国の事情は御存じかしら。私は、焰木エミリ。焰木グループ会長の孫娘で、祖父は政財界にも多大な影響力を持っています。私が入質になりますから、その男性に向けた銃口を下げてはもらえませんか」

リーダーの男にテロ兵士の一人が耳打ちする。

「へえ、お前さんがね……。確かに要人は多いに越したことはない。だが、その前に、アンタの身に着けている物騒な機動式動甲冑とやらを外してもらおうか」

無言のままエミリは頷く。

アームガードをまず外した。射出系の武器の多くはここに集約してあるの

るような音がして、外されたそれを床に置く。

だが、その頃からピリピリした周囲の雰囲気が変わった。

「何……？ 警戒して見られているのは分かるけど……、この纏わりつく感じは……」

うっとりとして、そして卑猥なニュアンスの溜め息がこちらから漏れていた。

機動式動甲冑の下に、エミリは肉体にびったりと張り付くボディスーツを着たそれは、彼女の生まれたままの姿の形状を表していた。

（う……っ、そ、そういうこと……。胸元に視線が集中して……。なんて俗物達……）

男の立場からすれば無理からぬほど、豊満なだけでなく、淫靡な球状の形は、僅かな動きにもブルンと弾力を誇示していた。美しい釣鐘状は質量も重量感も全体像からアンバランスなほどなのに、肢体は芸術的にも映った。

今は気にしてはいけない。

腰当、機動ブーツを外すと、彼女は濃紺色のボディスーツだけになった。

男達の目の色が更に変わる。エミリの肉体の形状そのままを浮かびあがらせる競泳水着ほどの厚さしかないボディスーツ。しなやかでスリムな全体像にあつて、角ばった印象のまったくない女性らしい曲線で描かれていた。

胸元だけでなく、括れた腰回りが球

状に肉付いた臀部の色香を余計に目立たせ。むっちりした太股の脚線は男達の唾液を溢れさせた。

あからさま過ぎるほどに、男達の視線が体中に絡み付いてきて、流石に見られていることを意識しないわけにはいかない。

自社の研究所では、男性技術者の前でもこの姿を何度も晒してきて、その時は別段気にすることはなかった。だが、テロリストの男達の瞳に宿りだした邪なものに敏感に気づいてしまい、それは交渉相手に向けるものではなかった。

「さあ、装備を外したわ、これで満足かしら」

テログループの男達の表情が先程までの険しいものから変わって、ただのスケベオヤジのようになっていた。

嫌悪感と微かな羞恥を覚えながら、せいぜい油断するがいいと心の中で鼻で笑った。

ニヤニヤしながら目配せするテロの男達。

「いいや、アンタの装備についてこちらは何も情報がない。もつと隈なく見せてもらおうか。両手を上に高く上げて、足も少し開くん」

「……これで……いいかしら？」

無防備な状態にされるのは仕方ない。だが、ゆつくりと数人のテロ兵士が近づいてくると、だらしなく口元を緩めた顔に虫唾が走った。

「近くで見ると、ほんと、たまんねえ

体つきをしてんな」

「どれ、ちよいと調べさせてもらうぜ」息が掛かるほど、顔が近づけられ、光沢した色合いのボディスーツに温まった湿りが付きそうなほどだ。

（ちよ、ちよつと、胸や、お尻ばかり見て……）

素材の吸着した胸元のラインを視線が舐め回してきて、後ろでしゃがみ込んだ男が、浮き上がったお尻の谷間を見つけて興奮を高めていた。今にもむしゃぶりついてきそうな雰囲気、身が強張ってしまう。

（く……、ダメ、こんなことくらいで……。落ち着いて……、こんなんじやいざという時に体が動かない。……っ！）

「ひや……っ！」

ごつごつした指先をした掌が腰の辺りに張り付いてきた。

「ちよ、ちよつと、触らないで！」

「身体検査さ。どこに武器を隠し持っているか、分かったもんじやないからな。へへ……」

ブルツと怖気、体が震えてしまう。

ペタペタと汗ばんだ男の手が、腰回りと太股を軽く叩いてくる。こちらが我慢できる程度を確かめるように、お尻や乳房には触れてはこなかったが、

触れられるたびに、男の劣情がひしひしと伝わってきた。

ギリッと噛み締めた時、やつとりーダーの男が、部下を下がらせる。ほんの少し涙目になって、エミリは

睨みつけた。

「武器なんて、な、なかったでしょ」

「そうだな……、いや、俺達の知らない技術って可能性もある。うん、やっぱり、そいつも脱いでもらおうか」

どこまで破廉恥な連中なのか。ぐつと拳を握り締めた。

「こ、これには衝撃を和らげるくらいの効果しかないわ。貴方達の脅威にはならないはず」

リーダーの男は、人質の男性の頬に銃口を擦り付ける。

「そのスーツとこいつと交換でどうだ。なんなら解放してやってもいい。嫌なら交渉は不成立。残念だが彼には神の下に召されて頂くとしよう」

僅かばかりトリガーに掛かった指に力が込められた。躊躇いは微塵もなく、その機械的な動作は、本気を示している。

「待って！ んっ……。わ……。分かったわ」

一人でも解放させれば、彼は内部の情報を外の警察に伝えてくれるだろう。何よりも人の命がかかっているのだ。スーツの内側にはまだ下着があつて、自分のセミヌード一つで救えるなら安い物だ。

言い聞かせながら、まだ平気な顔を繕っていらされるだけの落ち着きはある。びつくりと肉体に張り付いたスーツ

のファスナーは背中にあつた。胸を張るようにながら、両手を回し、指を

掛けると、スタイルも抜群な彼女が脱

ぎだそうとする仕草はフェティッシュな凶柄を見せる。

トクンと鼓動が響いた。

「く……、こんな奴らの言いなりになるなんて。今は、我慢するしかないわうつ、指が震えて……、緊張？ 恥ずかしさ？」

体が熱い。無遠慮に体を這い回る視線に、火に炙られているようだった。

テロ兵士らだけでなく、人質の人々の視線も集まっている。刹那、静まり返り、フアスナーが下ろされる音だけが響いた。

「ん……っ」

背中から蒸れた湿気が出ていくのを感じる。続げさまの戦闘で、自分でも気づかぬうちに全身が汗ばんでいたようだ。

人質となつている女性らは哀れむような表情を見せ、男性は申し訳なきようにしながら、どこかそわそわしだしていた。

むちむちしたお尻の谷間の真上までフアスナーは降りて、白く健康的な艶肌が覗けた。

肩から密着していたスーツを脱ぎだし、上半身が、覆う面積も最小限のマイクロビキニブラだけの姿を晒す。

「ほお、かなりえぐいのを身に着けているじゃないか。そそるね」

「……」

答えることはせず、ただリーダーの男に鋭い視線を向けた。ラインが浮き出ないようにと選んだ下着であり、見

せることを想定していたわけではない。ただ、口にされてしまうと、まるで自分が男性を誘惑する為に身に着けているようで、実際に男達の反応は効果を実証してしまっている。

改めて自分の姿を意識してしまつて、たぶたぶと揺れる胸の肉果から溢れ出る、汗ばんだ牝肌の香が鼻腔に届いてくると、抑えていた羞恥心が一気に高まつてしまふ。

「ほら、早く全部脱いでしまえよ」

「あらあら、焦る男はモテないわよ」

まだ大丈夫、平静を保てるだけの精神状態であることを自己分析し、腰から更にスーツを下げようとするが、

（ふ、ふん。この恥辱、数倍にして返してやるわ。……いいえ、落ち着きなさい、でないと、この窮地を脱する機会を見逃してしまふわ）

少し横に広げるようにしてスーツを下ろしていくが、肌に吸着するような素材では、くねくねと腰を横に振るようにならなければ脱げていかなかった。その動きはまるで焦らすように、牡を挑発するようである。そんなことに気づいてしまうと、顔まで熱くなつてしまった。

「さあ、これで……いいかしら」

ひゅーつと口笛を吹く音が聞こえた。

下着だけの姿になつたエミリ。ショーツもGストリングスで、クロッチも恥毛が食み出しそうな極小、あとは紐だけといった頼りないガードだ。やはり全身が汗ばんでいて、特に蒸

れていた鼠蹊部から、湿つた牝香が立ち昇ってくる。裸同然の姿も勿論、自身の体臭がまるでフェロモンを撒き散らしているかのように、余計に恥ずかしさが募つてしまふ。

だが恥ずかしがっている感情を露わにするわけにはいかない。まだ隙のない女であることを印象付けて、彼らの警戒を自分に向けさせておかなくてはならなかった。堂々とモデルが観客に見せつけるように立つ。

「ああ、いいだろう。アンタのその格好には人質一人分の命には十分換えてやれる」

リーダーの男は、部下に命じて銃を突き付けていた男性を外に連れ出していった。ご丁寧に来賓室のテレビをつけて、彼が解放されるところが報道されるのを見せてくれる。

一瞬、安堵するが、

「どうだ、交渉の続きをしないか？ 今度はおばさんとアンタのその小さなブラと交換といこう。くく、何時までその澄ました顔がもつかな？」

「な……っ!?!」

ヒイイつと小さな悲鳴が聞こえ、小銃を向けられながら立たされた年配の女性が見えた。涙目になって縋るようにならぬように視線を送ってくる。

「……い、いいわ。こんなもの一つで、その人を解放してくれるなら」

了承の言葉を発するまでは簡単だった。しかし、両手をブラのホックに掛けたその時、指先が震えてくることに

気づく。

（何をしているのエミリ。胸を曝けだすことと人の命、選択に迷うようなものじゃないじゃない。でも……）

そこにいる人々の視線が全て自分の乳房に集中しているのが分かる。まるで捏ね回されてるかのように感じてしまい、むず痒さすら覚えてしまふ。それでも人質達を安心させるようにごちなく微笑んだ。

ブラカップが豊富な乳果から外れた瞬間、一層膨らみを見せながら脂肪球はぶるんと揺れ動いた。性衝動を駆りたてる釣鐘状の、美しくも、卑猥という観点から迫力あるそれが完全に露出し、桃色の乳輪と円柱形の乳首が晒されてしまふ。

おお、という唸りが周囲から漏れた。それは人質となつている男性からも発せられていて、ほんの一時、彼らは自分達の置かれた状況を忘れてしまったかのようだった。

「本当に、いいチチしてるな。こんな女をよこしてくれたことに、我らが神に感謝しなくてはな。おつと、手で隠すなよ」

乳首が視線でジリジリと焼かれているように感じる。すると、痺れるような感覚と同時に、コリコリと癩つてきて、乳頭は膨らみを増してしまつた。

（こ、こんな時に、どうして……？）

彼女の早熟な肉果実を余すところなく見てやろうと瞳を血走らせていた連中には、その反応は直ぐに気づかれて





しまう。

「おいおい、乳首おっ勃てるじゃねえか。見られて興奮してんのか？」

湯気が出るほどに顔に熱が籠った。  
(見られて感じる?! そ、そんなことあるわけないわ)

なんとか無表情を繕うようにして、無理して片手を腰にあて、対峙する姿勢を崩さない。

「さあ、その女性を解放して」

「ああ、いいだろう。ただ……他の人質連中が、羨ましそうな顔をしているな。ん……っ?! 爺さん、やけに苦しうじゃないか?」

年配の男性が胸元を押さえていた。脂汗を掻いて、体調が悪いのが一目瞭然だ。

「そ、その人も解放して」

「そうはいかない。俺達は、約束は守る。だが、この爺さんがこでくたばろうが、大勢に影響はない。それとも何かこの爺さんと交換してくれるのか?」

人質になっている人々の求めるような瞳がエミリに強烈な圧力となつてのし掛かってきた。

迷っている時間なんてないように思われた。いやらしく劣情の籠った瞳で笑みを浮かべるテロ兵士らの顔から彼らの望んでいるものは明白だ。

「……こ、交換……しましょう。その老紳士と、私の、この下着と」

「ふはは、こいつはいい。お前のその臭そうなパンツとこの老いぼれと

か?」

カーツと顔が真っ赤になる。確かに汗ばんでいて、湿気の籠った下着にはムンとした自身の秘部粘膜の香が染み込んでいることだろう。

「なかなかの条件だが、言い方が気に入らない。そっちが切りだしたことで、きちんとお願ひしてくれよ」

キッと一度リーダーの男を睨むが、老紳士のことを考えれば、悩む余地すらなかった。

「お、お願ひします。この……パンツも脱ぐから、その人を解放してください」

「どんなパンツだつて? あと、俺達がお前の全裸が見たくて堪らなくなるように挑発してみせろよ」

「こ、この……、く……っ、分かりました」

両手を頭の後ろに回し、両脚を少し開き、恥丘の盛り上がりが目立つように腰を突き出しながらくねらせる。セックスを連想させるように、前後から左右へと揺らし、そるるように肉付いたお尻を震わせた。

「私の体を覆つた最後の一枚……、この、汗蒸れて、く、臭くなったパンツを脱いで……、股間も丸出しにしますから、ハア、ハア、その人を解放して」

段々と表情を保てなくなつて、眉根が寄つてしまう苦辱の顔を表してしまふ。耐え難い羞恥に、意識が朦朧とするほどで、目の前が真っ白になつて気絶しそうだ。

「ひゅうひゅう、エロいぜ、姉ちゃんほら、もつと腰振つて、そのデカ乳も揺らせよ」

「いいぜ、こつちに近づいて、よく見せてみるよ」

上半身も激しく横に動かし、柔らかな弾力を誇示するように巨乳がたぶたと揺らされる。左右の乳房が叩きあい、その刺激が性悦を生んでしまふ。

(こ、こんな恥ずかしいことしているのに、な、なに、これ? 物理的な刺激が、肉体をおかしくしてるの?)

はやし立て、今にも涎を漏らしそうな表情をしたテロ兵士らを見ると、女としての自尊心が擦られるような気分になつてしまふ。マスコミに注目されだした時の戸惑いに似て、鬱陶しくもどこか嬉しくもあつた。

「いいだろう。交渉成立としてやる。じゃあ、さつさと脱いでもらおうか」

「ハア……、え、ええ……脱ぐわ」

戦闘に比べれば大した運動量ではなかった。それなのにやけに呼吸が深く乱れてしまつてゐる。

女の一番大切な場所を守つた最後の砦、頼りない面積しかなかったGストリングスショーツが、こんなにも大事なものであつたか。

(ん……っ、これを脱いだら、私の一番恥ずかしい、オ、オマンコまで見えてしまふ。こんな卑劣な奴らに……でも、脱がなきゃ、脱ぐ……ハア……)

平静さを装うこともできなくなつて、泣きそうな顔になつてしまふ。だが、

緊張とは別の震えが全身に現われ、深い息遣いに胸の巨果実がゆつたりと大きく縦に揺れていた。

下着の紐に指を掛け、一度周りを見ると、人質の男性も含めた期待に満ちた瞳が向けられている。

(私の裸で、人質の男の人達も恐怖を忘れてゐる。あ、あそこも、大きく膨らませて……)

自分の肉体が性欲の対象となつてゐることを強く意識させられてしまつた。

「じゃ、じゃあ、脱ぐわ……」

むっちりとした太股の中間まで下着を下ろすと、濃厚な汗ばんだ女の芳香が放たれ、湿つた恥毛が露わになつた。

「おほっ、とうとう脱ぎやがった」

「へへ、まさか、占拠した大使館でこんなストリップショーが見られるなんてな」

あからさまに喜んでゐる男達の声を聞きながら、自分から離れていく下着を名残惜しそうに見ると、クロッチの内側と肉裂の合間に細く糸を引く液体があるのが分かつた。

(嘘……っ、私、濡れて?! ち、違わ、これは汗よ!)

二重の羞恥に顔が上げられない。完全にショーツを脱ぎ、それを握つた手にはまだ自身の生温かさが残つていた。

「よし、老いぼれを解放してやる。先のパパアに連れていってもらふといひ。あと、交換の条件だ。そのスケベな下着を投げてよこしな」

「っ……」

左翼征けえ  
ええええ!!

一兵たりとも  
逃がすな!

敵を蹴散らす  
凛々しき女騎士登場!

アルトリゼ  
騎士団長様!

蛮族どもから  
使者が送られて  
きました!!

今になって  
ようやくか

宜しい!

降伏勧告に  
敵陣へ赴く

団長自ら!!  
危険です

案するな  
私一人殺しても  
戦況は変わらん

奴らとて  
そんな無駄は  
すまいよ

# 蒼哭のアルトリゼ

～打ち捨てられた鎧～



ようこそ  
お越し下さい  
ました



噂に名高い  
アルトリゼ  
將軍ですね

恐縮ですが  
議場に入る  
前にこの：

武器、魔法の類、など  
他者を攻撃する手段を  
持たないことを誓います

武装解除の  
誓約書に署名  
下さいませ

無礼で  
あろう！

良い！

キサマ！

丸腰でなければ  
怖くて話もできぬ  
のなら仕方ない

アルトリゼ



まいざと  
なれば

こやつらなど  
ナイフで十分



どうされ  
ました？

いや…  
別に

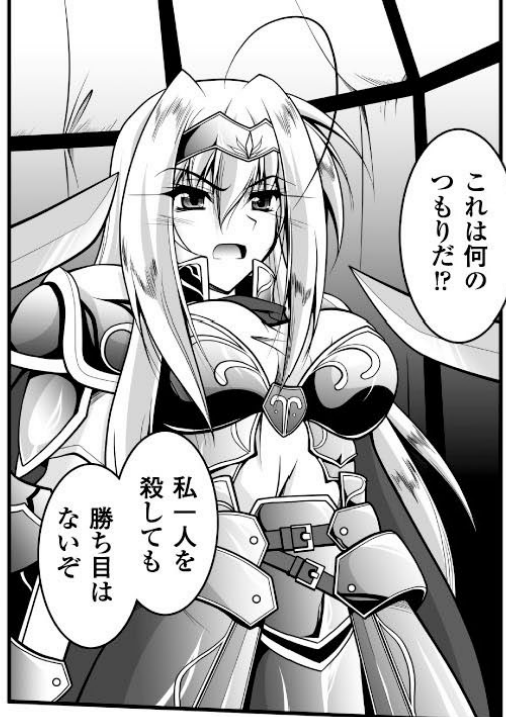






一人じゃ  
なればば？

ととと…



これは何の  
つもりだ!?

私一人を  
殺しても  
勝ち目は  
ないぞ



副長…!!

どうです??

へへ…俺が  
寝返ってたら



おっと  
俺は  
ごめんだね



く…  
騎士となった  
時から皆…

こうなる覚悟は  
できている



これでこの  
戦争は逆転よ

後を継いだ  
俺が軍を撤収

騎士団長が  
裏切り  
部隊は  
混乱









オイ  
おかしく  
ねえか？  
あの反応は  
例の呪いの

お楽しみは  
これからだ  
さ続きを  
どーぞ

何も知らず  
馬鹿な女よ  
ああ  
あの誓約書

上記の誓いを破った  
は、  
私情の呪いをその身に  
つまみ：  
てコトは  
誓います。

オイッ  
その辺に  
しとけよ

ぐ...っ

も...と  
油断させて

隙を突くしか  
ない...!!

し...

オ...

オ...

オ...

オ...



おおっ!  
たまんねえ

ツ!!

いい乳して  
やがんぜ!

ぐへへ

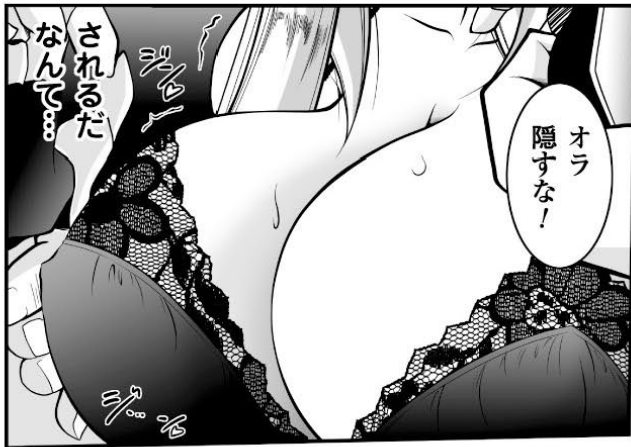


穢らわしい物  
見せるなあ

や...  
やめろ!

く...  
こんなゲスな  
見世物に

ストリップ  
ショーてのは  
こ...う...事...を  
する所なのさ



オラ  
隠すな!

されるだ  
なんて...



ギヤハハ  
ハハハハ

お前ばかり  
脱がせちゃ  
悪いと  
思つてな



マニアック  
だな  
ハハハハ  
ハハハハ

おっと  
ブーツは脱ぐな



ほらほら  
脱げよお

今に見ていろ

は...  
これであ  
いいので  
あろう!?

美味そ  
うな  
ケツだ  
ぜ

こいつ  
あ  
極上だ  
娼婦に  
でも  
そ  
うい  
ねえ



きゃあ  
あ!!

いやあ  
あ  
あ  
あ



おのれ...

オイオイ  
若エなア  
早すぎ!

回復も早い  
っスよ



今更  
好機!

だが  
不...

著者近刊

「女騎士エルザの復讐  
終わりのない娼婦淫戯」



好評発売中!

「孕め……フェリア……」

愛する王子の口から出た  
絶望的な言葉に、騎士団長は!?

# 聖騎士牧場

家畜に堕ちた戦姫たち

最終話「絶望」

小説 NOVEL うえだ 上田ながの  
挿絵 ILLUSTRATION A.S. ヘルメス

## 登場人物紹介



### フェリア=アルガスタ

アルガスタ騎士団の騎士団長。大魔導師ノノンに鍛えられ、心技ともに優れた少女として育て育った狼の耳と尾が特徴の少女。

### カールラント=ロフイナス=ラ=ガブランド

聖ガブランド王国の王子。国王が病に臥せている為、実質の最高権力者。フェリアとは両想いの恋仲である。

### バガルド=アズスク

ガブランドの宰相。国の行く末を心の底から憂いていて、国の為には手段を選ばない。フェリアに情念を抱いている。

### 前号までのあらすじ

魔物の侵攻から国を守る為に、亜人女性騎士を孕ませて兵力の増強を図る家畜牧場化政策が実行されてしまう。抵抗を続ける騎士団員達は一人、また一人と快楽に理性を壊され、孕まされてしまう。そして、最後まで抵抗を続ける騎士団長フェリアは……。

「殿下っ！ 殿下！ 殿下ああ！！」  
愛する男がそこにいる。  
守るべき男が……。  
自分自身よりも大切な存在が目の前に……。  
フェリアの瞳からは自然と涙が溢れ出した。  
騎士であることも忘れたかのように、泣く。  
どこにでもいるただの少女の様に、涙を零した。  
「ふえ……りあ……」  
そんなフェリアを呆然とした様子で、ガブランド王子——実質王国の最高権力者は見つめて来る。  
自分が見ているものが信じられない——とでもいう様な表情で……。  
「あああ……殿下……見ないで……見ないで下さい……今の……今の私を見ないで下さい……」  
衣装の大半は魔物によって溶かされてしまっていた。剥き出しになっている肌や恥部を、両手でなんとか隠そうとする。  
それでも隠しきれぬ柔肌に視線が向けられ、痛み  
の様なものを覚えた。  
魔物や兵士達によって不様なまでに犯し尽くされた身体——最早自分の身体は、カールラントと肌を重ねた夜とはまるで違っている。

彼に対してあまりに申し訳ない。  
愛する男と再び会えたことは嬉しい——けれど、喜びが辛さを増加させるのを感じた。  
「お帰りなさいませ殿下」  
そのようなフェリアの痛みなどにまるで斟酌せず、バガルドは主に対して慇懃に頭を下げる。  
裏切り者がするような行為ではない。  
主に対する臣下の礼そのものだった  
「ば……バガルド……バガルドおおっつ！！」  
その態度がフェリアには許せなかった。  
抑えがたい程の怒りがわき上がってくる。  
王国の剣であったアルガスタ騎士団——それを破壊した者が忠臣面？ 耐えられない。  
今すぐにでも八つ裂きにしてやりたかった。  
「殿下……殿下！！ その男は……バガルドは……裏切り者です！！ 殿下を裏切り……アルガスタ騎士団を……私を……」  
仲間達が受けてきた陵辱を、自分に身体に刻まれた辱めを思い出す。思い出してしまふ。  
身が引き裂かれそうな程の痛みを感じた。  
もう、元には戻れない。  
自分は汚れてしまった。もう、カールラントと結ばれることはないだろう。魔物に犯された身体を抱かせることなどできない。  
それでも、騎士団の仲間達だけは救って欲しかった。そして、皆を滅茶苦茶にした男にだけは裁きを与えて欲しかった。  
愛する男に最初に告げる言葉が裏切りの報告——こんなことしたくはない。しかし、今のフェリアにはそれ以外の選択肢は存在していなかった。  
「……分かってるよフェリア。キミ達がどんな目に遭ってきたのか……既に僕は知っている……」  
そう呟くカールラントの瞳は、今にも泣き出しそうな程に潤んでいる。

その表情だけで、彼が感じている痛みを認識することができた。  
「殿下……殿下……」  
更に涙が溢れ出す。  
だが、それと共に苦しく痛いけれど、喜びを覚える自分もいた。  
（これで救われる……。皆が救われる……）  
家畜の様な扱いから騎士達が解放されるのだ。  
そしてバガルドも自身の罪を償うことになる。  
「殿下……皆を……騎士達をお救い下さい。そして裏切り者に罰を……」  
胸に希望を抱きながら、フェリアは真っ直ぐカールラントを見つめた。  
「……フェリア……すまない」  
しかし、愛する男から返ってきた言葉は、何故か謝罪の言葉だった。  
「それはできない。アルガスタ騎士団の皆を解放することは……できないんだ」  
「……え？」  
頭の中が真っ白になる。  
彼の発した言葉の意味が理解できなかった。  
「ど……どういふことですか？ 何故？ どうして！！ 殿下は何を仰っているのですか！！」  
「……そのままの意味だよフェリア。ガブランドの王位継承者としてキミ達に命じる……。子を……子を産んでくれ」  
言葉にならない。  
意味が分からない。  
分からない。分からない。  
（夢？ 私……夢を……見ているの？ だって……そうじゃなくちゃこんなこと……）  
自分の愛する男が、最も信頼している男が、こんなことを言うはずがない。そんなこと、あるはずが

ない。あるはずが……。

「僕はね……フェリア……。負けたんだ。国境に現れた魔物達に完敗したんだ」

「絞り出すような言葉だった。」

「大勢の兵——従軍した兵の半数以上が死んだ。魔物に食い殺されたんだ。多くの民が殺された……。

村が蹂躪され、村人達は八つ裂きになった。幼い子供が僕の前で首を刎ねられ、身体を魔物に丸呑みにされた。村の広場が村人達の血で真っ赤に染まった様は、地獄……。そう、地獄そのものだった。なのに、それなのに……。僕にできることはなかった。ただ呆然と村人が、兵が、虐殺される様を見つめることしかできなかったんだ」

呆然とするフェリアに対し、カールラントは拳を握り締め、全身を口惜しさに震わせつつ、涙を流しながら語り始める。

「ただ逃げて来ただけだ。勝てない！ 勝てないんだよフェリア！ 人の力では魔物をどうにかすることなんてできないんだ！」

「で……んか……」

「奴等に勝てるのはキミ達巫人だけなんだよ。でも、だけど……キミ達は強くても数がいない。魔物達に二カ所を同時に攻められたらおしまいだ。国が減びる。民が死ぬ……。僕は痛いほどのそれを知ってしまったんだよ。だから……。だから……」

涙を拭い、主は——愛する男は、真っ直ぐフェリアを見つめてきた。

「子を産んでくれフェリア。国の為に……皆の為に、僕の為に……。たくさんの子を産んでくれ。バガルドから聞いた。バガルドの技術を使えば、妊娠から出産までの時間を短縮できるって！ 巫人を早く増やすことができるって！ だから頼む。産んでくれ！そして……そして魔物共を……一匹残らず駆逐してくれ！ 頼む！ 頼むっ!! 怖い！ 怖いんだ！」

魔物が……魔物が恐ろしいんだ！ そして憎い。なにをしたって、どんな手を使ってだって滅ぼしたいほどに……。だから……。すまない。すまないフェリアっ！ すまない……」

何度も謝罪の言葉を口にしつつ、フェリアにとつて絶望的な命を下してくる。

「……う……。嘘……。嘘よ……。こんな……。こんな嘘よ!! 嘘っ！ 嘘だわ！ 嘘よおおっ!!」

信じられなかった。

受け入れられなかった。

愛する男から、信じた男から、こんな命令が下されるなんてあり得るはずがない。

夢でも見ていないのではないか？ いや、夢であつて欲しい——心の底からそう思つた。

「ば……。バガルド！ 貴方……。何をしたの!? 殿下に何をしたっ!! まさか……。殿下に魔法をつ!!」

怒りの矛先をバガルドへと向ける。

「魔法？ 洗脳したとでも？ まさか、主にそのようなことをするはずありませんよ。殿下は……：自分で気付かれたのですよ。国を守る為にはどうすればいいのか……。ということにね」

「違う。違うっ！ 違うっ!!」

受け入れたくない。

必死に首を横に振り、否定する。

「信じない！ 信じません！ 嘘ですよね殿下!!」

きつと何かの間違いだ。そうに違いない。それ以外あり得ない。

「すまないフェリア……」

「嘘……。嘘よ……。嘘よおおおおお!!」

悲鳴が響く。

そんなフェリアの姿にカールラントは涙を零す。一瞬フェリアの身体を抱き締めるような素振りを見せた後「頼む……。バガルド」絞り出すように呟く。

抱き締めてはくれなかった……。

「はい。殿下……。私にお任せ下さい」

これにバガルドは笑う——笑うと共に、自ら身に着けていた服を脱ぎ捨て、醜く屹立したペニスを剥き出しにした。

「ば……。バガルド……。何を!? それは……。な、なんのつもり？」

「何って……。もちろんナニですよ。フェリア殿……。貴女を犯す。そして、子を孕んでいただく」

ペロッとバガルドは自身の唇を舐めた。

「い……。いやよ！ 貴方は……。貴方の子供だけは……」

絶対……。絶対にイヤあつっ!!

「だからこそです。貴女は私に強い憎しみを抱いている。そんな憎い相手に抱かれる。一番大切な人間の前でね……。その絶望で貴女の心を砕く。魔物でさえも孕ませることができなかった貴女を……。私が受精させる。殿下がすれば一発で妊娠かも知れませんが、汚れた貴女に王族の子を産ませるわけにはいかない。だから……。私で我慢して下さい」

「いや……。いやっ！ イヤああああつ!!」

近づいてくるバガルドから逃げようとす。

しかし、立ち上がるだけの体力はない。

それでも、カールラントの前でバガルドに犯されるという事態だけはなんとか避けたかった。

だからフェリアは俯せ状態で床を這う。

必死に、必死に這いずった。

「逃がしませんよ」

「ひぎいいいいっ!!」

しかし、捕らえられてしまう。

尻尾を掴まれ、引つ張られた。

「さあ、いきませよ」

俯せ状態のフェリアの秘部に、肉槍が密着する。

「駄目っ！ 駄目っ！ 駄目っ！ だ——」

ずっじゅっ！ ぐじゅっ！ じゅぶうううっ！

「ああ……。いやあああああああ！」



気がつけば、バガルドの動きに合わせて腰を振り始めてしまう自分さえいた。

腰と腰がぶつかり合うたびに、波立つように尻肉が揺れ動いた。弾む臀部。乳房がタツプタツプと何度も上下する。ピンク色に染まりながら、甘ったるい匂いのする汗を周囲に飛び散らせながら……。

「……………これは……………あつあつ……………違う！ 違ううう！  
私は……………かん……………じてない！ ぜ……………絶対に……………あつあつ……………かんじ……………ること……………はあつはあつはあつ……………な、ど……………ありえ……………なひいいい」  
それでも、認めない。

快感を認めるような真似だけはしなかった。何故なら、カールラントが見ているから……。確かにカールラントは自分を裏切った。

それでも、それでも、それでも、それでも、愛している男なのだ。誰よりも、誰よりも……。だから感じてる姿なんて見せたくない。

「どうしてそこまで無駄な努力を？ 我慢してもいいことなどなにもありませんぞ。認めなさいフェリア殿。快感を……………絶頂きたいと」

「ち……………がうつ！ 私は……………感じてない！ い……………き、たく……………はあつはあつはあつ……………な、ど……………ないっ！ ぜった……………絶対にいいいっ！！」

「だから否定しても無駄なんですよ。誰の目から見ても明らかなんですから。ねえ、殿下」  
ニタアツとバガルドが王子に笑いかける。

「そ、それは……………」  
「殿下……………家畜に情けは無用です。さあ、思ったことを口にして下さい。どう見えますか？ 今のフェリア殿は殿下の目にはどう見えますか？」

「や……………める！ 聞くなっ！ そのようなことを……………で、殿下に……………頼むっ！ 聞かないでっ！！」  
心の中に生まれるのは恐怖だった。

だから止める。必死に……………。

「さあ……………殿下！ さあっ！！ 国を……………我が国を守る為ですぞお」

しかし、それが聞き入れられることはなく……………  
「……………か、感じている様に見える。ば……………バガルドに……………おか……………犯されて……………喜んでるように見える。もつと犯してくれと訴えているように……………みみえ……………見える……………」

そう、カールラントは口にした。  
ガタガタと震え、ポロポロ涙を流しながら……………  
「あ……………で、殿下……………あ、あ……………ああああ……………」  
ピシッと心にヒビが入った。

酷い裏切りをしてしまった——そんな絶望がフェリアの心を覆っていく。  
「そういうわけですよフェリア殿。嘘はつかないで下さいね」

「わた……………わた……………しは……………私はあああ」  
「正直に答えて下さい。気持ちいいですか？ 感じていますか？ 絶頂きたいですか？」

「そんな……………そんなこ……………とおおお……………」  
カールラントが自分を見つめている。

その視線が痛い。  
どうしようもないくらいに痛い。  
辛く、苦しい状況だった。

この苦しみから解放されたい。何もかも、忘れてしまいたい——そう思った。  
(でも……………私は……………私は……………)

救わなければならないのだ皆を……………  
(だけど、でも……………誰が……………誰がそれを望んでいる？ 一体誰が？)

みんな犯されて喜んでいた。  
アルトも、リナも、ノノンも……………  
守ってきた城のみんなも、自分達が犯されることを望んでいる。  
愛した男——カールラントさえ……………。

「さあ、殿下……………命を……………騎士団長殿に勅命を！ 何をすべきかを命じるのです！」

バガルドがカールラントを見つめる。  
その視線を受けたカールラントは表情を暗い闇の色に染めつつ……………

「……………は、孕め……………フェリア……………」  
絞り出すように呟いた。

「あ……………あ……………ああああ……………」  
更なる絶望が心に広がっていく。  
「バガルドの子を孕むのだ……………。我が国の為に、強い騎士を産むのだ」

国の為に子を産む母胎——今のフェリアはそれ以上でも、それ以下の存在でもなくなっていた。  
意地を張る必要や意味など、最早存在していない。そのことをフェリアは悟る。

だが、それでも……………  
「い……………やだ……………。わだひは……………感じていない！ 気持ちよくなごないっ！ 殿下の……………殿下の命令でも……………こんな……………こんなにや男の……………子を……………孕みたくなごないいいい！！」

亜人騎士は拒絶の言葉を口にした。  
(絶頂きたい。もつと……………気持ちよくなりたい。孕めば気持ちよくなれるなら……………孕みたい……………。でも、だけど……………だけど……………だけどだけどだけどお)

自分だけは自分を裏切りたくはなかった。  
「凄意思の力だ。流石はフェリア殿……………。だが、これでも……………まだそんな口が聞けるのか!!」

逆らわれたことにどこか嬉しそうな表情を浮かべつつ、バガルドは更に腰を突き出してきた。

「ふっひ！ おひいいい！ こ……………れ、挿入っつて！ は、いつて……………くる！ おっおっおっ！ 奥……………奥……………奥……………」

まで……………し……………き……………子宮……………わた……………しの……………子宮にまで……………ペニスが！ おっおっおっ！ バガルドのペニスが挿入してくるううう♥」





「気持ちいい。気持ちいい♥ 気持ちいい♥♥♥」  
快感に思考が支配されていく。

「射精されたい……流しこ……まれたい……。でも、だめ……まだああああ」

「身体は膣中射精しを求めている。だが、それでもまだフェリアは……」

「凄く締めつけだ。射精して欲しいのか？ 孕ませて欲しいのか？」

「欲しい！ だ……して欲しい……。でも……いらない……孕まない！ 私はやま……なひい！」

「堕ちかけた心で抵抗する。」

「だ……誰が……孕ませて……ほ……ひいにやどおお」

「残った理性を振り絞り、拒絶する。否定する。」

「まだそんな口をきけますか……ですが、それが本当かどうか、試させてもらいますよ。貴女の膣中に射精します。安心して下さい。膣中射精しても、貴女が本当に妊娠を求めているなら、孕むことなどあり得ませんから——ねっ!!」

「どじゅぽっ！ じゅずっぽ！ どじゅううう！」

「ふっひ！ むひっ！ くひいひいっ!!」

「ピストンが激しさを増した。」

「これまで以上に膣奥に肉槍が叩き付けられる。」

「らっめ……やめで！ おおお！ やめで……もう……やめ！ ふっひ！ むひっ！ んひいひい♥」

「（気持ちいい！ よすぎる♥ おかしくなる♥ 欲しい。射精して欲しい♥ 射精して！ 射精して……射精してええ♥♥♥）」

「自分の心が自分を裏切っていく。耐えられない。限界だった。」

「で……んか……殿下……れんかあああ！ たしゅけて……たしゅけてえええ！」

「最早自分の意思ではどうすることもできない。最後に絶れるのは、愛した男だけ……」

「……妊娠しろ。受精するんだ……フェリア……キミは……我が国の……か……家畜だ……」

「だが、求めた救いに対して返ってきたものは絶望的な答え——」

「あ……あ……あああああああああああああ！」

「心が碎ける。」

「騎士ではない。家畜——ただの家畜。国の為の子を産む。それだけの存在……」

「絶望が広がっていく。」

「さあ、孕めえええっ！」

「その後押しをするかのように——」

「ぶびゅぽっ！ どびゅっ！ ぶびゆるるるっ！ ふっひ♥ 来たっ！ あちゅいのが……あちゅいのが……きった……きたああああ♥♥♥」

「多量の白濁液が、直接子宮内に撃ち放たれた。」

「しゅごい！ これ……しゅごす……ざりゅううう！ おっおっおっおっ——おーおーおーおーおーおほおおおおお」

「思考が真っ白に染まる。」

「いっぐ！ いぎゅっ！ いぎゅいぎゅいぎゅいぎゅっ——いぎゅのおおお♥♥♥」

「全身が激しく震えた。性感に心が溶ける。」

「きもちいい！ きもち……いひいひい♥ 膣中射精し——ながらひいひいのおおお♥ しゅごいっ！ しゅごいのおおお♥♥♥」

「理性さえも吹き飛ぶ程の絶頂感に包み込まれる。」

「あっひ……ふひあっ！ あひっ！ ふひい♥」

「あまりの気持ちよさに、再び失禁させしながらフェリアは肉悦に肢体を震わした。」

「（もう……はっひ……あひひ……ろうれもい……にやにも……にやにもかんがえられにやひ……あっひ……ふひひ……あひいひい……）必ず受精させるとでもいう様に、最後の一滴を撃ち放つまで挿し込まれ続ける肉棒に、身悶え続けながらフェリアは——」

「は……はへええええ♥」

「口元に壊れた笑みを浮かべた。」

「一ヶ月後——」

「騎士達が押し込められた牛舎の前には、多数の民達が集まっていた。」

「彼らは期待の眼差しで、牛舎の中に繋がれた重人騎士達を見つめる。」

「アルトヤリナ、それにノノンといった騎士達は、数ヶ月前と変わらず、全員全裸で四つん這いという状態だった。」

「ただ、捕らえられたばかりの頃とは違い——彼女達の下腹部は一目で分かる程に膨れ上がっていた。」

「そう、全員妊娠しているのである。」

「そして今——」

「お……う……うま……おっおっおっ！ うま……れりゅ！ わひの……わひの赤子が……うまれりゅううう」

「出産が始まる。」

「腹が……おおお！ わひの……はりやが……破れてしましうじやあああ」

「ぶしゅっ！ ぶじゅうっ！」

「ノノンの少女の様な秘部が内側から口を開く。膣口から多量の愛液が溢れ出した。」

「わ……たしも……私もですうう！ ふっひ！ くひいひい！ 動いている……お腹の中で……あ……赤ちゃんが……あっあっ……うご……いでりゅうう！」

「オレも……オレ……もだ！ おっおっ……ふほおお！ 開く……まんこが開いて……オレの……赤ちゃん……で……て……くるううう！ ふっほ！ んほおおおっ!!」



ノノンだけではない、アルトやリナの陰部までクパッと内側から大きく口を開いた。

そんな三人の反応に引かれるように――

「ぼ……くも！ うまれ……産まれりゅ！ うまれりゅううう！」

「しゅ……ごひっ！ これ……しゅっごひい！ 広がる……あかひやんで……あだひの……まんごがひろげられでりゅうう♥ ふっほ……むほおおおとおお♥♥♥」

他の騎士達も悶え始めた。

集まった人々に見せつける様に、全員の膣口がクパッと開く。

分泌される愛液量は、失禁でもしているのではないかと思える程だった。

「ふほ……おおお！ こわ……れる……わじ……ごわれでじまうう！ おっおっおっ！ まんこが……ぐしゃぐしゃになりゅうう！」

「頭が……頭が変になりそうだああ！ 裂ける……ふっひ……んひい！ オレの……オレのまん……こが裂けちまいそうだああ！」

「でも……ふひ……んひい！ きも……気持ち……いひっ！ 私……感じてる！ 感じちゃって……ま……まじゅううう！ 身体……かりやだ……こわれちやいぞうなの……いっひ！ ぎもちいひい！」

気持ちいいという言葉を証明する様に、身悶えながらリナは肉棒を痛々しい程にいきり勃たせる。

散々犯され続けてきた彼女達の肉体は、既に出産という行為にすら性感を覚える程に開発され尽くされてしまっていた。

「ふっほ！ むほお！ ひっひっひっ……ふひい  
いいい♥♥♥」

「ひっひっふううう！ ひっひっふううう♥」  
「はへー♥ はへー♥ はへああああ♥♥♥」

どっじゅ……むじゅぼっ！ どじゅぶっ！ じゅぼっ！ みりっ！ みりみりみりい！

荒く、それでいて甘い吐息と共に、肉穴が不気味な程に開いていく。

これを見つめる人々から「頑張れ！」「もうすぐ産まれるぞ！」「ほら、もつと息め！」「いいぞお」

応援の声が向けられる。

その声を耳にしつつ、騎士達は息む。性感に身悶えながら……

「ぎ……ぎもち……ぎもちいいい♥ いっぐ！ わじ……わじ……いぎゅっ！ ふほおおお！ いっぐ！ いぎゅううう♥」

「おぎえられねえ！ 産む……オレ……あかひやん……あかひやん……みながら……いっぐ……いっぐ……まううう♥ おっおっ……むほおおお♥」

「射精る！ これ……射精る！ 私……射精る……だしちやいます！ ザーメン！ ちんぼ汁！ 我慢できなひ！ きも……ち……よすぎ……もうっ！ おっおっ……もうっ！ もうっもうっ！ もううううっ♥♥♥」

騎士達の身体を包み込むのはどうしようもないほどの快感と、幸福感だった。

無理矢理犯され、種潰けされた。信じて、守ってきた者達に裏切られた。

本来ならば絶望的な状況である。でも、幸せだった。

気持ちがいい。気持ちがいい。気持ちがいい！ 快感さえあればそれで良かった。

気持ちよくなりたい。もつと、もつと……その思いのままに騎士達は――

「んんんんん！」

「んー。んー。んー！」  
「ふっぐ……むふっ！ ふんんんんっ！！」  
息む。

四つん這い状態で人々に尻を突き出しながら、まるで排便でもするかのようにひたすら息んだ。

「広がる！ 産まれる！ おおお！ 出る！ 出るうううう！」

「はっひ……はひああああ！ ふっひ……ふっふっふっ……むふうううう♥♥♥」

ブルブルと尻尾を震わせ、耳をヒクヒクと蠢かせ、だらしないまでに表情を歪ませるその様は、騎士のそれではない――完全なる獣のものだった。

そして――

どじゅっぼっ！ ぶじゅっ！ じゅずぼおっ！ 「ふっひ！ むほっ！ ふほおおおっ！ で……で……で……で……だああああ！ あがご！ おおお！ わぢ……うんでりゅ！ あがごうんでりゅう！ ふっほ……むほおおお♥」

「ずい！ である！ うんごみたいに……オレ……あがひやんうんでりゅ！ い……いひ！ ぎうもぢいひい！ いっぐ……オレ……あがひやん……うむのよすぎで……もうっもうっ……もううう！」

「射精る！ あがひやん！ あがひやんと一緒にわだち……わ……だひ……ちんぼ！ ちんぼ汁も……もうっ！ もうううううっ！！」

一斉に騎士達の下腹部から、亜人の赤子が生まれ出る。

「いぐっ！ いぐっ♥ わぢ……わぢ……いぐいぐいぐ……いぎゅううううっ♥♥♥」

「おおお！ むっほ！ うほおおお♥♥♥」  
「ふっひ！ ふひいひいっ♥ しやせー！ あかひやんうみながしやせーいひい♥ どっびゅどっびゅ……ちんぼ汁……あふれでりゅの……しゅごく

いひいひい♥ おっおっ……おんんんんん♥♥♥」

騎士達の表情はだらしないまでに崩れる。

痛々しい程見開かれ瞳。だらしなく開いた口からは舌が伸びた。

# 思春期な アダム

第13話

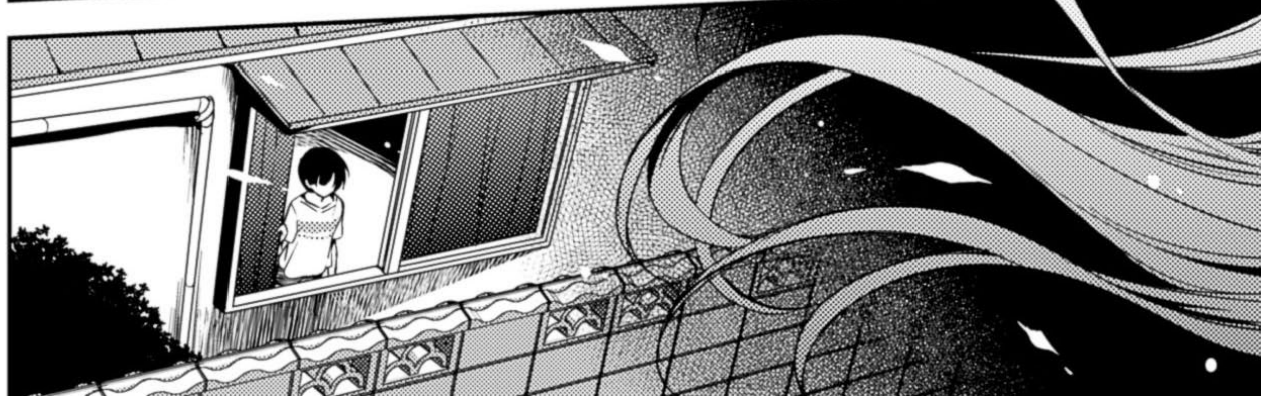
ハアツ!!

天海雪乃

原作 かさ  
さかき 肇

web 版コミックヴァルキリーでも連載中!  
<http://www.comic- Valkyrie.com/>

ただいま各種ダウンロードサイトにて  
二次元ぶち文庫「思春期なアダム」外伝 好評配信中!





エンシュ  
今日も特訓  
してる……

いつも  
ちよつと恐いし  
ワガママだけど

僕を守るために  
がんばってくれて  
るんだ



……いつも  
ありがと  
エンジュ



エンシュの負担を  
少しでも減らせれば  
いいんだけど

どうすれば  
いいんだろう……

みんなが  
もう少し仲良く  
やっていくには  
どうすれば……

おっすい  
睦月くん  
いる？

喉かわいちゃった  
いつもの  
おねがーい

あ……はい

エンジユが  
大型のバネイリと  
戦って十日がたった

これまで住んでた  
マンションは  
そのとき  
半壊しちゃって

しかもFeTUSや  
魔族に居場所を  
知られてしまったので  
この平屋のポロ家に  
引っ越したんだけど……







水…持って  
きましたよ

びしょびしょ

ちがふ…

え〜？  
ビールが  
いいなあ

ダメです

厳しいのね  
パパったら

そこからじゃ  
届かないわ

ごめんな  
さっさと  
持ってきな  
よ♡

ドキ

な...なんで  
こんなこと.....

はあ..

そーそー  
そんな感じ  
若返るわあ♡

ホラ  
前も洗って♡

わわっ

.....で??  
学校は  
どんな感じ?

やっぱり  
すごい身体  
してるなあ

綺麗で.....  
.....エッチで



魔族のルシア君と  
FETUSの  
マキナちゃん

仲良く  
やれてる？

あ……

お風呂に呼んだのは  
インシュ抜きで  
僕と話すために……

……言っ  
て  
ごらんさい  
怒らないから

君が  
思ってること  
全部

本当に蛇眼を  
くりぬきたいなら  
二人とも何度か  
チャンスはありました

二人とも……  
悪い子だとは  
思えないです

……でもしなかった  
僕のことを  
狙ってるとは  
思えないんです

# ふとした疑問から



# 夜のお楽しみ!?

# 秋の夜長に



**如月珠音**  
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



その日の夜

たまには  
こういうのも  
いいわね



**如月鈴音**  
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



すけ

まくらなげ  
やろーぜ!



**真中**  
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。



えー今から…



今日こそその疑惑を  
晴らしてみせますから!  
真守さん!!

パジャマ  
パーティー?



そっ…ほらっ  
もう夏も終わり  
だし…っ

うちは  
女ばかりだから  
たまにはイベント的  
いいかなーって…



パジャマパーティー…  
…って何だ…?



ま  
いいんじゃない?

五杯目

よっしゃー!



**野球拳!**

大会をします!

なんで…?

# The. 巻き込まれ隊

# 後にはひけない



**真守**  
真中の姉。海外からやってきた謎多き女性。催眠術を使う。



**死神**  
如月神社に居候する死神。極度の対人恐怖症。



今日までの  
ぼうけんのきろく

ちょっと前！

東の地方勇者  
シエリオ・シエラは  
冒険終了の危機に  
あった！

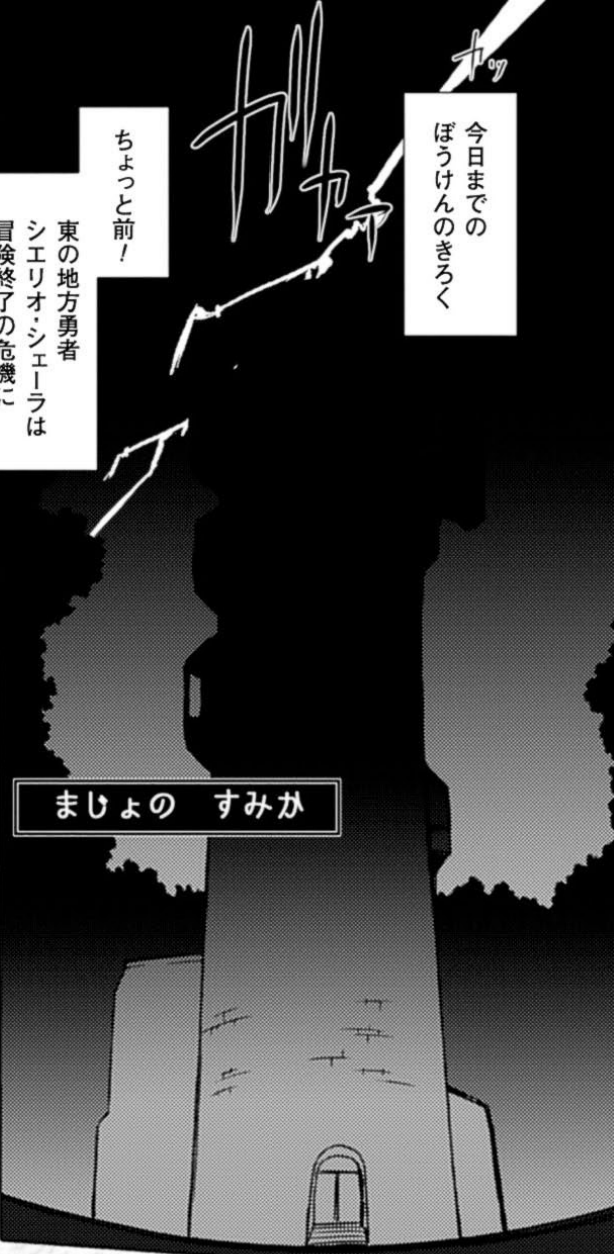
挑んでは破れ  
鍛えては挑み  
また敗れる日々が  
続いていたのである！

十二あ あああ

どか どかどか



ひやくカビン！



まじよの すみが



さもあろう  
敵は「世界十杖士」の一人

場末の娼館を訪れるように  
他所の国の後宮に出入りし  
傍迷惑な薬を作り  
夜の相手をさせるために  
悪魔を召喚し  
享楽を最良の友とする

その名は！



びくん

びくん

シルトラントおうじょう ちかしつ

ベルフエーベル・ペオル

グッ

ゆ

くそ……だめだ  
止まんねえっ

今度は  
このだらしねえ  
エロ乳だ……!

うるせえっ  
嬉しそうにしゃがって!

あッ  
痛いわあ







怠惰の魔女である！



ままったく信じられねえぜ  
何発飲み込んだら  
こんな腹になるんだよ

ガキがいる  
みてえだ

ん…のオ…くせに…っ  
まだしゃぶりついて  
きやがるなあ

なんてエロ穴だ  
くそっ



ゲフフウ  
エロい顔しやがって…!





前線帰りの  
しこたま溜めた  
12人のオーク海兵隊が  
全滅...!!

人間の女相手に  
オークが12人も...

あらん  
失礼

化け物か...!

# Lust Resort!!

ラストリゾート MISS BLACK ラストリゾート

# ラストリゾート

むう...  
怠惰の魔女...

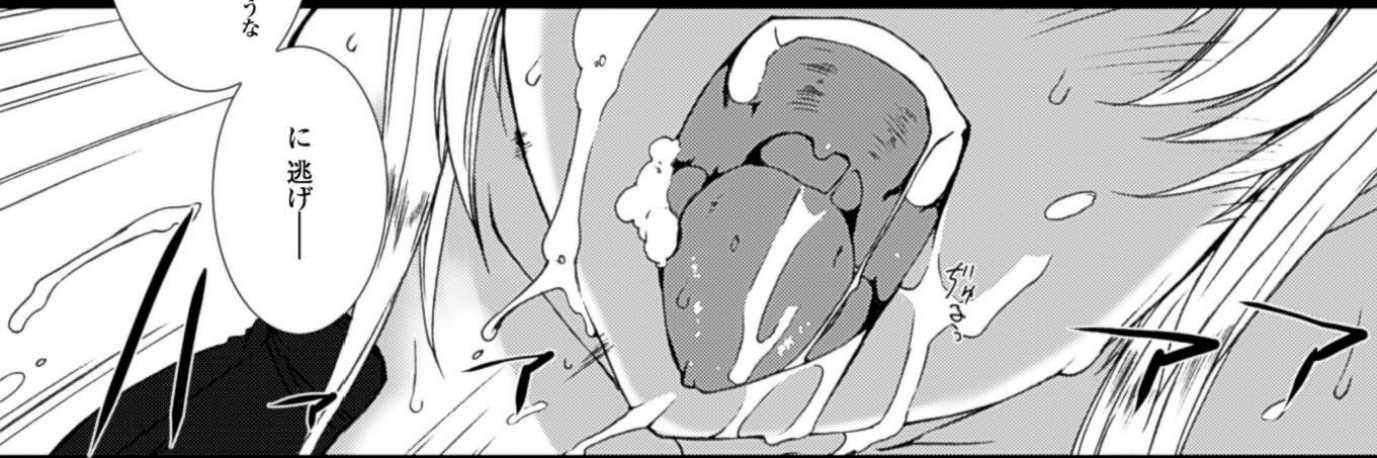
知っているのか  
ライオネル  
(デユラハン族  
180歳)!!

聞いたことがある…  
召喚術に応じた魔族が  
呼び出された先でひと月  
滅茶苦茶セックス  
させられたとか

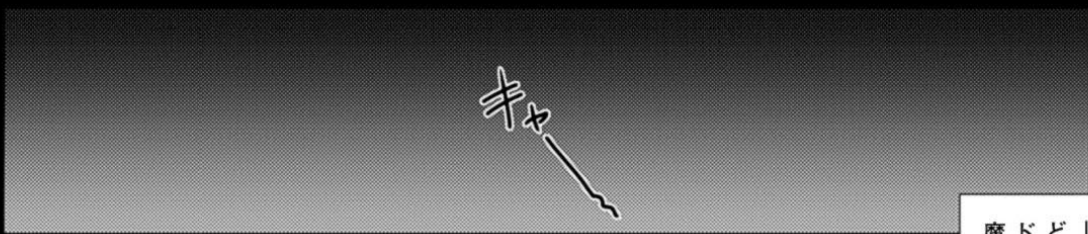
トカゲ野郎は  
どうしたんだ  
20！30匹いただろう

お前達が来るまで  
できたての種まで  
絞られてたよ

剛魔将がそれで  
軽いトラウマになるような  
初体験をしたとか  
それもう怠惰じゃなく  
色欲じゃね？  
などという…



に逃げ



—と言うような  
どうしようもない  
ド淫乱でイタズラ好きの  
魔女のこと

近頃聞かれる魔王復活の噂も  
コイツが流してるんじゃないか  
と疑った勇者シエリオは  
仲間のモンクを伴って  
確認に向かい

犯人でなければ  
協力を求めようと  
考えた！

結果！

1/10 = 3+

ふわああ…  
す…う…ら…

ししてほごう  
みんな…っ  
先回りしてえ…

気持ちいいか  
確かめるみたいに  
丁寧…に…っ

こんななの  
はじめて…!

気持ちいいの  
ガマンさせてもらえる  
なんて…いついっか  
決められるなんてっ

…じ自分で  
ガマンしなきゃ  
いけないなんてえっ…!



ゆうしやさま  
そんなに我慢  
なさらなくて…

こんな…  
ふきこぼれて  
しまってます

んうう…  
だだめ…こぼしちゃ  
勝手に出しちゃ…っ

約束…  
したから…っ!

ハハ

なんということでしょう

んぐんぐん

協力する代わりに  
勇者シエリオは一生分の精液を  
差し出さなくては  
ならなくなつたのです!



旅の末  
一行は魔王の軍と共闘し  
神聖帝国の侵略に抗う小国  
シルトランドに辿り着いたが  
そこで勇者を  
待っていたのは  
魔王となつた  
姫君だったのである!

そのヤケ気味のは  
まだお続けに?

が魔王は魔王でも  
別の魔王で  
件の魔王とは  
関係なかつた!

そのヤケ気味のは  
まだお続けに?

いいじゃない  
グチったってー



魔王の前に立ちふさがったのは、セーラースーツのイシユア!?  
むっちり熟れた肢体をエロ衣装で飾った砂漠の女王も、魔王により、

洗脳寝取られ完了!

# イセリア 英雄戦記

the legend of the Acerpa war

第34話

クレオラ陥落  
～メイズ完全解放～



「魔王様、クレオラの魔法兵たちが引き上げていきます。どうやら城に籠城する構えのようですわ」

場所はクレオラの首都【エルセポリス】の近くに据えられた魔王の陣。灼熱の風に舞う砂塵ばかりのその陣で、金髪の女騎士……エルス・マイハム・デルトが、浅黒い肌に鋭い瞳を備えた美少年に告げる。

女性にしては長身である彼女。その腰ほどにしか満たない、まだ幼い容姿の少年に、エルスは膝をつき、深く頭を垂れている。

その姿は、彼女がイセリア公国の騎士団長であったとは到底思えない光景だ。

「ふふ、さすがの砂漠の女王も魔王様の威光の前では、あまりに無力……。魔王様のお手を煩わせる必要はありません。このドーラが、アフロディテの紫電をもって、城ごと吹き飛ばしてみせましょう」

かつて大陸はおろか、上位魔族の間にすらその勇名【女王の盾】の名を響かせた英傑、イセリアの元大騎士団長であるドーラ・ウォールドラゴン、エルスと同じように、魔王と呼ばれる少年に頭を深く垂れている。

「ふむ、報告ごころう。それにしてもお前たち、が我に跪くとはな……く」

ニヤリと口元を歪めながら、美少年の姿をした魔王は、自らに跪くふたりの美女を見下ろした。

彼女たちが受け継いだ神槍【セルフエザール】、聖剣【アフロディテ】。

かつて英雄王の時代に、天地を等しく殺戮と悦楽に墮とそうとした魔王の所業を阻止すべく、この世界に住まう者たちが一致団結して作り上げた武器。天空の技術によって形を成し、精霊たちの理力を吹き込まれ、そして人間の思念によってその威を具現化させる。対魔王戦の装備——「宝具」と呼ばれる数多の伝説を帯びた業物だ。

その力は、四百年前の「英雄戦争」で、劣勢だった人類に起死回生の力をもたらし、魔王からすれば、自らの野望を打ち壊した忌まわしき兵器だ。

（私の系譜を模倣する淫祇邪教……その肉欲の力で「宝具使い」を牝奴隷と化し、我を復活させた後に打ち倒す……。しかしあの女、そう単純ではない）

魔王を復活させた淫祇邪教——その教団の実質的支配者であるエバとかいう女の、奥底に潜む黒い雰囲気は、純粋な魔王崇拜者とはまるで別物だ。

と同時に、魔王打倒の切り札である「宝具使い」、全部で七人の内、ふたりを快楽洗脳しておきながら、瞬時に反旗を翻すわけでもなく、こうして魔王のもとへと自身の強力なカードを手渡してきた。

（くく、エバ・グラマトン……食えん女だ）  
見目麗しきふたりの女騎士を見下ろしながら、魔王は胸の奥で微笑んだ。（まずはメイズを解放し、私の力を戻

してから、またあの女の出方を見てみるか。それにあの男の子種も、アリオナ以外にまだ残っているようではあるし……。なにより……）

魔王は後ろを振り向くと、遠く東の果てを見詰めた。

「我の子孫がいるとはな。しかもかなり濃い因子を受け継いでいるようだ。上手く気配を遮断したつもりだろうが、いざとなれば、乗っ取ることもできようか。ふふふ、おもしろい。……であろう？ 現代の「宝具使い」どもよ？」

そう不敵に告げた魔少年は、言いながら右手でエルスの爆乳をギュームリツと、乱暴に鷺掴みにし、ドーラの淫裂に左手の中指とひとさし指を、ズブリと突き入れる。

「んはあつっ！ ま、魔王様あ。き、気持ちよすぎますわあつっ！」  
「おほおおつ！ 奥いっ！ 変態ドーラの牝マンコ感じすぎますうっ！」  
騎士の身でありながら、邪教の牝奴隷へと墮ちたふたりの鎧を、魔王はいつかなる時でも弄べるよう、胸当てを外し、股間部は大きく切り開くように命令している。

彼女たちのまともな思考が表に出てくるようならば、仇敵による恥辱は堪えがたい屈辱だ。  
しかし理性とプライドを淫靡な快楽によって深く押し込められた現状では、彼女たちはその媚薬漬けの発情女体を、悪しき官能に悶え悦ばせることしかできないうい。

「おつ、おおつ……！ ふおおおつっ！」  
「イ、イクッ！ モ、モンスターたちの前で乳アクメ……きますわあつっ！」

牝の快感に、プライドを忘れ、腰をガクガクと前後させるエルスとドーラ……イセリアの誇り高き女騎士たちの心と身体を弄ぶように、ふたりが絶頂に達する寸前を見計らって、魔王はその指責めをやめてしまう。

「あ、ああつ……ま、魔王様。そんなひううっつ」  
「も、もう少しでイケましたのに。私……も、もうっつ！」  
眉毛を下げ、切なげな声をあげながら、サディスティックな魔王の焦らし責めに、騎士としてあつてはならないマゾの快感に打ち震えるふたりだ。

「ふふ、自らの役目も忘れた憐れな牝豚どもよ。しかし……、どうやら我に謁見したい者がいるようだな……」  
言った魔王は、獲物を見つけた捕食者のように、瞳を鋭く細めて、陣の正面を見据えた。

「ぎゃあああつっ！」「魔王様くっつっ!!」「なんだこいつは!! 本当に人間……ぐあああ!!」

魔王の本陣の前衛に配置された、解放済みのメイズから出現した何百何千というモンスターの群れ。  
それらが突如発生した砂漠の暴風に吹き飛ばされ、なぎ倒されるように宙へ舞い上がり、無残な悲鳴と血みどろの肉片となって、乾いた砂漠に降り注ぐ。

やがてその嵐は、本陣の魔王の眼前に迫ると、その暴風をバツと自ら消し飛ばし、ひとりの妙齡な女性が、魔王の前に現れる。

「妾はクレオラ砂漠都市の女王、イシユア。魔王とその眷属どもよ。妾がいる限り、メイズの封印は絶対に解かせません！」

「ほう、女王自ら私の前に立ちほだかるか。人間にしては、かなり強いな。兵を退かせたのも、己が全力を出すためだな？」

「ええ、そうです。他国からの侵略やはぐれ魔族ならともかく、あの魔王と戦うのであれば、並みの人間には敵わぬこと。あなたを倒すのは、妾のような宝具使いの役目！」

そう高らかに宣言したイシユアの雰囲気は、かつてセリーヌたちが交渉に訪れた時に垣間見た、おっとりとした優しいものではない。

ましてやジユダの性奴隷となつてしまった淫らな女とはまるで別の……まさに救国の地母神と呼ぶに相応しい神々しさを、その豊満な肉体に備えている。

その手に握るのは、伝説の宝具【アヌビスロッド】だ。

過去いかなる魔術師が到達できなかった、世界の法則すら操ることができるとされる魔術師の杖は、魔王に抗する圧倒的な法力を、イシユアにもたらす。

年齢を重ねて、むつちりといやらしく熟されたイシユアを包むのは、莫大な魔術を最大限引き出すための魔術様式が裏地に編み込まれた戦闘ローブだ。

しかもそれは、フェイエンのさらに東。極東の島国の匠によりアヌビスロッドの持ち主用にデザインされた特注衣装——【セーラーズーツ】だ。

頭部には美しい金色のティアラがはめられ、艶のあるセミロングの髪型と相まって、魔法戦士の顔を持つ、イシユアの凛とした魅力さをさらに引き立てる。

艶めかしい鎖骨のラインを露わにした、特徴的なVの字を描く襟は光沢のある黒。襟の下には紫紺色の、大きなリボンがついており、イシユアの女王の威厳に、女性らしい可憐さを加味している。

そして襟を除いた上半身のレオタード状のズーツは、イシユアの硬い貞操を誇るかのような純白だ。

熟れたスイカの大きさと、いまだ垂れることのない完璧なバストラインを誇る爆乳が、紫のリボンを大きく盛り上げる。

悩ましい大人の乳房のすぐ横で、ズーツ袖が切られており、本人も知らぬままに、成熟した牝の濃厚フェロモンを放散させる、女王の腋が丸見えになっている。

イシユアの年齢相応の色香を強調する、扇情的な上半身のデザインに劣らず、ジユダを産んだ魅惑の腰回り、

きつく股間に食い込んだ白いレオタードが覗けるほどの、きわどいミニスカートをもとっている。

子持ちの未亡人でありながら、きめの細かい肌をもつ、すらりとした長い脚は、光沢のある黒い鋭角なブーツをはいている。

（んっ……ああ、まだ学生だった時と比べて、うう、少しきついですね。伝説の宝具ですから、いきなり破れたりほしくないでしょうが……身体のおちこちに、食い込みます……っ）

愛を知り、子供をひとりもうけ、女として完熟の絶頂を迎えた悩ましすぎる肉体に、十代の乙女ですら恥ずかしかるような、きわどいセーラーズーツがびつちりと張りついている。

しかもそのサイズは、まだイシユアが純潔の乙女だった頃のもので、結婚し子を産み、妖艶な♀女となった今では、はち切れんばかりにピチピチになつてしまっている。

アリオナに勝るとも劣らない爆乳は、人目をばばかることなく、ボンッと突き出ている。

きちんと引き締めながら、年齢を重ねたおいしそうな媚肉が乗ったウエストから、再びボンッと漏れ出たヒップラインは、むしろぶりつきたいくらい脂の乗ったものだ。

威厳ある女王——子供をひとり産み落とす未亡人の大事な部分、今にも露わになつてしまうのではないかと注視せざるを得ないほどにきつく切れ

込んだハイレグ。

ズーツと伸びた褐色のおみ足は、細すぎず太すぎずの母性的な美脚でありながら、見る者に背徳的なマゾの快感を目覚めさせてしまいそうな、攻撃的な雰囲気も隠し持っている。

「魔王様。ここは私たちにお任せを」

「いい年した女王様がご無理をなさる場面ではありませんわよ？ わたしのセルフェザーで……串刺しですわっつ！」

ビュンツ！ と一陣の風が疾り、聖槍を構えた金髪的女騎士の姿が掻き消える。

「アフロディテ——魔力解放！ 秘剣・グラディウス!!」

最大数千メートルにまで瞬間的に伸びる紫色の剣気が、わずかに数十センチにまで圧縮されたエネルギーの刃が放たれる。

誇り高かつたふたりを支配しているのは、主である、エバールグラマトンの『魔王を守護せよ』という抗えない絶対服従命令のみだ。

「淫らな快楽に飲まれた者たちよ。妾が操る不死の軍勢の前に、ひれ伏しなさいっ！ 【光霊空間】！」

ふたりの攻撃が届くより先に、イシユアが掲げたアヌビスロッドが、まばゆい魔術の光を放つ。

瞬間、それまで広大な砂漠だった場所が、周囲に山や川や岩さえも存在しない、薄暗い空間へと変貌する。

しかもこの空間内でのイシユアの魔

力は、現実空間のものより数倍も上昇しており、なおかつエルスやドーラは十分の一以下に。魔王ですら半分ほどにまで、その暗黒の力を減じられている。

ふたりの女騎士が舌打ちとともに唇を噛む中、少年姿の魔王だけが、感嘆の声を発した。

「ほう、聖なる者に圧倒的な優位性を与える、光霊空間か。年齢を考えない露出狂かと思っただが……さすがは【スヘルマスタール】の宝具使い。搦め手はお得意のようだな」

「魔王が復活したのであれば、今一度倒すしかありません。亡き我が母より受け継いだこのアヌビスロッドと、その力……魔王、覚悟っつ!!」

叫んだイシユアが、ふくよかな唇を上下に動かすことなく、自らに付与した【風の魔術】で、身体を宙に浮かせ、魔王のもとへと猛スピードで突進する。「詠唱なしの思考発動ですっつ!!」

魔王様……わたしの後ろに……っ!!  
「くっ、魔術師ごときに我が剣が……うぐっ、くふうううっ!!」

まだ宝具と、その身に宿る特殊能力を使いこなせていないエルスだけではない、すでに聖剣の力を熟知しているドーラでさえも、まるで赤子の手を捻るかのよう、イシユアが召喚した無数の鎖によって捕縛される。

「無駄です。マイハの血族や女王の盾といえど、この空間の中では、妾の勝

利は揺るぎません!」

「ふふ……っ」

障害を取り払ったイシユアが、そのきわどい魔法スーツに包まれた女体を、魔王の前に躍らせる。右手に握ったロッドにはめられた最高純度の魔法石が、碧色の光を放ち、イシユア最大の破邪の術式を構築する。

しかし魔王の笑みは消えない。イシユアは構わず、全身全霊の殲滅魔法を発動させる。

「滅しなさい、魔王! 【魔の終焉】カッツ!! スヴァアヴァアヴァアツツ!!」

漆黒の空間に走る幾筋もの閃光。その数千を超える灼熱の光矢が、悪しき者の魂までも塵にするイシユアが誇る最大最強の破邪の魔法だ。

自身の力を高めると同時に、魔の者を弱体化させる光霊空間。そしてクレオラのメイズがまだ解けていないため、いまだ完全でない魔王ならば、消滅させることができる——はずだった。

「な、なぜ……ですっつ!!」  
驚愕の光景に瞳を開くイシユア。先ほどの魔法は、宝具の力を引き出した最大威力の魔法だった。都市を灰燼に帰し、凶悪な魔竜を数千回は絶命させるその威力を受けてなお、魔王は傷ひとつなく、こちらを冷たい瞳で見詰めている。

「ふふ、宝具を持つに相応しい使い手だ。しかし今の我にはギユスターヴァから奪った英雄王の力が宿っている。自慢の光霊空間も、破邪の力を源とする

力を減ずることはできなかったということだ。我を倒した勇者の力に邪魔されるのは、惨めだな砂漠の女王」

「くっ……そんな……英雄王の力をも取り込んでいたなんて……」

人間側の希望であった勇者の力をも、魔王が吸収していた事実、イシユアは唇をきつく噛む。

しかし今イシユアは、ただの少女ではない。愛する夫の遺志を引き継いだクレオラの女王であり、一児の母なのだ。誇り高い心の強さは、若い時の比ではなかった。

「妾はまだ負けていませんよ、魔王。この空間こそが堅牢無比な監獄。たとえあなたがどれほどの力を持つとも、妾の意志が折れぬ限り、あなたは永遠にここに閉じ込められるのです!」

そして、自分の意志は決して折れることはない。  
亡き夫が守り、愛する息子が生きる世界の秩序を、魔王に汚させるわけにはいかない。

「ほう、それこそが奥の手か。おもしろい、ほんのわずかだが驚いたぞ。つまりこの監獄から出るには、お前のその気高い心を屈服させねばならんということか、ふふふ」

魔王の瞳が余裕を湛えたものから、他者をねじ伏せることに至上の快楽を感じる真正のサドのものへと変わる。魔王が手のひらを掲げると、突然闇

より現れた怪しげな器具によって、魔法スーツ姿のイシユアが拘束されてしまった。

「うぐっ、なんでですかこの気持ち悪いものは……!! う、動けない……っ!!」

イシユアを捕えたのは、機械的な拘束椅子だ。しかし腰かける部分は初めからなく、まるで磔の十字架のような背もたれ部分から、手枷、足枷がそれぞれ生えている。

それらがイシユアの華奢な手首と、むつちりとした両脚にはめられている。太腿に至っては、女王への扱いとは到底思えない、恥辱のM字開脚を強制している。

とどめに、惱ましいミニスカートの下から、まるで股間をまさぐるように無機質なアームが入ってくる。

その先端に取りつけられた奇妙なカパーが、ミニスカートの中に隠されていた、イシユアの股間部に、純白のハイレグスーツの上から、熟れた女肉にきつく密着するように、ギチュリっとはめられる。

「バンドベルグ陥落時に接收した、女を調教のために拘束する器具だそう。我に歯向かったのだ。肉体だけでなく、精神まで跪いてもらわなければならぬ。イシユアよ、せいぜい堪えてみせよう」

魔王が言うと、鎖から解放されたエルスとドーラが無慈悲に、拘束椅子のスイッチを入れる。瞬間、キチュキチュ……という、イシユアが普段聞きな

れた

れない機械の駆動音が、虚無の空間に不気味に響いた。

「機械などに妾が屈すると本気で……!? んっ、く……ふっんんっ!」  
拘束はされたが、心理的な優位を保とうと、女王らしく毅然と魔王に告げるイシユア。

しかしそれを遮るように、拘束具から現れた無数のマジックハンドによって、セーラーズの上から、股間はおろか胸や唇、お尻に腋までと、全身くまなく、べつとりと媚薬を塗り込まれていく。

高い魔力防御を持つセーラーズの上からでも、媚薬は深くイシユアの褐色の地肌目指して浸透していく。

「ふううっ! あうっ、くふ、おおっ」  
スーツから肌、その汗腺からイシユアの女肉や血液に至るまで、魔性の媚薬が滲んでいく。

女王の呼吸が、徐々に惱ましく、牡を誘う牝のものへと変わるのを、イシユアは懸命に唇を噛んで、魔王に聞かせまいとする。

しかし女王の誇りだけではどうにもならない、男の味を知るエロティックな女体は、媚薬が体内に染み込むと、大量の汗を全身に滲ませる。

機械に拘束されたセーラーズ姿のイシユアが、見る間に香り立つ牝の匂いを、顔や胸、丸見えの腋や、ミニスカートの中の股間から、ムワッと放散させる。

(わ、妾は発情している!? こんなく

スリなどに……くううっ!)

女の抗えない淫らな本能を愉しむ魔王の所業に、苛立ちと悔しさが募っていく。

「まずは下ごしらえだ。その熟れた身体、さらにじつくりと快樂の炎であぶってやるう」

「んふっ……はううっ! ふひ……いんっ!」

(こ、この媚薬……っ!? 強力すぎて……おおっ!)

性に寛容なクレオラでは、快感を軽く引き上げる程度の媚薬は市場で普通に流通している。それにジユダもよく使用してくれた。

しかし今、全身に塗り込められているのは、イシユアが今まで経験してきえ思える魔性の秘薬だった。

「上位魔族からも危険種扱いされる淫魔獣の体液で作ったものだそうだ。身体の内側から女を牝に変えていくぞ。スレアめ、やればできるではないか」

「おっ……ああ、やめるのですっ……そこは……っ。んぐうううっ!!」

魔王が手をかざし放った魔力の塊が、イシユアの爆乳を直撃し、スーツの胸の部分が破れ飛ぶ。

忌むべき魔王たちの前に露わになった、いまだ一ミリも垂れていない抜群のスタイルを誇る美巨乳を恥ずかしながらより先に、リボンを押しのけた円筒形の透明な瓶が、その乳房にかぶせられてしまう。

まるで牝牛の搾乳瓶のようなふたつのカップの中ほどから、細い注射針が伸びてくる。その針は、媚薬効果です

でにギンギンに勃起している、うす茶色がかつた経産婦乳首の先端に、容赦なくプスリッと刺し込まれる。

「ま、まさか乳首にまで……っ!? んあつ、くつふうううううっ!!」

イシユアの予感通り、勃起乳首に注射された針から、先ほどの媚薬がジュブウツ……と、とめどなく注入されていく。

(あ、熱いつつ! なんですかこれはっ!? 乳首が……胸全部が、ぐちゃぐちゃに蕩けてえっつ!!)

まるで乳房が、股間の性器に変貌していくようだった。乳首だけでなく、たつぷり牝脂肪が詰まった乳肉全部が、たまらない快感電流を放出しつばなしになっている。

ジユダに調教され、胸でも十分な性感は感じられると思っていた。しかしクスリを注入された瞬間、まさに膣道に硬く太い肉棒を突き入れられたかのような、甘く、女の欲求が燃え上がるような痺れが、イシユアの理性を直撃した。

「感じているな。さぞや気持ちよからう、なあイシユア?」  
「はあ、はあ……だ、誰が気持ちよくなどっ! 妾をこの程度で墮とせるなど、思わないことですねっ! んくっ、あなたは一生この空間から出ることは……んひいっ! できま、せ

んっつ!」

イシユアは眉間に力を込めて、魔王である少年をキッと見据えた。

(ぜ、絶対に快樂などには……あ、ああつっ! 今度はクリトリスにいいつつ!!)

イシユアが揺るがぬ決意を固めた瞬間、ハイレグの上からはめられていたカバールの先端からも注射針が伸びてくる。

そしてセーラーズを押上げるように、硬く起立していたイシユアの勃起肉芽の中ほどに、迷うことなくプスリッ! と媚薬針を刺し込んできた。

「おおっつ! くううっ! ま、負けませ……こんな卑劣な……んふううっつ!」

高貴な女王の意志とは裏腹に、媚薬をクリトリスに注入された瞬間、待ちきれなくなつた股間の女華の間から、ジワリと熱い牝の汗が滲み出てしまう。

その熱い屈辱の感覚をM字開脚を強要された肉厚のヒップで感じながら、イシユアは絶対に快樂に屈しないと、再度心に誓った。

「はっ……おおっ! くふううっ! こんな……こほおおっ!」  
クスリを塗られてから、まだ十数分しか経っていないのに、もう何時間も焦らされたかのように、全身からムワツとした牝の汗が湧き、魅惑的な女体の芯から疼いて止まらない。  
ジユダをご主人様と認めて以来、彼

の命令以外では決して濡らさないようにしてきた女性器が、イシユアの意志とは無関係に、牝の官能を開花させている。

ひらひらのミニスカートから覗く、切れ上がったハイレグコスチュームに、熟した発情ワレメのいやらしい形がくつきりと浮かぶ。

暗い異空間に、熟成された牝の発情臭が充満していく。

「んぐうっ。この程度のことです……妾をつ。ふうっ、ほおおんっ……っ」

『下ごしらえ』という言葉など生ぬるい。常人ならばすでに理性が焼け焦げ、魔王の性奴隷に堕ちているほどの劣情が、熟成された美体を煮えたぎらせる。

しかしイシユアの強靱な意志は、どうにかギリギリのところで、女の恥辱を堪えしのが。

「やはり屈せぬか。さすがは砂漠の女王。しかし声がまるで獣のようだぞ、それにいい身体になったものだな」

魔王の言葉に、イシユアが改造させられてしまった、自身の乳房を悔しそうに見詰める。

（わ、妾の胸が……っ。乳首があっつ!!）

スレアが開発した新娯楽の効果はさまざま、母性の象徴であるイシユアのふたつの乳首は、今や少年のペニスほどの大きさにまで肥大化していた。

しかも乳房に無数に走る快楽神経も、その感度を大幅に増加され、まるで剥き身のクリトリスのような、ジンジン

とした熱い牝の熱を、イシユアにもたらし続けている。

全身から噴き出る欲情汗と、今なお塗り込まれ続ける娯楽によって、年齢を感じさせないきめ細やかな褐色の肌が、てらてらとした悩ましい光沢を放っている。

「おやおや、女王様ともあろうお方が、敵の眼前だというのに、本気で感じているとは」

「なんですの、この変態乳首は？ まるでチンポのようにヒクヒクさせて。オバサン、少々我慢が足りませんわねえ」

「やめるのですっ、そこは……っ！」  
同性であるドーラとエルスに嘲られ、イシユアの心に恥ずかしさの炎が噴き上がる。

乳首のカバーがドーラによって外されると、胸の部分だけが破れた扇情的なセーラーズーツから、改造された勃起乳首と、それを支える感度抜群の爆乳がズシリとその量感をさらけ出す。

「うふふ、すごい乳首ですわ。わたし、自分のフタナリペニスで、殿方のオナニーを熟知しておりますのよ。この変態チンポ乳首ちゃん、触られたくて、ピンピンしてますわあ」

イセリア騎士の名門マイハ家の令嬢であるエルスが、ニタリと微笑み、その若々しい美貌にサディスティックな色を浮かべる。

「い、一介の女騎士が女王の妾に手を触れるなど無礼な……っ。んぐふうう

っ！ ふ〜、はひっ……おおっ！」

エルスの右手が、まるでガチガチに膨らんだ男根にするように、イシユアの右の勃起乳首を根元から握りしめる。

そしてシュシュッ！ と小刻みに右手を前後に動かすと、人肌でこすれあつた快感乳首から、理性が弾けんばかりの官能が発生する。

「あらあら、こんなにビクビクして。すごい感じよう。まるで童貞チンポですわね」

「ジュダ王子を産んだのだから？ ならばこうして吸われたりしたのだからなあ？ ジュルル、ズベジュウツ。ん、くちゅくちゅっ、じゅずりゅうううっ!!」

エルスに続いて、愉しげな表情のドーラが左側の乳首を、ふっくらとした口内に咥え込む。そして口の中で勃起乳首に舌を這わせ、顔を前後に動かしながら、思いきりイシユアの乳首を吸引する。

「そ、そんなっ?! 女性におっぱいを吸われるのが……ああっつ!! こんなに……くっ、ふんっ、ほ、おおんっつ!!」

ドーラとエルスによって、勃起乳首を男根のごとく責められると、えも言われぬ劣情が褐色の肉体全部を駆け抜け、牝豚のような嬌声を放つてしまう。

「はあはあ……む、無駄ですよ。妾は決してあなたたちのように快楽に屈したりなど……おおっ、しませんっ!!」

それでも、狂おしい快感のマグマの中、イシユアは声を出すことを可能な限り堪え、ビクビクと震える女体の反応を、女王のプライドで抑え抜いている。

「ふふ、そうだ堪えろ。せっかくの余興だ。我を楽しませるのだ、イシユアよ」

「よ、余興……っ?! く、誰があなたなどを……ひぐうっ?!」

はあはあ甘い息を漏らしながらも、キツと魔王を見据えるイシユアに、さらなる責め苦が加えられる。

拘束具の上半身側から、股間に張りついてきたカバーが外れ、その代わりに新しい責め具を備えたアームが、イシユアの前に現れる。

「こ、これは……?! こんな醜いモノを妾に……っ?!」  
イシユアは落ち着いた口調で発しながらも、その心は、現れた新たな淫具に動揺していた。

それは人の腕ほどもある巨大な張り型だった。しかも先端から根元に至るまで、ゴツゴツしたイボがびっしりと生えている。さらに用意された張り型は前後二本にセットされたものだ。

（ま、まさかお尻にまでコレを?! は、入るわけありませんっ! で、でもなぜなの?! アソコが、お尻まで勝手に疼いてええっ!）

ジュダとのセックスで、大人の玩具を使用されたことはあるが、こんな凶悪なものを見たことがない。

しかし理性では恐怖を感じているのに、媚薬を染み込まれた女体は、まるでソレを望んでいるかのような状態で、ショーツをつけず、直に股間に密着しているセーラーズーツの生地の下で、イシユアの意志に反して、ビクビクとふたつの牝穴が淫らに蠢動しているのが、悔しいほどにわかる。

エルスたちに扱われた乳首も、いまだ女の絶頂に昇り詰めていないため、気が狂いそうなほど、ジンジンと熱い発情の電流を送ってくる。

漏れる吐息は、隠しきれないほど濃厚な甘さを含んでおり、出産経験のある膣穴からは、プシュプシュと恥知らずな本気汁が、垂れ落ちてくる。

「もう身体のはうはすっかり出来上がっているようだな。さて、どこまで堪えられるか。楽しみだな、イシユアよ」

魔王の声とともに、M字開脚の完熟Vラインにきつく切れ込んだセーラーズーツを横に押しつけ、露わになった満開に開ききつた肉ピラ……そして艶めかしく皺のよつた女王アナルに、容赦ない肉欲を植えつける。

ズブツツッ！ ジュニユウウツツッ！  
「んほっ。おおおっ！ くひっ、いきなりいっ……子宮、奥までええっつ！！」

機械的に一切の容赦などなく、ズズンツツッ！ と思いきり牝の二穴を巨大パイプに挟られ、激しく突き上げられる。

すでに魔媚薬によって、焦らしに焦らされきっている膣肉、そしてジュダによつてすでに開発されていた不浄の腸壁に、脳髓を湧けさせんばかりの膨大な快楽電流が走り抜ける。

「いぎいひいっ……はあ、ううっ……。おおおっ」

それまで頑なに官能を堪え抜いてきたイシユアの美貌が、一瞬だが女の快感に緩み、魔王に向けて開け広げられている膣穴から、プシュウツツッ！ と濃い本気汁が飛び散ってしまう。

「挿れられただけで軽く達するとは、クスリが隅々にキマっているようだな。ではこれからお前を、女王ではなく、我がもたらす快楽にのみ忠誠を尽くす牝豚に調教してやる。身体だけでなく、心までもな」

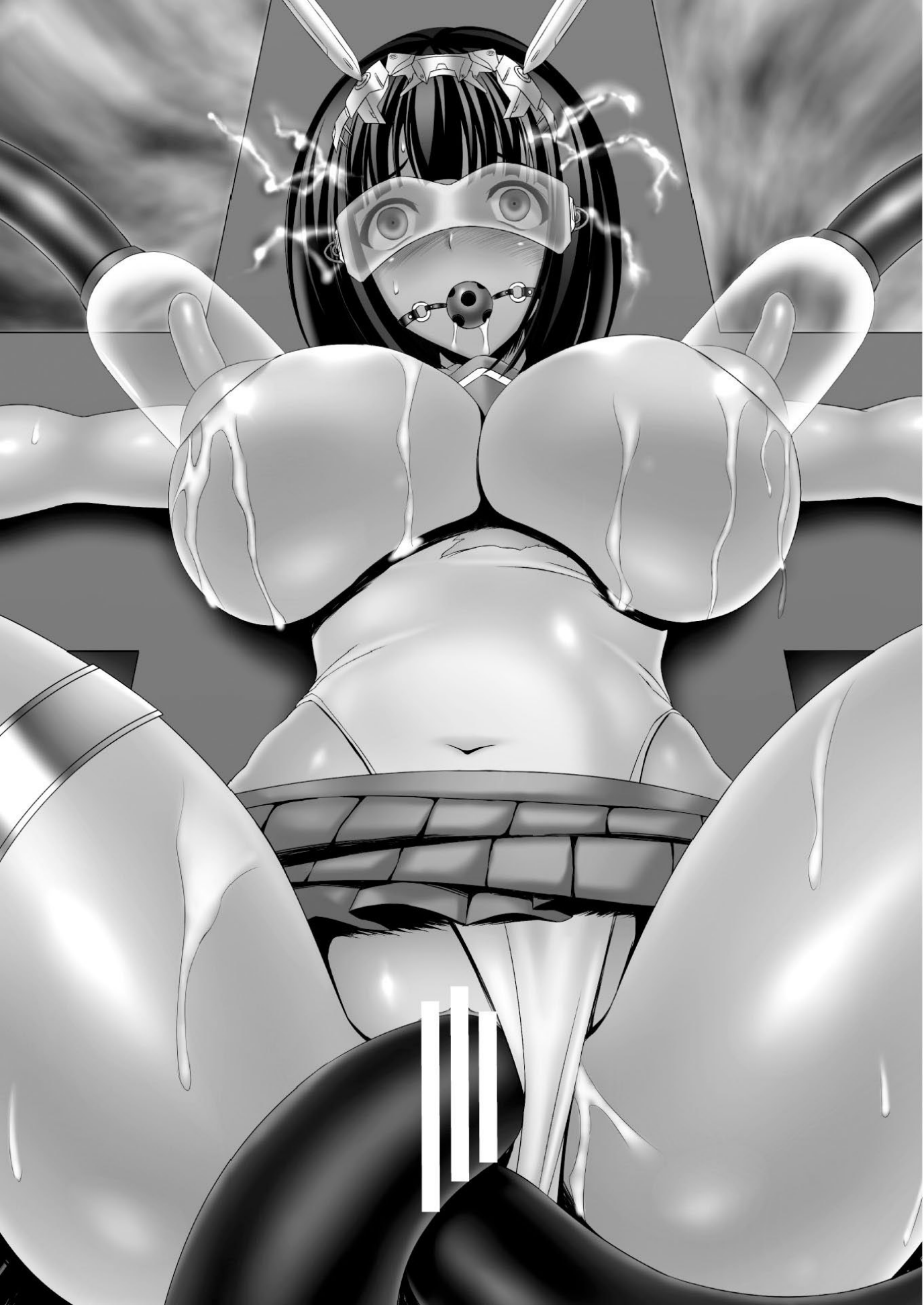
魔王の言葉と同時に、まるでカチューシャのような器具が、イシユアの切り揃えられた黒髪ごと、頭部にギチギチと装着される。

凜とした目元も、半透明なバイザーで覆われる。

そしてエルスが嗜虐的な笑みを浮かべながら、手元のボタンを押すと、二穴奥深くにまではめられたパイプが、強烈な音を立てながら、イシユアの女性器の中で猛烈な振動を始める。

同時に頭部にはめられた拘束具からは、激しい電撃がバチバチと危険な閃きを発し始める。

「ひぎつ、ああくっつ！ は、激し……。な、なんですこれ……はっ！ 我慢できな、おおっ……悔しいっ！ イ……イグ！ おおっほおおおおっつ！！」



|||

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**